４．　平成１9年度　開　講　科　目

A　共通科目

基礎科目　◇印は平成１７年度以降新設授業科目

系	授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
人間と文化	哲学	2	Ⅰ・Ⅱ	後期	金7	久保田　顕二	49	
	倫理学							非開講
	心理学Ⅰ							非開講
	心理学Ⅱ	2	Ⅰ・Ⅱ	後期	木6	杉山　成	49	
	教育学							非開講
	日本文学Ⅰ							非開講
	日本文学Ⅱ	2	Ⅰ・Ⅱ	後期	木6	中村　史	50	
	外国文学	2	Ⅰ・Ⅱ	夏学期	別途通知	鈴木将史	50	
	人文科学特別講義							非開講
	言語学	2	Ⅰ・Ⅱ	後期	木6	山田　久就	51	
	言語コミュニケーション論							非開講
	外国事情	2	Ⅱ					(注)
社会と人間	歴史学Ⅰ	2	Ⅰ・Ⅱ	夏学期	別途通知	荻野　富士夫	51	
	歴史学Ⅱ							非開講
	社会思想史Ⅰ							非開講
	社会思想史Ⅱ	2	Ⅰ・Ⅱ	後期	水7	西永　亮	52	
	政治学Ⅰ	2	Ⅰ・Ⅱ	前期	火7	相内　俊一	52	
	政治学Ⅱ							非開講
	社会学Ⅰ	2	Ⅰ・Ⅱ	夏学期	別途通知	宝福　則子	53	
	社会学Ⅱ							非開講
	社会科学特別講義	2	Ⅰ・Ⅱ	前期	木6	佐々木邦子	53	
自然と環境	◇数学Ⅰ							非開講
	◇数学Ⅱ	2	Ⅰ・Ⅱ	後期	水6	米田　力生	54	
	物理学Ⅰ	2	Ⅰ・Ⅱ	前期	月6	杉之原　立史	54	
	物理学Ⅱ							非開講
	化学Ⅰ							非開講
	化学Ⅱ	2	Ⅰ・Ⅱ	前期	火7	片岡　正光	55	
	生物学Ⅰ							非開講
	生物学Ⅱ	2	Ⅰ・Ⅱ	後期	水7	八木　宏樹	55	
	環境科学							非開講
知の基礎	総合科目Ⅰ	2	Ⅰ	前期	金7	倉田　稔　外	56	
	総合科目Ⅱ	2	Ⅰ	前期	火7	江頭　進　外	56	
	情報処理入門							非開講
	基礎数学	2	Ⅰ・Ⅱ	前期	火7	兼岩　龍二	57	
	基礎ゼミナール	2	Ⅰ	前期	水6	大津　晶　外	57	

系	授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
健康科学	生活と健康	2	I	後期	火7	田野　有一	60	
	予防の医学							非開講
	健康スポーツ a	1	I	前期	月6	田野　有一	60～62	
	健康スポーツ b	1	I	後期	月6	花輪　啓一		
	健康スポーツ e (水泳)	1	I	夏季集中		中川　喜直		
	健康スポーツ f (スキーI)	1	I	冬季集中		石崎　香理		
	健康スポーツ g (スキーII)	1	II	冬季集中		山本　哲二		
						山田　亮		
						堤　毅		

(注) 外国事情の単位については、学則第38条の規定に基づく学生の留学における単位互換認定に充てる。

B　外国語科目等
外国語科目

授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
英語IA	2	I	通年	月7		65	
英語IB	2	I	通年	金6		66	
英語IIA	2	II	通年	金7		67	
英語IIB	2	II	通年	金6		68	
ドイツ語I	4	I	通年	火6・木7		71	
フランス語I	4	I	通年	火6・木7		72	
中国語I	4	I	通年	火6・木7		72・73	

C　学科科目

経　済　学　科

講座	授業科目		単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備考
基礎経済学	基幹科目	経済学入門	2	I	前期	水7	中村　健一	77	
		経済理論	2	II	前期	木7	加藤　睦洋	77	
		経済と統計	2	II	前期	火7	遠藤　薫	78	
		経済史	2	II	前期	木6	平井　進	78	
	発展科目	経済思想史	2	III･IV	前期	火6	江頭　進	79	
応用経済学	基幹科目	応用ミクロ経済学	2	II	後期	火7	鵜沢　秀	79	
	発展科目	公共政策	2	III･IV	後期	火6	角野　浩	80	
		金融経済							非開講
		国際経済と現代							非開講
	基幹科目	経済学と現代	2	II	後期	月7	若井　克俊	80	
	発展科目	経済書講読 I							非開講
		経済書講読 II	2	III･IV	前期	月6	今西　一	81	
		経済学演習 I							非開講
		経済学演習 II							非開講
		経済学演習III	2	III･IV	前期	金6	和田　良介	81	
		経済学演習IV	2	III･IV	後期	金6	加藤　睦洋	82	
		インターンシップ	2	III･IV	通年	別途通知	遠藤　薫外	82	
		卒業研究	4	III				早期卒業者に限る	
	研究指導		8	III･IV	通年			141	
	卒業論文		4	IV	通年				

商　学　科

講座		授業科目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備考
商学	基幹科目	市場システム論Ⅰ	2	Ⅱ	前期	水6	高宮城朝則	87	
		市場システム論Ⅱ	2	Ⅱ	後期	水6	近藤　公彦	87	
	発展科目	金融システム論Ⅰ							非開講
		金融システム論Ⅱ	2	Ⅲ･Ⅳ	前期	火6	中浜　隆	88	
		国際市場論	2	Ⅲ･Ⅳ	後期	金7	穴沢　眞	88	
経営学	基幹科目	経営学原理	2	Ⅱ	前期	月7	小田　福男	89	
		経営管理論	2	Ⅱ	後期	木6	田中　幹大	89	
	発展科目	経営史							非開講
		現代企業管理論Ⅰ	2	Ⅲ･Ⅳ	夏学期	別途通知	岩田　智	90	
		現代企業管理論Ⅱ	2	Ⅲ･Ⅳ	夏学期	別途通知	牧田　正裕	90	
会計学	基幹科目	簿記原理	2	Ⅰ	前期	木6	坂柳　明	91	
		会計学原理	2	Ⅱ	前期	木6	福島　吉春	91	
	発展科目	財務会計概論							非開講
		原価計算概論							非開講
		管理会計概論	2	Ⅲ･Ⅳ	前期	金7	乙政　佐吉	92	
	発展科目	英語コミュニケーションⅠ							非開講
		英語コミュニケーションⅡ							非開講
		比較文化Ⅰ							非開講
		比較文化Ⅱ							非開講
		インターンシップ	2	Ⅲ･Ⅳ	通年	別途通知	大矢繁夫外	92	
		卒業研究	4	Ⅲ				早期卒業に限る	
	研究指導		8	Ⅲ･Ⅳ	通年			141	
	卒業論文		4	Ⅳ	通年				

企 業 法 学 科

講座		授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
基礎法	基幹科目	法学	2	I	前期	木6	道野　真弘	95	
		憲法 I	2	II	前期	木7	結城洋一郎	95	
		民法 I	2	II	前期	火6	林　誠司	96	
		刑法	2	II	後期	水6	一原亜貴子	96	
		行政法 I	2	II	後期	木6	今本　啓介	97	
	発展科目	憲法 II							非開講
		民法 II							非開講
		国際法	2	III･IV	前期	木6	佐古田　彰	97	
企業法	基幹科目	商法 I	2	II	前期	月7	玉井　利幸	98	
	発展科目	商法 II	2	III･IV	後期	月6	多木誠一郎	98	
		民事手続法	2	III･IV	後期	火7	河野憲一郎	99	
		経済法	2	III･IV	前期	金6	岡本　直貴	99	
		労働法							非開講
		社会保障法	2	III･IV	前期	月6	片桐　由喜	100	
		国際経済法							非開講
		国際取引法	2	III･IV	後期	木7	中村　秀雄	100	
	発展科目	インターンシップ	2	III･IV	通年	別途通知	多木誠一郎外	101	
		卒業研究	4	III				早期卒業者に限る	
	研究指導		8	III･IV	通年			141	
	卒業論文		4	IV	通年				

社 会 情 報 学 科

講座		授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
計画科学	基幹科目	統計科学	2	II	後期	月7	小笠原春彦	105	
		計画数学	2	II	後期	金6	中村　隆志	105	
	発展科目	オペレーションズ･リサーチ	2	III･IV	前期	木6	行方　常幸	106	
		社会計画							非開講
		計画科学	2	III･IV	前期	月6	石井　利昌	106	
組織と情報	基幹科目	経営システム基礎	2	II	前期	木7	持田　泰昭 阿部孝太郎	107	
	発展科目	プロジェクト実践論	2	III･IV	前期	月7	酒井　弘一 平沢　尚毅	107	
		組織情報論							非開講
		情報システム論							非開講
社会と情報	基幹科目	情報処理基礎	2	II	後期	木7	沼澤　政信	108	
		知識科学基礎	2	II	前期	金6	木村　泰知	108	
	発展科目	情報処理							非開講
		コンピュータネットワーク論	2	III･IV	後期	木6	三谷　和史	109	
		情報と職業	2	III･IV	前期	水6	小山　正芳	109	
	基幹科目	社会情報入門	2	I	後期	金7	大津　晶 木村　泰知	110	
	発展科目	インターンシップ	2	III･IV	通年	別途通知	佐山公一外	110	
		卒業研究	4	III				早期卒業者に限る	
	研究指導		8	III･IV	通年			142	
	卒業論文		4	IV	通年				

専 門 共 通 科 目

授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
人間と文化論							非開講
現代社会と歴史論							非開講
社会心理と政治行動							非開講
国際関係論	2	II	※国際連合大学の単位互換認定				
自然と科学							非開講
人間科学論	2	II	前期	火6	石崎　香理	115	
言語文化論	2	II	前期	水6	裴崢外	115	
研究指導	8	III･IV	通年			142	
卒業論文	4	IV	通年				

基 礎 科 目

科目名<Subject>	哲学 <Philosophy>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	久保田　顕二 <Kenji Kubota>		研究室番号<Office>	３４３
Office Hours	前期：金曜日 16:00～17:30、後期：水曜日 16:30～17:30			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

哲学(西洋哲学)の歴史を学ぶことを通じて、哲学の基本的な考え方を身に付ける。哲学の歴史は大きく、「古代」「中世」「近代」「現代」の４つの時代に区分されるが、今年度は近代哲学を中心に見ていく。それ以外の時代の哲学については、西洋哲学史全体の流れを通覧する際に概括的に説明するほか、近代哲学との関連でも、適宜、触れていく。

2.授業内容<Course contents>

⑴ 序論―哲学とは何か―
⑵ 哲学史の時代区分
⑶ 近代哲学の特徴
⑷ 大陸合理論の哲学
⑸ イギリス経験論の哲学
⑹ カントの哲学
⑺ ドイツ観念論とヘーゲルの哲学

3.使用教材<Teaching materials>

テキストは使用しないが、参考文献を随時紹介する。

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験の成績に平常点(出席状況等)を加味する。定期試験は論述式の筆記試験であり、そこでは、用語・事項の簡潔な説明を求める４～６題の小問と、比較的広範にわたる内容の理解を確かめる２題の大問とが出題される。

定期試験は、「授業ノートのみ持込可」の条件で実施するか、それとも「持込一切不可」の条件で実施するかのいずれかであるが、最終的にどちらにするかは、開講後の状況を見て判断する。なお、「持込一切不可」になる場合は、試験の直前の週に試験準備用のプリントを配布し、そこで、実際に出題される設問を含めた多数の設問を学生に提示しておく。（ただし、記載された設問のうちのどれが出題されるかは指示されない。）

試験成績の評価基準としては、例えば次のような点が重要となる。出題されたうちの何題について正しい答案を作成できたか、それぞれの答案がほぼ規定の分量に達しているか、答案の文章は明快で正確であるか、等。また、「ノート持込可」の条件で実施した場合は、ノートの記載事項をそのまま書き写さず、授業内容を十分把握した上で自分自身の文章で綴っているか、という点も重要。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

一応の目安は次のとおり。

秀(100～90)：出席状況が良好であり、かつ、定期試験においてすべての設問につき、規定の分量以上の正確な答案を作成し、なおかつ、その答案の文章が非常に明快であること。

優(89～80)：出席状況が良好であり、かつ、定期試験において大部分の設問につき、規定の分量程度の正確な答案を作成し、なおかつ、その答案の文章が十分に明快であること。

良(79～70)：出席状況がまずまずであり、かつ、定期試験において７割以上の設問につき、規定の分量程度の、ほぼ正確な答案を作成し、なおかつ、その答案の文章がまずまず明快であること。

可(69～60)：定期試験において６割以上の設問につき、規定の分量に近い、ほぼ正確な答案を作成し、なおかつ、その文章がまずまず明快であること。

不可(59～0)：以上の水準に達しないこと。

6.履修上の注意事項<Remarks>

断片的で雑学的な「知識」や「教養」を身に付けようとすることによりも、むしろ、思想的な内容を知的に把握したり、思想発展のダイナミズムを捉えたりすることのほうに、より大きな関心を向けてほしい。定期試験においても、細かな事項の記憶を試すようなたぐいの設問は極力出題しない方針である。

科目名<Subject>	心理学Ⅱ <Psychology Ⅱ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	杉山　成 <Shigeru Sugiyama>		研究室番号<Office>	心理学実験室
Office Hours	火　16:00～17:30			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

基礎科目では、心理学を初めて学ぶ学生のために、基本的な理論や概念の解説を行います。心理学Ⅱでは、パーソナリティ心理学・発達心理学の領域を中心に、考え方や行動の個人差と心理的適応の関連について解説します。基本的に講義形式で進めますが、必要に応じて、心理テストの実習やグループワーク等も行う予定です。

授業目標は次の２点です。１．心理学的観点を身につけることによって、主観や直感とは違った観点から自己を洞察する。２．心理的適応のメカニズムへの理解を通して、現代社会における逞しい生き方について考える。

2.授業内容<Course contents>

1. オリエンテーション
2. パーソナリティの理論：　自分を知るということ・類型論と特性論
3. パーソナリティの測定：　心理テストの形式と要件・テスト実習
4. ストレスと適応：　交流分析理論・セルフコントロールの方法
5. 人間関係の発展：　対人魅力・人間関係の段階モデル
6. コミュニケーション：　積極的傾聴の方法・対人葛藤の解決
7. ライフサイクルと適応：　ライフサイクル理論・キャリア意識の発達

3.使用教材<Teaching materials>

テキストは使用せず、適宜、資料プリントを配布します。

4.成績評価の方法<Grading>

学期末の筆記試験と平常点（授業内レポートの提出状況・内容）を総合して評価します。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

授業目標に対する 60%の到達度が合格ラインです。さらに詳細な「秀・優・良・可」の評価基準については、オリエンテーションの際に配布する授業計画書によって通達します。

6.履修上の注意事項<Remarks>

基本的な受講マナー（私語をしない、教室内を歩き回らない、携帯電話を使用しないなど）を守れない学生の受講は禁じます。

科目名<Subject>	日本文学Ⅱ　　<Japanese Literature Ⅱ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	中村　史　　<Fumi Nakamura>		研究室番号<Office>	４０５
Office Hours	面談を希望される方はまず電子メールにてご連絡ください			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この授業は題して「古典文学の世界」とし、日本の文学と文化の一端を知っていただく機会にしたいと思っています。日本の古典文学作品のなかでも、たとえば、『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』『大和物語』『伊勢物語』『竹取物語』『平家物語』『雨月物語』等のうちのいくつかを取り上げます。また、琉球の古典をも範囲とし、口承文芸をも視野に入れます。中国やそれ以外の外国文学の作品との比較の視点を持ちつつ授業を進めます。

2.授業内容<Course contents>

・オリエンテーション
・開闢神話――日本と琉球――　→『古事記』～『遺老説伝』
・海幸・山幸、または、ヤマタノヲロチ→『古事記』
・浦島の文学→『万葉集』～『御伽草子』～国定教科書
・一条戻橋→『平家物語』ほか
・生田川伝説→『大和物語』ほか
・『平家物語』の女性たち→特別編
・『出雲風土記』の世界→特別編
・その他
　＊履修者の状況を見て予定を変更することはあり得ます。

3.使用教材<Teaching materials>

テキストはとくに定めません。参考文献は授業中に紹介してゆきます。

4.成績評価の方法<Grading>

その方法については履修者の状況を見て最終的に決定します。基本的には定期試験、レポート、および小レポート（数回）によって評価する予定です。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

定期試験、レポートそれぞれにおいて、過半の評価を得ていること、授業中に適宜複数回課す小レポートにおいて過半の評価を得ていることが目安となる。さらに詳しいことは評価確定後、文書にて通達する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

履修者は古典文法を修得し、かつ古文・漢文をある程度以上読めることが望ましい。

なお、履修や成績評価等の重要なことがらについて電子メール上のみで対応することはできません。かならず電子メールで予約を取って研究室を訪問してください。

科目名<Subject>	外国文学（１３年度カリ科目名：外国文学Ⅰ）　　<Foreign Literature >			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	夏学期
担当教員名<Name>	鈴木　将史　　<Masafumi Suzuki>		研究室番号<Office>	４５６
Office Hours	在室時			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

ドイツ文学を取り上げ、様々なメディアを利用してそのエッセンスを理解することに努める。

2.授業内容<Course contents>

ドイツ文学上最大の文学者と目されるゲーテに脚光を当て、彼の文学を通じてドイツ文学の特徴を探る。ゲーテこそがドイツ文学を最も広範に体現し、また後世のドイツ文学にもっとも多大な影響を与えた作家だからである。従って、彼の文学を追跡してゆけば、必然的にドイツ文学全体の輪郭も浮かび上がることになるであろう。

3.使用教材<Teaching materials>

適宜プリント配布。スライドを多用する。

4.成績評価の方法<Grading>

試験の結果に、平常店を加えて評価する。3分の1以上欠席した者は、自動的に不合格となる。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

秀（１００～９０）：ドイツ文学について秀でた理解力を有し、文学の持つさまざまな問題を知悉している。

優（８９～８０）：ドイツ文学について優れた理解力を有し、さまざまな文学上の問題を十分理解することができる。

良（７９～７０）：ドイツ文学について相応の理解力を有し、さまざまな文学上の事象を相応に理解することができる。

可（６９～６０）：ドイツ文学について最低限の理解力を有し、さまざまな文学上の事象をある程度理解することができる。

不可（５９～0）：ドイツ文学の実体について十分な理解力を持たない。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	言語学 <Linguistics>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	山田　久就 <Hisanari Yamada>		研究室番号<Office>	５４２
Office Hours	在室時いつでも可			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

人間のことば（言語）を研究する学問を言語学と呼びます。人間のことばを対象にする研究は全て広い意味で言語学に含まれます。したがって、言語学には広範な研究分野があります。しかし、言語学で最も研究が盛んな分野は文法研究です。文法研究では、個別の言語の文法とともに、世界の諸言語の文法における多様性と一般性・普遍性が研究の対象になります。

文法研究の各分野における研究対象（どのようなことに関心が持たれるのか）と研究方法（どのように研究するのか）について学びます。

2.授業内容<Course contents>

・言語と言語学
・世界の言語
・音声学と音韻論（音についての研究）
・形態論（語のしくみについての研究）
・統語論（文のしくみについての研究）

3.使用教材<Teaching materials>

基本的には、コンピュータ画面をプロジェクターに投射したものを教材とします。
プリントを配布します。

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験(100%)で評価します。
＊授業への参加態度：　上記の点から減点。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

秀（90-100 点）：授業で説明した言語学の基礎についての理解と用語に関する知識が完全にある。
優（80-89 点）：授業で説明した言語学の基礎についての理解と用語に関する知識がかなりある。
良（70-79 点）：授業で説明した言語学の基礎についての理解と用語に関する知識が十分にある。
可（60-69 点）：授業で説明した言語学の基礎についての理解と用語に関する知識が最低限にある。
不可（0-59 点）：授業で説明した言語学の基礎についての理解と用語に関する知識が不足している。

6.履修上の注意事項<Remarks>

なし

科目名<Subject>	歴史学Ⅰ（生活史と社会史） <History Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	夏学期
担当教員名<Name>	荻野　富士夫 <Fujio Ogino>		研究室番号<Office>	４１５
Office Hours	火曜日・水曜日　１３時から１４時３０分			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

日本の近現代史全般を対象として、受験や「教科書で教えられなかった歴史」に焦点をあてる。下記のような一見、国家や政治などとはかけ離れたテーマを取りあげるが、それらの思想や活動も深く歴史の進展と結びついていたことを明らかにし、歴史に学ぶことの必要と楽しさを考えたい。一週一テーマの講義形式となる。

2.授業内容<Course contents>

・もう一つの開国(コレラ)　・「万歳」の誕生
・日本の軍隊　・角田柳作（アメリカの日本研究開拓）
・明治国家と女性　・大正デモクラシー期の女性
・戦時下の女性　・知里幸恵
・山本宣治と産児制限　・国防婦人会
・戦後の女性　・ウーマン・リブ
・手塚治虫のめざしたもの　・鎌田慧の描いたもの

3.使用教材<Teaching materials>

毎回プリント教材を配布するほか、テーマごとに参考文献を紹介する。

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験とレポート（テーマは日本近現代史に関するもの、四〇〇〇字以上）、適宜実施する授業への批評アンケートによって総合的に評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

授業開始時に配布する詳細な授業計画書で指示する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	社会思想史Ⅱ　　<History of Social Philosophies Ⅱ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	西永　亮　　<Ryo Nishinaga>		研究室番号<Office>	
Office Hours	水 14:30-16:00			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

本講義は、「文明」と「文化」の関係を軸に20世紀の社会思想的展開を概観します。20世紀の西洋において「文明」と「文化」は、実際の社会問題と関連しながら、ときには相互に対立しあう概念として、またときにはほぼ同義の概念として発展してきました。講義では、重要な思想家を何人か取りあげながら、両概念がどのような社会的意味を担ってきたのかを解説します。それを通じて、21世紀における「文明」と「文化」の意義を批判的に分析する力を養います。

2.授業内容<Course contents>

はじめに　文明と文化、普遍と特殊、平等と自由

Ⅰ　文明の崩壊―20世紀の幕開け

Ⅰ-1　文化戦争としての第一次世界大戦
―ジンメルとTh. マン―

Ⅰ-2　文化革命としてのロシア革命
―ルカーチ―

Ⅰ-3　啓蒙の弁証法
―ホルクハイマー、アドルノ、エリアス

Ⅱ　多文化主義の諸相

Ⅱ-1　民族解放としてのナショナリズム
―バーリン―

Ⅱ-2　ケベック問題をめぐる承認と差異の政治
―C. テイラー―

Ⅱ-3　移民問題における憲法愛国主義
―ハーバーマス―

3.使用教材<Teaching materials>

なし。プリントを配付します。参考文献は適宜紹介します。

4.成績評価の方法<Grading>

期末試験と平常点（講義中の積極的な発言等）によって総合的に評価します。期末試験80%、平常点20%。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

講義で解説した各思想家の基本概念、思考様式、問題意識を理解し、それを自分で応用できるかどうかが基準になります。その理解力と応用力が９割以上であれば「秀」、８割以上であれば「優」、７割以上であれば「良」、６割以上であれば「可」、６割未満であれば「不可」となります。

6.履修上の注意事項<Remarks>

各自でノートをよくとり、分からない点は質問して下さい。自分で考えるという姿勢が望まれます。

科目名<Subject>	政治学Ⅰ　（現代日本の政治）　　<Political Science Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	相内　俊一　　<Toshikazu Aiuchi>		研究室番号<Office>	５４３
Office Hours	特に設けない。　電子メールで予約してください。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

現代日本の政治状況を分析し、理解する能力を身に付けることを目的とする。そのため、講義の前半で、戦後日本の政治史を概観し、現在の日本政治の背景にある諸条件を理解する。後半で現在の日本の政治構造と政治過程の特徴を紹介する。

前半は教科書Aに沿って戦後政治史を学ぶ。併せて、選挙結果等のデータを分析して理解を深める。後半は、教科書Bを用いて現代日本の政治システムを地方自治の観点から学ぶ。ここでは、、現在日本が抱えている政治課題を地方政治の政治過程の分析を通して明らかにする。

2.授業内容<Course contents>

第１部：戦後日本政治史　第１週～第６週　（テキストAを用いる）

第２部：現代日本の地方政治のシステムと政治過程　第７週～第15週(テキストBを用いる)

第１部及び第２部が終わる毎にレポートを書いて提出する。

3.使用教材<Teaching materials>

テキストA: 石川真澄　「戦後政治史」　岩波書店　(岩波新書　新赤版367)　1995年

テキストB: 村尾信尚　「『行政』を変える！　講談社　(講談社現代新書)　2004年

4.成績評価の方法<Grading>

クイズ（ミニ・テスト）５回程度、レポート及び期末試験の合計点で評価する。（レポート４０%、ミニ・テストと期末試験６０%）

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

レポート、期末試験のうち、一つでも欠けたものには単位を与えない。

科目名<Subject>	社会学Ⅰ　　<Sociology Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	夏学期
担当教員名<Name>	宝福　則子　　<Noriko　Hofuku>		研究室番号<Office>	５２７
Office Hours	木１４時４０分～１６時　その他、随時、事前にメール・電話で連絡、可能なら、いつでもOK			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
社会学は、人間が生活する社会に起こるあらゆる現象を対象として扱う。そこで、社会学とはどんな学問なのか、つまり、何を対象に、またそれをどのような視点から見て分析するのか、個々の社会現象を題材として話す。

2.授業内容<Course contents>
主に扱うテーマは、メディア（情報社会、情報による大衆操作、メディアと社会生活の変容）及び諸メディアにおける女性の扱われ方・女性と労働等

3.使用教材<Teaching materials>
松田『テキスト現代社会学』ミネルヴァ書房、武市・原『グローバル社会とメディア』ミネルヴァ書房、ナンシー・ スノー著・福間訳『情報戦争』岩波書店、渡辺・松井『メディアの法理と社会的責任』ミネルヴァ書房、鎌田・矢澤・木本『講座社会学１４ジェンダー』東大出版会、『講座社会学８　社会情報』東大出版会等

4.成績評価の方法<Grading>
期末試験により評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
期末試験で６０点以上とること

6.履修上の注意事項<Remarks>
３．の使用教材は、特に教科書として指定しないが、基本的な知識獲得のために、参考書として読むことを薦める。その他にも随時、テーマごとに参考書等を挙げる。新聞を読むことを薦める。

科目名<Subject>	社会科学特別講義（13年度カリ科目名：科学方法論）　<Topics in Social Science>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	佐々木　邦子　　<Kuniko Sasaki>		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
長きにわたり女性の労働は、役割分担に対する社会的固定観念に依拠する問題が多大であった。それは欧米諸国でも程度の違いこそあれほぼ同様である。1970年代頃からの女性をめぐる世界的な潮流とともに、日本においても女性を対象とする政策が展開された効果もあり、現代は、男性と女性の区分を超えて自由に仕事や生き方の選択がしやすい社会になりつつある。しかし、政策の実施は全ての女性の労働世界を高めてはいない。逆に同姓間の格差が顕著になっている。また、昨今はフリーターやニートの急増により、若年労働市場の問題が社会的に耳目を集めている。これもまた、他国と共通することであり、ILOはディーセントワークへの試みを始めた。
本講義では、労働に関して以上の二つの視点から、我が国における戦後の雇用慣行の変遷過程で女性や若者が辿った変化を中心に検討を加えたい。男女労働者の職業的復活に果たすリカレント教育についても題材にする。

2.授業内容<Course contents>
1．本講義の目的と進め方
　本講義のテーマに対する実態調査の必要性、アンケート調査、ヒアリングなど
2．日本における雇用慣行の推移
3．　　〃
4．現代の労働市場、多様化する労働形態
5．　　〃
6．戦後日本における女性労働の実態
7．　　〃
8．女性政策の動向 － 世界、日本
9．女性の継続就業を可能にする法制度
10．　　〃
11．若年労働市場の現状
12．フリーター、ニートをめぐる日本の動向
13．フリーター、ニートをめぐる世界の動向
14．日本におけるリカレント教育
15．まとめ

3.使用教材<Teaching materials>
必要なプリント教材をその都度配付する。

4.成績評価の方法<Grading>
定期試験70%、中間課題・講義への参加状況等30%を総合的に判断する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
講義時に説明する

6.履修上の注意事項<Remarks>
講義の目的と内容をよく検討したうえで、真剣に講義に参加しようとする意思を持てる方に受講していただきたい。

科目名<Subject>	数学Ⅱ <Mathematics Ⅱ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	米田　力生 <Rikio Yoneda>		研究室番号<Office>	３５５
Office Hours	在室時			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

学問の様々な分野における基本的手法として、微分積分学は様々な分野で利用され応用されている必要不可欠な学問である。ここでは、その理論を応用した関数論の基礎を中心に学習する。

2.授業内容<Course contents>

・複素数
・複素数の収束と極限
・一次関数
・リーマン球面
・正則関数
・コーシーの定理
・留数

3.使用教材<Teaching materials>

遠山啓　関数論初歩　日本評論者

4.成績評価の方法<Grading>

出席状況、レポート提出及び定期試験の結果により評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

秀（１００～９０）：関数論について秀でた理解力を有し、その数学的理論を様々な学問（事象）に応用することができる。
優　（８９～８０）：関数論について優れた理解力を有し、その数学的理論を様々な学問（事象）に応用することができる。
良　（７９～７０）：関数論について良い理解力を有し、その数学的理論を様々な学問（事象）に応用することができる。
可　（６９～６０）：関数論について理解力を有し、ある程度、その数学的理論を様々な学問（事象）に応用することができる。
不可　（５９～０）：関数論について十分な理解力を持たず、その数学的理論を様々な学問（事象）に応用することができない。

6.履修上の注意事項<Remarks>

微分積分学をある程度理解していることが要求される。

科目名<Subject>	物理学Ⅰ <Physics Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	杉之原　立史 <Tatsushi Suginohara>		研究室番号<Office>	３１２
Office Hours	未定			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

物理学は，人類が約 400 年という時間をかけて築いてきた，人類共通の知的財産である．これを正しく理解し，後の世代に伝えていくことは，私たちの世代に課せられた義務であると言える．

この授業では，宇宙の成り立ちや進化が，物理学によってどのように理解されているかを，最新の研究成果を交えて解説する．宇宙を通して，物理の世界に触れ，物理に興味を持ってもらうことを目的とする．高校で物理を履修しなかった場合でも，そのことが理解の妨げにならないように配慮する．

パソコンの画面をスクリーンに映し，プレゼンテーションソフトを使用して授業を進めていく．

2.授業内容<Course contents>

1. 天動説から地動説へ
2. 銀河宇宙像の確立
3. 宇宙の膨張
4. ビッグバン宇宙モデル
5. 素粒子と力の標準理論
6. 初期宇宙の進化
7. 銀河の形成
8. ダークマター
9. 宇宙の物質循環
10. ２１世紀の宇宙像

3.使用教材<Teaching materials>

参考書：池内了『宇宙はどこまでわかっているか』NHK ライブラリー

4.成績評価の方法<Grading>

学期末の定期試験により評価する．

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

評価確定後，文書にて通達する．

6.履修上の注意事項<Remarks>

新聞やテレビ，すばる望遠鏡のウェブサイト（http://www.subarutelescope.org/j_index.html）などを通して，日頃から宇宙へ関心を向けておいてほしい．

科目名<Subject>	化学Ⅱ　<Chemistry Ⅱ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	片岡　正光　<Masamitsu Kataoka>		研究室番号<Office>	化学研究室
Office Hours	月～金曜日　10 時頃～19 時頃まで（但し火曜日は 12 時頃から）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

目的　かけがえのない地球環境は、人類の豊かな暮らしの代償として悪化の一途をたどってきた。クリーンな地球環境を後世に残していくことは、私達人類に課せられた使命である。地球環境の現状を化学的に正しく理解することは、地球環境を守っていく上で不可欠である。本講義では特に地球環境の理解に必要な化学の基礎的な知識を習得することを目的とする。また、地球環境の変遷、地球規模の環境破壊、地球環境の保全等を、生活に関係の深い、水環境、大気環境（エネルギー消費に伴う地球の温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊）、土壌環境（土壌の酸性化等）について、化学の視点で理解することを目的とする。

方法　講義は教科書に沿って化学の基礎から講義する（１時間）。後半の30分では後半の30分ではプロジェクターを使ってダイオキシンや環境ホルモン汚染問題を化学の視点からわかりやすく解説する。

2.授業内容<Course contents>

第１～４週　酸化ー還元反応と乾電池やリチウムイオン電池などの電池で起こっている化学反応について学ぶ。第５～７週　暮らしを支える無機物質である金属の精錬や、ｶﾞﾗｽ、ｾﾒﾝﾄ、ｾﾗﾐｯｸｽについて解説する。８～10週　暮らしを支える有機物質、すなわち炭化水素、高分子化合物、洗剤などを解説する。第11～15週　私たちの快適な暮らしを支えるエネルギーのうち、化石燃料の燃焼によって得られるエネルギー、原子力エネルギー、夢の核融合エネルギーなどを化学の視点から学ぶ。

3.使用教材<Teaching materials>

生活と環境を考える化学（三共出版）

4.成績評価の方法<Grading>

期末に１００点満点の試験を行う。また、授業時間中に練習問題等を行うなどして毎回出席をとる。出席を点数化して、期末のテストの点数に加算する。きちんと出席したが合格点に満たなかった学生は、試験終了後レポートの提出によって救済されるが、出席率の悪い学生には救済措置はない。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

秀：化学の基礎についての広い領域を完全に理解するとともに、知識を環境問題の理解に十分に応用できる。
優：化学の基礎について十分に理解し、知識を環境問題への理解に十分に応用できる。
良：化学の基礎について相当程度に理解し、その知識をもって環境問題を良く理解できる。
可：化学の基礎について過半は理解し、環境問題の理解の過半を理解できる。
不可：化学の基礎について十分な理解力を持たず、環境問題の化学的な理解が不十分である。

6.履修上の注意事項<Remarks>

高校で化学をほとんど学んでこなかった学生でも、本人の努力によって単位の取得は可能なよう配慮する。文科系学生であるとはいえ、社会の様々な現象の十分な理解には化学の基礎知識が必要であることが多々あり、化学を集中して学習する最後の機会として、本講義を履修することをすすめる。

科目名<Subject>	生物学Ⅱ　<Biology Ⅱ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ・Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	八木　宏樹　<Hiroki Yagi>		研究室番号<Office>	生物学研究室
Office Hours	木曜日　10:30～18:00（昼食時間を除く）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

目的：すべて生命体は環境要因の変動に何らかの影響を受けている。それは人間の社会活動が起因している場合が少なくない。いかにして人間は環境を破壊してきたのか，生物はどのように環境破壊に対して反応するのか，海洋や河川の環境改変と生物との関係を中心に学ぶことにより，環境と調和して生きていく方法を考察する。

内容：温度や気候などの変動と，生物の個体としての生理反応，群集としての生態的反応，あるいは多くの生物で構成される生態系の変化などを中心として学ぶ。テーマは「水と生物」。

方法：ＯＨＰもしくはパワーポイントを用いた講義を中心とする。

2.授業内容<Course contents>

第１回　ガイダンスと環境生物学へのアプローチ
第２回　水と生物　地球と海のしくみ
第３回　水と生物　海洋の物質循環のしくみ
第４回　水と生物　食物連鎖と生物生産のしくみ
第５回　水と生物　赤潮と青潮
第６回　水と生物　海洋汚染と生物濃縮
第７回　水と生物　海洋汚染と生態系の破壊
第８回　水と生物　海の砂漠化：磯焼けの話
第９回　水と生物　サンゴ礁とマングローブ林の破壊と保全
第 10 回　水と生物　干潟の機能と生産力
第 11 回　水と生物　干潟の保全
第 12 回　水と生物　川のしくみと機能
第 13 回　水と生物　酸性雨が及ぼす生物への影響
第 14 回　水と生物　地球温暖化と生物

3.使用教材<Teaching materials>

テキスト：とくに指定しない。
参考書：「海と海洋汚染」（三共出版），「環境と生態・人間と地球」（培風館），「環境生物学」（森北出版）

4.成績評価の方法<Grading>

学期末の定期試験の成績と履修態度により評価する。評価の基準は次のとおり。
１）環境と生物のあり方ついて理解力を有すること
２）現状の環境問題とその原因および対処について理解できること。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

環境変動と生物への影響および人間が生物に及ぼす影響などを主に講義を進めるので，日頃から身の回りにある「生物」や「環境」に注意を払っておくこと。

科目名<Subject>	総合科目Ⅰ　(学問原論)　　<Multidisciplinary Subject Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ	前期
担当教員名<Name>	倉田稔・相田慎一　<Minoru Kurata/Shin-ichi Aida>		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

学問の入門を講ずる。実際上の勉強の進め方や、大学で前提としているので教えないことなど、語る。後半は、古典を読むのは重要だという観点から、古典を読む。

2.授業内容<Course contents>

0　オリエンテーション
1　勉強のコツ。論文の作り方。
2　学術論文の書き方、つまり引用と注の付け方
3　普通文の書き方
4　大学とは何か
5　学問と社会科学
6　ヨーロッパ芸術鑑賞
7　資本主義社会
8　日本社会と社会科学
9－13　相田さん5回　　「古典を読む」

3.使用教材<Teaching materials>

テキスト：
カウツキー、レンナー、ゲゼル『資本論の読み方』ぱる出版

参考書：
倉田『学生と社会人のための文章読本』丘書房

4.成績評価の方法<Grading>

試験及びレポートによる。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

メールでの返事はできません
非常勤控え室で、または自宅への電話で受け答えします

科目名<Subject>	総合科目Ⅱ（社会科学への招待）　<Multidisciplinary Subject Ⅱ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ	前期
担当教員名<Name>	江頭　進外　<Susumu Egashira and others>		研究室番号<Office>	４０９
Office Hours	火・金　１３：００～１４：００			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

高校までの勉強と大学での勉強方法の根本的な相違は、問題から解答までをすべて自分の力で導き出さなければならない点にある。

本講義は１年次を対象として、大学における勉強と研究の方法を論文やレポートの執筆及びディスカッションなどを通じて身につけることを目的とする。同時に、本学の専門課程で学ぶことができる科目にかんする導入もおこなう。

2.授業内容<Course contents>

第1回　オリエンテーション
第2,3回　経済学とはどんな学問か？
第4,5回　経営学とはどんな学問か？
第6,7回　企業法学とはどんな学問か？
第8,9回　社会情報学とはどんな学問か？
第10-13回　研究論文を書く。
第14回　自分の研究計画を立てる。
第15回　研究計画を発表する。

3.使用教材<Teaching materials>

参考図書として，
『美しい経済学』
『わかる経営学』
『守る！企業法学』
いずれも小樽商科大学高大連携チーム編，日本経済評論社。

4.成績評価の方法<Grading>

講義への出席および各議論への参加の度合いで評価を行う。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

参加する複数の講師の総合評価による。

6.履修上の注意事項<Remarks>

・１年生以外の履修は認めない。
・グループワークをおこなうので，遅刻・欠席はグループの他のメンバーに迷惑となることに注意すること。

科目名<Subject>	基礎数学 <Basic Mathematics>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	I	前期
担当教員名<Name>	兼岩　龍二 <Ryuji Kaneiwa>		研究室番号<Office>	４５９
Office Hours	在室中は特に都合が悪くない限り、いつでも可			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

本講は基礎科目、知の基礎系に属し、本学全学生に必要とされる「論理的思考」の手助けとなるように、数理論理学の分野から、命題論理と述語論理を紹介する。

上記は人間が物事を考えるための補助手段となるであろう。より直接的には、現代社会に於いて益々必要度を増して来ている情報分野の基礎的認識を得るためや、「文科系」と言われる諸科学のなかでもよく使われるようになりつつある現代数学を理解するための、必須のツールとなるであろう。

2.授業内容<Course contents>

1.論理記号(命題論理)
2.論理関数
3.公理系(命題論理)・証明論
4.述語・対象領域
5.全称・存在記号
6.自由変数・束縛変数
7.公理系(述語論理)・証明論

3.使用教材<Teaching materials>

配布プリントを使う。

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験（１００点満点）による。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

秀(90～100)、優(80～89)、良(70～79)、可(60～69)とするが、問題の難易度、受験者の成績レベルによって、調整する。調整の方法は採点後に公表する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

高等学校では、ほとんどまったく扱われない分野なので、高等学校の数学が不得意でも、ついていくことができるが、出席を怠ると全くわからなくなるので、注意すること。

科目名<Subject>	基礎ゼミナール <Basic Seminars>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	I	前期
担当教員名<Name>	大津　晶 <Shou Ohtsu>		研究室番号<Office>	４２８
Office Hours	在室時は随時．事前にメイル等で確認することを勧める．			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この基礎ゼミではビデオ作品制作の演習を通じて，皆さんが大学で学習や研究をする際に必要となる"基礎体力づくり"を目指します．図書館や情報処理センターの活用方法，ビデオカメラ等撮影機材の操作方法，コンピュータを使った映像編集技術などの習得に加え，グループでひとつの作品を制作することで共同作業の進め方を学びます．

2.授業内容<Course contents>

一般的にビデオ作品は，(1)テーマ選定・企画 (2)調査・取材 (3)シナリオ構成 (4)撮影・編集といった過程を経て制作されます．また作品は(5)公開・上映されて本当の完成ということもできるでしょう．このゼミでは，これらの一連の作業をすべて５名程度のグループによる共同作業で進めていただきます．

作品の企画から完成に至るさまざまな場面で，調査・報告・ディスカッション・コンピュータ等機器操作・プレゼンテーションをする場面がありますので，これらの技法や作法が自然に身に付くはずです．

3.使用教材<Teaching materials>

必要に応じて指示します．

4.成績評価の方法<Grading>

何よりも積極的な参加が求められます．作品の（技術的な）出来／不出来が成績に影響することはありません．またグループのメンバー間の相互評価，グループ間の相互評価も最終成績評価の参考とします．

グループ作業において自分に与えられた役割を十分果たした上で，以下の観点について，ひととおり標準的な手続き・技術を習得したことが確認できれば80点（優）と評価します．

・図書館，情報処理センターの利用方法
・調査，分析，報告の方法
・コンピュータ等の機器操作
・グループ作業の作法

各項目について，ある程度の相対的評価を行い，特に優れていると認められる場合はプラス評価をします．共同作業における消極的／非建設的態度および行動は大幅なマイナス評価をします．

5.履修上の注意事項<Remarks>

演習内容の性格上，ゼミ時間帯以外に個人あるいはグループの活動を行う必要性が高まる可能性があります．その点を了解した上で履修してください．また特に撮影・編集機器の制約から受入人数の上限を15名程度とせざるを得ません．希望者多数の場合は履修に関して別に指示します．

科目名<Subject>	基礎ゼミナール　<Basic Seminars>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	I	前期
担当教員名<Name>	中村　史　<Fumi Nakamura>		研究室番号<Office>	４０５
Office Hours	面談を希望される方はまず電子メールにてご連絡ください			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この授業は題して「『源氏物語』を読む」となります。日本の古典文学を学び楽しむことを通じて、大学で学ぶための基礎学力を養う入門的（あるいは教養的）ゼミです。

2.授業内容<Course contents>

『源氏物語』54 帖のストーリーを履修者に分担して読破していただき、それぞれの担当部分を解説する発表をしていただきます。また、『源氏物語』についてのやさしい論文を紹介・解説する発表をしていただきます。図書館体験や『源氏物語』関係論文の探索をし、時間が許すならば、『源氏物語』（のいずれかの巻）の本文を読み、『源氏物語』についての小講義等も行われます。

＊履修者の状況を見て予定を変更することはあり得ます。

3.使用教材<Teaching materials>

テキストはとくに定めません。参考文献は授業中に紹介してゆきます。

4.成績評価の方法<Grading>

その方法については履修者の状況を見て最終的に決定します。基本的には参加態度、発表とレポートのよしあしによって評価する予定です。

5.履修上の注意事項<Remarks>

履修者は古典文法を修得し、かつ古文・漢文をある程度以上読めることが望ましい。

基礎ゼミナールの性質上、履修希望者が 15 名を超える場合には選抜の方法を考えざるをえません。これについてはオリエンテーションの際に説明します。なお、履修や成績評価等の重要なことがらについて電子メール上のみで対応することはできません。かならず電子メールで予約を取って研究室を訪問してください。

科目名<Subject>	基礎ゼミナール　<Basic Seminars>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	I	前期
担当教員名<Name>	米田　力生　<Rikio Yoneda>		研究室番号<Office>	３５５
Office Hours	在室時			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

このゼミでは以下の能力を身につけることを目指す。

・図書館での数学の文献や資料検索と利用の仕方を身につけること。
・情報処理センターの利用とパソコンやインターネットの活用法を身につけること。
・数学の文献を読み、また、人の話を聞いて、その内容を理解すること。
・論理的にものを考え、人前で明瞭に自分の意見を述べること。
・教員が指定した書式に従って、正確で分かりやすくレポートやレジュメを作成すること。

2.授業内容<Course contents>

微分積分や線形代数等の中から題材を選び、ゼミ生に割り当てて解説させる。

3.使用教材<Teaching materials>

未定

4.成績評価の方法<Grading>

出席状況、発表能力、理解能力、レポート及びレジュメの出来を総合的に勘案して評価する。

5.履修上の注意事項<Remarks>

難解な内容を扱うので、数学的思考が苦にならないことが要求される。

科目名<Subject>	基礎ゼミナール　　<Basic Seminars>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ	前期
担当教員名<Name>	君羅　久則　　<Hisanori Kimira>		研究室番号<Office>	３２２
Office Hours	月曜16：00～17：45			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

研究を行う上で基本となるツールの知識や習得から始め、最終的には英文学を理解する上では不可欠といってよい英詩の入門（英詩の基礎的な理解）を目的とします。

2.授業内容<Course contents>

最初の数週間はさまざまな辞書（典）の利用法、パソコンを利用した論文等の文書作成やデータ整理等を具体的な課題に基づいて習得し、残りの10週程度は*Poetry for You*という、詩人が書いた英詩の入門書を読みながら、できるだけたくさんの英詩を読むだけでなく、朗読･暗誦などの発表を通して英詩を体験し、深く味わっていくことにします。

3.使用教材<Teaching materials>

C. Day Lewis, *Poetry for You*（南雲堂）

4.成績評価の方法<Grading>

課題に基づいての報告や発表の評価を中心に、出席状況、授業参加度なども加味して総合的に評価を行います。

5.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	生活と健康　＜Lifestyle and Health Medicine＞			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	I	後期
担当教員名<Name>	田野　有一　＜Yuichi Tano＞		研究室番号<Office>	４５２
Office Hours	e-mail にて受付け、時間調整の上、対応することとする。			

1.授業の目的・方法　<Course objective and method>

世界の中の“長寿国；日本”の生活環境は、実にめまぐるしい変化を遂げ今日に至っている。
このような刻々と変化する生活環境は、やゝもすると人間を置き去りにすることさえある。そして、これに端を発する健康問題は、今や重要な課題となっている。
数年後には本学を巣立ち、社会の一員として活躍が期待される学生諸君に対し、“心身ともに健康的な生活”を送るために必要な基礎知識と実践力を身につけさせたい。

2.授業内容　<Course contents>

1. 現代社会の特質
2. ライフサイクル,ライフステージ,ライフイヴェント,リスクファクター
3. 生活環境と生活意識の変化
4. 加齢（発達区分）と心理的特徴
5. 身体活動と心理
6. 性格とパフォーマンス
7. 内発的動機づけの高め方
8. 深層心理と対人魅力

3.使用教材　<Teaching materials>

必要に応じて資料（プリント）を配布する。
敢えて参考文献は指定しない。

4.成績評価の方法　<Grading>

出席をも重視し、定期試験の結果と合わせて総合的に評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

秀：80%以上出席し試験90%以上の者
優：80%以上出席し試験80%以上の者
良：2/3 以上出席し試験70%以上の者
可：2/3 以上出席し試験60%以上の者

6.履修上の注意事項　<Remarks>
受講中は私語を慎むこと。

科目名<Subject>	健康スポーツ a　<Exercise and Sports>　軽スポーツ			
単位数<Credits>	1	配当年次<Years>	I	前期
担当教員名<Name>	石崎　香理　<Kaori Ishizaki>		研究室番号<Office>	３１０
Office Hours	e-mail にて、事前に日時を予約、確認して下さい。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
生涯に渡って手軽にスポーツ活動が続けられるよう、積極的に身体を動かし健康的かつ活動的に体力づくりを行うことを目的とする。そのためには身体を動かすことの楽しさや重要性を体得していくことが望まれる。また、スポーツを通しての社会性やチームワークの大切さにも触れてほしい。様々な種目のスポーツを取り入れ、1人でも出来る運動や2人以上で行うゲームを実践する。

2.授業内容<Course contents>

ソフトバレーボール・ユニホック・バドミントン・ドッジボール・フォークダンスなど、その他にも簡単に楽しめる種目を随時取り入れる。またスポーツを行う上での準備体操の方法や、ゲームに際しての基本的な動き方、展開方法などを学習する。

3.使用教材<Teaching materials>

本コースで必要とされる用具は、全て健康スポーツ担当教員側で用意する。但し、屋内用および屋外用運動靴に関しては各自用意すること。（雨天時は上靴が必要となる）

4.成績評価の方法<Grading>
成績評価は総時間の3分の2以上の出席（遅刻、見学、早退）をもって評価の対象とし、その対象者の受講態度および実技等の到達度を参考に以下の基準で評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

「秀」：全て出席し、受講態度と実技試験等の到達度が9割以上に評価されたもの
「優」：9割以上出席し、受講態度と実技試験等の到達度が8割以上に評価されたもの
「良」：8割以上出席し、受講態度と実技試験等の到達度が7割以上に評価されたもの
「可」：7割以上出席し、受講態度と実技試験等の到達度が6割以上に評価されたもの

6.履修上の注意事項<Remarks>

・全コースとも共通実施種目として『体力テスト』を行う。
・グループ別学習形態をとることから、安易な履修取り消しは避けてもらいたい。

科目名<Subject>	健康スポーツb　　<Exercise and Sports>　バトミントン/卓球			
単位数<Credits>	1	配当年次<Years>	I	後期
担当教員名<Name>	中川 喜直　　<Yoshinao　Nakagawa>		研究室番号<Office>	３５６
Office Hours	mail にて調整：nak@res.otaru-uc.ac.jp			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

本コースでは、大学・社会人になって活用できる健康づくりの方法を学び、健康保持増進ができる能力を体得する。バトミントンと卓球は手軽に実施できるスポーツ種目であり、比較的狭い場所で安全に楽しめる。本コースではコート毎のグループに別れて攻守の練習をおこない、ゲームができるようにスキルを学習する。また，生涯スポーツとして運動習慣を身につけ，将来の社会生活において健康づくりとなる運動の仕方や方法論を修得する。

2.授業内容<Course contents>

＜講義＞

バトミントンと卓球の概要：歴史とマナー、定期的に歩数計を用いてバトミントンと卓球の運動強度と消費エネルギー量を測定し、健康の保持増進の関係について考察する。

＜実技＞

基礎練習：グリップの握り方と手首の使い方・腕の振り方、構え、ポジションの基本動作について練習する。

『バドミントン』：ハイクリアー・ドロップショット・ヘアピン・スマッシュ・ドライブ・サーブ：ロングハイ・ショートローサーブについて各種ショット練習する。

『卓球』：シェーク・ペンハンドのグリップの握り方、構え、ポジションの基本動作について練習する。上回転・下回転・つっつきの各種ショットとサーブ練習をする。

アナウンスの仕方、ダブルス・シングルスのルールを学び試合をする。

3.使用教材<Teaching materials>

本コースで必要とされる用具は、すべて健康スポーツ担当教員側で用意する。但し、屋内用および屋外用運動靴に関しては各自用意すること。また、講義では DVD なども活用し、PC を使った教材によって理解を深めて学習をする。

4.成績評価の方法<Grading>

・成績評価は総時間数の３分の２以上の出席（遅刻、見学、早退を含む）をもって評価の対象とし、その対象者の受講態度および実技試験等の到達度を参考に以下の基準で評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

「秀」：全て出席し、受講態度と実技試験等の到達度が９割以上に評価されたもの

「優」：９割以上出席し、受講態度と実技試験等の到達度が８割以上に評価されたもの

「良」：８割以上出席し、受講態度と実技試験等の到達度が７割以上に評価されたもの

「可」：７割以上出席し、受講態度と実技試験等の到達度が６割以上に評価されたもの

6.履修上の注意事項<Remarks>

・全コースとも共通実施種目として「体力テスト」を行う。

・グループ別学習形態を採ることから、安易な履修取り消しは避けてもらいたい。

科目名<Subject>	健康スポーツ　e　　<Exercise and Sports>　水泳集中			
単位数<Credits>	1	配当年次<Years>	I	夏季集中
担当教員名<Name>	田野有一,花輪啓一,中川喜直,石崎香理		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

水泳は水の抵抗の作用によりかなりの運動の量を要することから、短時間でエアロビクスの効果を得ることができ、肥満者にとってはシェイプアップ効果が大きい。また、浮力の作用により体重の負担が軽くなり運動が行いやすい。一方、運動したあとの水泳は、疲労回復に非常に役立つ。これは、他の運動で偏った使われ方をした筋肉が水泳で全身を動かすことにより調整されるからである。

このような、効用をもつ水泳について、水による事故防止の観点から、より確かな泳法の習得と向上および健康づくりを目的に展開される。

2.授業内容<Course contents>

各自の技能レベルにより４班（初級、中級Ａ・Ｂ、上級）に分けて実施する。

平成19年６月９日（土）・10日（日）・16日（土）

午前８時50分～午後４時00分

・共通実習として救急処置についての実習がある。

・実施会場は本学室内温水プール（25m×5コース）で行う。

3.使用教材<Teaching materials>

・各自が用意するもの…水着、バスタオル、その他（ゴーグル、耳せん等の使用は可）

4.成績評価の方法<Grading>

・成績評価は総時間数の３分の２以上の出席（遅刻、見学、早退を含む）をもって評価の対象とし、その対象者の受講態度および技能別グループが実施する実技試験等の到達度を参考に以下の基準で評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

「秀」：全て出席し、受講態度と実技試験等の到達度が９割以上に評価されたもの

「優」：９割以上出席し、受講態度と実技試験等の到達度が８割以上に評価されたもの

「良」：８割以上出席し、受講態度と実技試験等の到達度が７割以上に評価されたもの

「可」：７割以上出席し、受講態度と実技試験等の到達度が６割以上に評価されたもの

6.履修上の注意事項<Remarks>

・短期集中授業であるため、欠席等により単位の修得が不可能になる場合があるので、十分注意すること。

・修者自身の安易な履修取り消しは禁止する。

・実技に先立って、ガイダンスが行われる。

科目名<Subject>	健康スポーツｆ（スキーⅠ）,g（スキ-Ⅱ） <Exercise and Sports>スキー集中			
単位数<Credits>	1	配当年次<Years>	Ⅰ	冬季集中
担当教員名<Name>	田野有一,花輪啓一,中川喜直,石崎香理,山本哲二,山田　亮,堤　毅		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

スキー集中では、一般的なスキー技能の習得を目標に冬期スポーツの一つとして開講する。冬期の運動不足の解消として健康的な体力の保持増進のために、また、屋外の生涯スポーツとしてスキー技術を学習する。近年、カービングスキーが定着して、スキーの回転性能がアップした。これに伴い早くスキーが上達できるようになった。スキーのメッカ小樽の大学出身者として基礎技術をマスターしたい。

2.授業内容<Course contents>

講義では初心者から上級者まで､7班に別けてレベルに応じた実習を行う。初心者は歩行から学習しリフトに乗り滑走できるまで、上級者はコブ、新雪スキーまでを実習する。また、簡単なポール滑走も行う予定である。

１班　上級Ａ　小回りターンの習得（急斜面・不整地）
２班　上級Ｂ　小回りターンの習得（急斜面）
３班　中級Ａ　小回りターンの習得（緩斜面）
４班　中級Ｂ　大回りターンの習得（中斜面）
５班　中級Ｃ　大回りターンの習得（緩斜面）
６班　初級者　シュテムターンの習得（中斜面）
７班　初級者　プルークボーゲンの習得　（中斜面）
＜日程＞平成20年1月7,8,9日
午前８：５０～午後４：００
＜場所＞朝里川温泉スキー場　　現地集合

3.使用教材<Teaching materials>

特になし

4.成績評価の方法<Grading>

・成績評価は総時間数の３分２以上の出席（遅刻、見学、早退を含む）をもって評価の対象とし、その対象者の受講態度および技能別グループが実施する実技試験等の到達度を参考に以下の基準で評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

「秀」：全て出席し、受講態度と実技試験等の到達度が９割以上に評価されたもの
「優」：９割以上出席し、受講態度と実技試験等の到達度が８割以上に評価されたもの
「良」：８割以上出席し、受講態度実技試験等の到達度が７割以上に評価されたもの
「可」：７割以上出席し、受講態度と実技試験等の到達度が６割以上に評価されたもの

6.履修上の注意事項<Remarks>

・リフト代は各自負担
（平成18年度１日当たり1300円）
・スキー用具は各自準備すること。
・実技に先立って、ガイダンスが行われる。

外 国 語 科 目
（英 語）

科目名<Subject>	英語Ⅰ E11A【基礎クラス】 <English Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ	通年
担当教員名<Name>	君羅　久則 <Hisanori Kimira>		研究室番号<Office>	３２２
Office Hours	君羅　月曜16：00～17：45			

このクラスは英語ⅠA基礎クラスです。

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

現代イギリスの作家ミュアリエル・スパークの短編を利用することにします。ファンタジーとユーモアを織りまぜた興味深い世界が展開されている。会話を多用した、平易な散文で書かれていますが、実に多様な表現や構文が使われています。この作品を利用し、読解力、リスニング、語彙力、構文の理解等の鍛錬を目標とする。あわせて語句の文中での機能など、構文を中心に書かれた文法書を利用します。そのほかに課外の教材として、英語のe-learning教材を利用します。

2.授業内容<Course contents>

この短編集には、３作品が収められています。最初の週はオリエンテーションとしますが、その後、毎週３、４ページずつ、構文、語彙、表現、コンテクストの理解を中心に、さらには文化的な背景の理解等も含めて進め、'The Dark Glasses' を読み終える予定です。同時に、*English Grammar Step by Step* も練習問題と解説を中心に毎時間利用します。随時（予告無しに）、授業開始時に小テストを実施しますので、よく予習しておくことが不可欠になります。

3.使用教材<Teaching materials>

Muriel Spark, *The Dark Glasses and Other Stories* (鶴見書店)

水谷顕一外　*English Grammar Step by Step*（成美堂）

Net Academy 2　(e-learning 教材)

4.成績評価の方法<Grading>

成績の評価は平常時間内に随時行う小テストと、前・後期の試験、それにクラスワーク、授業参加度を加味して総合的に行います。授業実施時数の２／３以上出席しなければ評価の対象外（単位の認定はしない）とします。なお、基礎クラスですから、「秀」の評価は基準にあるように非常に少なくなります。詳細についてはオリエンテーション時に知らせます。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

秀 (100-90)：授業内容及び課外の学習の 90 パーセント以上理解できている場合。
優 (89-80)：授業内容の 80 パーセント以上は理解できている場合。
良 (79-70)：授業内容の 70 パーセント以上は理解できている場合。
可 (69-60)：授業内容の 60 パーセント以上は理解できている場合。
不可 (59 以下)：授業内容の 60 パーセント未満しか理解できていない場合。

6.履修上の注意事項<Remarks>

前掲の短編集には朗読テープがありますので、必ず各自で用意して下さい。（詳細は初回の授業時に知らせます。）

科目名<Subject>	英語Ⅰ E12A <English Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ	通年
担当教員名<Name>	羽村　貴史 <HAMURA Takashi>		研究室番号<Office>	５３２
Office Hours	月曜日 15:00-18:00（言語センター）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

文化に関する英文の精読、音読および聞き取りの訓練をする。

2.授業内容<Course contents>

1. Culture
2. Communication
3. Multicultural Understanding
4. Sex and Gender
5. English Language in Culture
6. Cosmopolitan London
7. Ethnic Problem: Asian Americans

3.使用教材<Teaching materials>

『カルチュラル・スタディーズ』（英宝社、2005 年）
ほかに、独自に作成したプリント教材を毎週配布する。

4.成績評価の方法<Grading>

小テスト（授業時間内に年間数回）、予習状況、出席率。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

総合評価。

6.履修上の注意事項<Remarks>

予習復習の際、指示したとおりの方法で学習すること。理由にならない理由で年間 5 回以上の欠席がある場合は不可。厳しく指導する。

科目名<Subject>	英語Ⅰ E11B【基礎クラス】 <English Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ	通年
担当教員名<Name>	山本　久雄 <Hisao Yamamoto>		研究室番号<Office>	５２６
Office Hours	金曜 14:00～15:30			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
目的：英文読解力の向上
方法：学生の和訳に対する教官の補足説明

2.授業内容<Course contents>
第１週　オリエンテーション
第 2～30 週　本文の読解（本年度は第７章以降を扱う）

3.使用教材<Teaching materials>
テキスト：The Stories of Months
Reginald C. Couzens 著
篠崎書林

4.成績評価の方法<Grading>
年２回の定期試験・出席・授業内での発表による総合評価

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
秀（100～90）：秀でた英文読解力を有す。
優（89～80）：優れた英文読解力を有す。
良（79～70）：良い英文読解力を有す。
可（69～60）：英文読解力を有す。
不可（59～0）：十分な英文読解力を有しない。

6.履修上の注意事項<Remarks>
全授業数の 1/3 以上の欠席は受験不可

科目名<Subject>	英語Ⅰ E12B <English Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ	通年
担当教員名<Name>	坪谷　雍子 <Yoko Tsuboya>		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
目的：This course will help the students Read English newspapers through English.
内容：This class will teach the students how to read English papers, how English papers are organized and how to get informations from the papers.
方法：The students will learn how to understand English papers by reading "The Japan Times" and the text book, "Newspaper English".
They will also have the opportunity to write and speak out their opinions in English.

2.授業内容<Course contents>
・Reading English Newspapers-why
・Reading English Newspapers-how
・Organization of Newspapers-what
・Organization of Newspapers-where
・Headlines-grammar
・Headlines-Abbreviations and special vocabulary
・Parts of News Articles
・News Articles-grammar
・Information Feature story
・Sports News
・Editorial
・Opinion Column
・Business News Story
・Review
・Miscellaneous

3.使用教材<Teaching materials>
Bruce Allen.
Imagining Tomorrow.
Seibido.

4.成績評価の方法<Grading>
Weekly assignments, presentations, class attendance, and examinations

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>
Excessive class absences (more than 1/3) and poor report and presentation will damage your grade.

科目名<Subject>	英語II E21A <English II>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	通年
担当教員名<Name>	山本　久雄 <Hisao Yamamoto>		研究室番号<Office>	５２６
Office Hours	金曜 14:00～15:30			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
目的：英文読解力の向上
方法：学生の和訳に対する教官の補足説明

2.授業内容<Course contents>
第１週　オリエンテーション
第2～30 週　本文の読解

3.使用教材<Teaching materials>
テキスト：American and English Ideals
Carl Becker 著
英宝社

4.成績評価の方法<Grading>
年２回の定期試験・出席・授業内での発表による総合評価

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
秀（100～90）：秀でた英文読解力を有す。
優（89～80）：優れた英文読解力を有す。
良（79～70）：良い英文読解力を有す。
可（69～60）：英文読解力を有す。
不可（59～0）：十分な英文読解力を有しない。

6.履修上の注意事項<Remarks>
全授業数の 1/3 以上の欠席は受験不可

科目名<Subject>	英語II E22A <English II>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	通年
担当教員名<Name>	坪谷　雍子 <Yoko Tsuboya>		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
目的：This course will help the students Read English newspapers through English.
内容：This class will teach the students how to read English papers, how English papers are organized and how to get informations from the papers.
方法：The students will learn how to understand English papers by reading "The Japan Times" and the text book, "Newspaper English".
They will also have the opportunity to write and speak out their opinions in English.

2.授業内容<Course contents>
・Reading English Newspapers-why
・Reading English Newspapers-how
・Organization of Newspapers-what
・Organization of Newspapers-where
・Headlines-grammar
・Headlines-Abbreviations and special vocabulary
・Parts of News Articles
・News Articles-grammar
・Information Feature story
・Sports News
・Editorial
・Opinion Column
・Business News Story
・Review
・Miscellaneous

3.使用教材<Teaching materials>
Bill Benfield.
New Windows on the World.
Seibido.

4.成績評価の方法<Grading>
Weekly assignments, presentations, class attendance, and examinations

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>
Excessive class absences (more than 1/3) and poor report and presentation will damage your grade.

科目名<Subject>	英語II E21B【基礎クラス】 <English II>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	通年
担当教員名<Name>	ダニエラ・カルヤヌ <Daniela Caluianu>		研究室番号<Office>	５３６
Office Hours	Tue 12:00- 14:00			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

This is a basic course in all four skills, with special stress on listening and speaking. Classes will consist mainly of pair or group discussions on the topics in the textbook. Students are expected to prepare for class by listening to the textbook CD and doing the reading/ writing assignments.

2.授業内容<Course contents>

We will discuss the following topics:
(1)Family; (2)Food; (3)Time; (4)House&Home; (5)Music; (6)Transportation; (7)Sports; (8)Numbers; (9)Best friends; (10)TV; (11)Work; (12)Vacation; (13)School; (14)Movies; (15) Money; (16)Restaurants; (17) Animals; (18)Shopping (19)Fashion; (20)Travel; (21)Books, Magazines and Newspapers; (22) Sickness; (23)Holidays; (24)Fears; (25) Dating; (26) Marriage; (27)Beliefs; (28)Crime;(29)Health&Fitness

3.使用教材<Teaching materials>

David Martin, Topic Talk 2nd edition, EFL Press
Additional materials will be provided by teacher

4.成績評価の方法<Grading>

class activity;40% assignments; 30% test 30%

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

Grading will depend on the degree achievement of goals a-d, as follows:
100-90: performance above expectations
89-80: strong performance
79-70: meets expectations
69:60: meets expectations with support
59-0: below expectations
Goals
(a) master the required vocabulary
(b) show adequate listening skills
(c) fluency (adequate speed, pronunciation, intonation)
(d) be able to express opinions on the relevant topics

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	英語II E22B <English II>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	通年
担当教員名<Name>	ジェイミー ケンプ <Jamie Kemp>		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1. 授業の目的・方法<Course objective and method>

The purpose of this course is to develop students skills in communication and conversation.
This course will also focus on improving listening, writing and speaking skills.

2. 授業内容<Course contents>

Most class work will be in small groups. Students will be encouraged to speak about various topics together in English. Course work will include discussion, presentations, listening and role-plays etc.

3.使用教材<Teaching materials>

Textbook *AMERICAN HEADWAY 3*
Student Book With CD. Handouts will also be provided for many classes. You will need a notebook for your own notes etc.

4.成績評価の方法<Grading>

Attendance and participation (50%)
Presentations and tests (50%)

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

Good attendance is necessary to receive a passing grade. Satisfactory completion of the majority of tests and presentations is also necessary.

6.履修上の注意事項<Remarks>

外 国 語 科 目
（英語以外）

科目名<Subject>	ドイツ語Ⅰ　　(火・木)　　〈German　Ⅰ〉			
単位数<Credits>	4	配当年次<Years>	Ⅰ	通年
担当教員名<Name>	副島美由紀・鈴木将史<Miyuki Soejima／Masafumi Suzuki>		研究室番号<Office>	副島４２０　鈴木４５６
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

ドイツ語Ⅰは「会話」「文法」「生活文化の紹介」に配慮した総合教科書（ＤＶＤとＣＤ付き）を使って週２回（火・木）の授業を行ないます。舞台はドイツの首都ベルリン。そこで留学生活を送っている日本人女子学生「ユイ」の視点に立ってドイツ語を学びドイツの日常生活を観察してゆきます。各課とも、まずパン屋でパンを買ったり木陰のビアガーデンでビールを飲むといった日常的場面の中で普通の「会話表現」に触れます。これを理解・習得した上でさらに簡単な自己表現練習へ進んでゆきます。あわせて付属のCDやDVDによって良い耳を作ってゆきます（因みにこの教科書の最大の特長のひとつは、使用される全てのドイツ文が丁寧にCDやDVDに収録されている点にあり積極的に活用して良い「聴解力」を培ってください）。次は十分に理解した会話表現にもとづいて文法を学ぶ番です。ここでは的確な文法説明と多様豊富な練習（文法ドリル、パートナー練習、作文練習など）を通して体系的な文法知識を身に付けてゆきます。各課は最後にしっかりしたドイツ語の「書き言葉」で綴られたコラムで締めくくられますが、それはドイツ語圏の生活文化を整理した形で紹介したもので、課を追うごとにその内容と語法のレベルを高めてゆきます。また各課末尾には現代のドイツ語圏のさまざまな生活文化（ベルリン紹介・パンの国ドイツ・交通事情・医療事情など）を紹介する日本語のコラムも用意されおり、生きた社会的背景と融合させながらコトバを総合的に学んでゆくことになります。従って真面目に参加していれば自ずから総合的なドイツ語能力が身に着くことでしょう。また、外国語の授業は何よりもまずコミュニケーションの方法を学ぶ時間ですから、コトバの学習に限らず「話す」という行為が非常に大切です。皆さんの積極的な参加を期待します。

2.授業内容<Course contents>

【　】＝文法項目／《　》＝会話項目／〈　〉＝生活文化項目

1-2 週：【文字と発音】【あいさつ】【季節・月・曜日】【数字】
3-4 週：第１課【動詞の現在人称変化】《自己紹介》〈ベルリン到着〉
5-7 週：第２課【名詞の性、各変化】《持ち物を尋ね合う》〈パン屋にて〉
8-9 週：第３課【不規則動詞の人称変化】【名詞の複数形】【名詞の３格】《～するのが好き》〈語学コース〉
10-11 週：第４課【前置詞と名詞の格】【副文】《週の予定》〈学生食堂〉
12-14 週：第５課【人称代名詞の３・４格】【再帰代名詞と再帰動詞】【名詞の２格】《体の部分の名称・体の不調を訴える》〈お医者〉
15-16 週：第６課【定冠詞類】【不定冠詞類】【否定冠詞 kein】《誕生日には誰に何をプレゼント？》〈学生寮で〉
17-18 週：第７課【zu 不定詞句】【分離動詞】《週末予定》〈ヴァンゼーへのサイクリング〉
19-21 週：第８課【話法の助動詞】《夏休み／冬休みの予定》〈美容院にて〉
22-23 週：第９課【過去形】【現在完了形】【受動態】《昨日・週末に何をした？》〈ビアガーデン〉
24-25 週：第 10 課【形容詞の格変化】【比較級と最上級】】《好きな食べ物･飲み物・・・》〈ブティック〉
26～28 週：第１１課【関係代名詞】【命令形】《自分の部屋を描写》〈フィリップの誕生日〉
29～30 週：第１２課【接続法】【接続法２式の人称変化】【非現実話法】《愚痴・悔い・夢などを語る》〈帰国前〉

3.使用教材<Teaching materials>

『ドイツ語の時間〔ビデオ教材恋するベルリン〕DVD 付き』(清野智昭著、朝日出版社)

4.成績評価の方法<Grading>

授業回数の 1/3 以上欠席すると単位取得の権利を失います。前期試験・中間試験・期末試験の結果を主軸として、授業での積極性（出席率、発言、宿題等の提出）も参考材料としながら総合的に評価します。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

ドイツ語Ⅰは、ドイツ語Ⅱの履修に耐えうる基礎学力の修得をもって合格とします。具体的には以下の通り。
①ドイツ語の基本文法・基本語彙を習得している。
②ごく平易な文章を読むことができる。
③ごく平易な文章を書くことができる。
④ごく平易な発話を聞き取ることができる。
⑤ごく平易な発話を行うことができる。

6.履修上の注意事項<Remarks>

火曜と木曜の授業は連動しており、４単位は一括して出ますから各曜日もれなく出席すること。

科目名<Subject>	フランス語Ⅰ（火・木）　〈French Ⅰ〉			
単位数<Credits>	4	配当年次<Years>	Ⅰ	通年
担当教員名<Name>	尾形　弘人　〈Hiroto Ogata〉		研究室番号<Office>	５２１
Office Hours	火・木　13:00 から 14:30			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

フランス旅行を題材とする教科書を用いて、基本的なフランス語の運用能力（話す、聞く、読む、書く）の養成を目指します。口、耳、目、手を総動員して練習に取り組んでください。初めて学ぶ言葉ですから間違うのは当たり前。大いに間違いを繰り返しながら、少しずつ着実に定着させていきましょう。

2.授業内容<Course contents>

以下に各課のタイトルを紹介します。

1) 機内サービス
2) 機内での会話（1）
3) 機内での会話（2）
4) パリを移動する
5) ホテルにチェックイン
6) 好きなことについて話す
7) 道を尋ねる
8) カフェで
9) 列車で郊外に行く
10) 雨が降っています
11) 比較をする
12) 買い物をする
13) 帰りの飛行機で

3.使用教材<Teaching materials>

内村瑠美子他著『フランス語でサバイバル！』、白水社、¥2000

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験の他、授業に臨む姿勢を総合的に判断する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

次に示すフランス語の基礎の修得を合格ラインとする。
①発音の規則を身につけ、発音できること。
②基本文法を理解し、運用できること。
③簡単なフランス語を聞き取り、また発話できること。
④辞書を用いて、基本的なフランス語の読み書きができること。

なお、「秀、優、良、可」については、評価確定後、掲示にて通達する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

辞書については授業で指示する。

科目名<Subject>	中国語Ⅰ（火・木）　〈 Chinese Ⅰ〉			
単位数<Credits>	4	配当年次<Years>	Ⅰ	通年
担当教員名<Name>	裴　崢・網谷義男〈Pei zheng/ Yushio Amiya〉		研究室番号<Office>	裴３０８
Office Hours	火　13:30～15:30			

（火曜日：裴教員分）

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

中国語の基礎の習得。簡単な中国語を読み、書き、話し、聞ける能力の習得を目的とします。

発音や基本文型は耳から学び、使いこなせるように練習を繰り返します。受講者が授業活動に積極的に参加できるように配慮し、中国語の基礎を、実践を通して楽しく習得できるように努めます。授業は、基本的にテキストに従って進行していきます。

2.授業内容<Course contents>

発音とピンインの習得
基本的な表現の習熟
簡体字の理解・習得
中国語の「態」や「補語」等の重要な文法

3.使用教材<Teaching materials>

楊凱栄・張麗群『表現する中国語　スリム版　初級会話テキスト』（白帝社）

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験 50%、出席 30%、授業態度 20%。授業回数の 1/3 以上欠席した者は、自動的に単位取得の権利を失います。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

○秀
前後期末の定期試験の点数の平均、および出席点、平常点、各授業時間内に適宜実施される小テストの点数などを総合的に評価した評点が 90 点以上の者。
初級程度の中国語文法、語彙力、四技能(聞く・話す・読む・書く)を完全に習得したと評価できる者。

○優
前後期末の定期試験の点数の平均、および出席点、平常点、各授業時間内に適宜実施される小テストの点数などを総合的に評価した評点が 80 点以上、89 点未満の者。
初級程度の中国語文法、語彙力、四技能(聞く・話す・読む・書く)をほぼ完全に習得したと評価できる者。

○良
前後期末の定期試験の点数の平均、および出席点、平常点、各授業時間内に適宜実施される小テストの点数などを総合的に評価した評点が 70 点以上、79 点未満の者。
初級程度の中国語文法、語彙力、四技能(聞く・話す・読む・書く)を相当程度に習得したと評価できる者。

○可
前後期末の定期試験の点数の平均、および出席点、平常点、各授業時間内に適宜実施される小テストの点数などを総合的に評価した評点が 60 点以上、69 点未満の者。
初級程度の中国語文法、語彙力、四技能(聞く・話す・読む・書く)を過半は習得したと評価できる者。

6.履修上の注意事項<Remarks>

二人の教官の授業は連動しており、４単位は一括して認定します。受講者の皆さんには、積極的に授業に参加することを希望します。予習と復習をして授業に参加して下さい。中国語辞典は必須です。

科目名<Subject>	中国語Ⅰ（火・木）　〈Chinese Ⅰ〉			
単位数<Credits>	4	配当年次<Years>	Ⅰ	通年
担当教員名<Name>	裴　崢・網谷義男〈Pei zheng/ Yushio Amiya〉		研究室番号<Office>	裴３０８
Office Hours				

（木曜日：網谷教員分）

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

正確な発音の習得と基本的な文法、語彙の習得。簡単な中国語を「読む」、「書く」、「聴く」、「話す」ことができる能力の習得に力を入れます。　授業は教科書の内容に沿って進めていきます。授業進度は基本的に「授業内容」に書いてある通りですが、できるだけ皆さんの習得状況に配慮して進めていきます。また、時間的余裕があれば、中国映画などのビデオなどを見て、中国の文化や風俗習慣なども知ってもらうつもりです。

2.授業内容<Course contents>

第１回：ガイダンス＋単母音、そり舌母音
第２回：四声、二重母音
第３回：三重母音、子音
第４回：鼻母音、ｒ化、ピンインの綴り方
第５回：発音の約束事、きまり文句
第６回：前期中間試験
第７回：中間試験答案用紙の返却＋第１課
第８回：第１課
第９回：第２課　　第10回：第２課＋第３課
第11回：第３課　　第12回：第４課
第13回：第４課＋第５課　　第14回：第５課
第15回：前期定期試験
第16回：定期試験答案用紙の返却＋復習
第17回：第６課　　第18回：第６課＋第７課
第19回：第７課　　第20回：第８課
第21回：第８課＋第９課　　第22回：第９課
第23回：後期中間試験
第24回：中間試験答案用紙の返却＋第10課
第25回：第10課　　第26回：第11課
第27回：第11課＋第12課　　第28回：第12課
第29回：復習　　第30回：後期定期試験

3.使用教材<Teaching materials>

本間　史・孟　広学『中国語ポイント42』（白水社）

4.成績評価の方法<Grading>

中間・定期試験(50%)、ヒアリング小テスト(30%)、授業態度や出席など(20%)。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

授業開始後、なるべく早い時期に文書にて通達します。

6.履修上の注意事項<Remarks>

ヒアリング小テストは毎回授業のはじめに行うので、遅刻をすると受験できなくなります。遅刻=0点。ヒアリング小テストの形式や範囲は、授業中に説明します。学生数によっては暗誦試験も実施するかもしれません(評価は中間・定期試験に含める)。

経済学科
学科科目

科目名<Subject>	経済学入門 <Introduction to Economics >			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	I	前期
担当教員名<Name>	中村　健一　<Ken-ichi Nakamura>		研究室番号<Office>	４１７
Office Hours	〈kenakamu@res.otaru-uc.ac.jp〉あてに会見の予約を依頼してください。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
　経済学を初めて学ぶみなさんに、その内容を平易に紹介する講義です。経済学の基本的な発想や分析手法を、主に言葉と図を用いて説明していきます。

2.授業内容<Course contents>
１．市場における需要と供給の作用（第４章）
２．需要、供給、および政府の政策（第６章）
３．消費者、生産者、市場の効率性（第７章）
４．応用：課税の費用（第８章）
５．応用：国際貿易（第９章）
６．生産要素市場（第１８章）
７．所得不平等と貧困（第２０章）

（）内は教科書の対応箇所です。講義は教科書に則して進行します。

3.使用教材<Teaching materials>
　教科書として以下の本を使用します。

Ｎ・グレゴリー・マンキュー
『マンキュー経済学Ｉ　ミクロ編　第２版』
東洋経済新報社　２００５年

　マンキューの本には上記に類似したタイトルのものが複数ありますので、間違えな
いように注意して下さい。

4.成績評価の方法<Grading>
　定期試験の成績によって評価します。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
　成績評価は経済学科の統一基準に従います。経済学科の統一基準の掲載ページ(83 頁)を参照してください。

6.履修上の注意事項<Remarks>
　講義に関するさまざまな連絡や資料の配付を、以下のウェブサイト（ホームページ）を用いて行ないます。適宜参照するようにして下さい。

http://www010.upp.so-net.ne.jp/kenakamu/

　また各種問い合わせは kenakamu@res.otaru-uc.ac.jp までお願いします。

科目名<Subject>	経済理論 <Economic Theory >			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	前期
担当教員名<Name>	加藤　睦洋　<Kato Mutsuhiro>		研究室番号<Office>	４６０
Office Hours	在室時（原則として）随時可			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
（目的）ミクロ経済学の初歩を理解すること。
（方法）黒板を用いた通常の講義。

2.授業内容<Course contents>
教科書の次の諸章の講義を予定している。
第１章・市場メカニズムの機能と限界
第２章・家計の行動と需要曲線
第３章・企業の行動と供給曲線
第４章・完全競争市場と効率性
（但し時間の都合で、全部消化できるかどうかは分からない。）

3.使用教材<Teaching materials>
奥野正寛著『ミクロ経済学入門』日経文庫、日本経済新聞社。

4.成績評価の方法<Grading>
試験成績による。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
学科統一基準参照。

6.履修上の注意事項<Remarks>
特にないが昨今の授業経験からすると、学生諸君が事前に抱いている予想とは違って、経済学は論理的、抽象的・数学的な学問なので、新聞雑誌記事またはテレビのニュース解説程度の話を期待している人は、無理して履修しない方がよい。（説明に数式やグラフが出てきたといって、大層お怒りになる方々がいるので、念のために言っておきます。）

科目名<Subject>	経済と統計 <Economy and Statistics>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	前期
担当教員名<Name>	遠藤　薫 <Kaoru Endo>		研究室番号<Office>	４２５
Office Hours	火曜日午後６時-７時			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

　経済データについて理解を深めるとともに，統計的方法を知り，コンピューターでデータを扱えるようにする。
　情報処理センターで表計算ソフトウエアと統計ソフトウエアを用いた実習を数回行う。
　資料を配付する。

2.授業内容<Course contents>

１．国民経済計算
（１）国内総生産（GDP）
（２）生産活動
（３）経済循環
２．統計的検定
（１）超幾何分布
（２）フィッシャーの精密検定
（３）有意水準とｐ値
３．統計的推定と検定
（１）母集団と標本
（２）正規分布
（３）母集団平均値の推定と検定
４．データの表示
（１）幹葉表示
（２）ヒストグラム
（３）散布図

3.使用教材<Teaching materials>

4.成績評価の方法<Grading>
　定期テストによる。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
　経済学科の基準に準じる。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	経済史 <Economic History >			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	前期
担当教員名<Name>	平井　進 <Susumu Hirai>		研究室番号<Office>	３３８
Office Hours	授業終了後の１時間			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

　西洋経済史の考察枠組みを取り上げます。社会科学を学ぶ大学生が常識として知っておくべき内容です。

2.授業内容<Course contents>
概ね以下の内容による。

1)西欧封建社会：農村と都市
2)近代世界システムの成立
3)プロト工業化：地域社会と重商主義
4))本格的な工業化
5)世界の一体化：自由貿易帝国主義
6)社会国家の形成

　授業内容の変更もあり得るので初回の授業には必ず出席すること。

3.使用教材<Teaching materials>
　毎回資料プリントを配布します。
　参考文献：遅塚,忠躬『ヨーロッパの革命』(小学館)。

4.成績評価の方法<Grading>
　学期末の試験（持ち込み不可・論述式）による。その他に、学期の途中で書評レポートを出題することもあり得ます。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
　経済学科共通基準による。

6.履修上の注意事項<Remarks>
１）高校の時に「世界史」を履修したことがこの授業の履修の前提条件となります。
２）歴史学（西洋史）に興味がある他学科の学生の受講も歓迎します。
３）「実利」を学習目的とする人には向きません。各種試験に役立つ「実践的」な知識ではなく、社会科学を学ぶ上での常識を教授したいと思います。したがって、大学とは、資格試験や公務員試験のための予備校でなく、社会を認識する上で基礎的なものの見方を学ぶ場であると思っている人に向いています。
４）数学的論理も抽象的・テクニカルな概念もでてこない、具体的で一話完結の「お話」が歓迎される傾向にあると聞きますが、そうした類の「お話」ではありません。

科目名<Subject>	経済思想史 <History of Economic Thought >			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	前期
担当教員名<Name>	江頭　進 <Susumu Egashira >		研究室番号<Office>	４０９
Office Hours	火・金　１３：００～１４：００			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
　アダム・スミス依頼の経済学の歴史を振り返り，各経済学者の思想とその当時の経済環境の関係を考察することにより，われわれの社会の成立過程を理解する。

2.授業内容<Course contents>
（1）私的所有と市場-スミス-
（2）資本主義社会の作法ーヴェブレンー
（3）市場と政府の関係の転換-ケインズ-
（4）市場社会の未来-ハイエク-

3.使用教材<Teaching materials>
高哲男編『自由と秩序の経済思想』，名古屋大学出版会。

4.成績評価の方法<Grading>
中間試験と期末試験の結果による。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
　経済学科の統一基準による。　83ｐ参照のこと。

6.履修上の注意事項<Remarks>
ミクロ経済学，マクロ経済学を履修していることが望ましい。

科目名<Subject>	応用ミクロ経済学 <Applied Microeconomics>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	鵜沢　秀 <Masaru Uzawa>		研究室番号<Office>	３０１
Office Hours	第１回オリエンテーションで指示する。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
　タバコ、自動車、カラーテレビ、ウィスキー、ビール、板ガラス、カラーフィルムなど、日本の産業は 少数の企業で構成されている。
　他方、数多くの建設会社、レストラン、コンビニがある。石油元売り会社は 少数でもガソリンスタンドの数は5万を越える。
　授業では、ミクロ経済学で学んだ分析方法を用いて、独占企業や寡占企業の行動について分析する。
　現実の経済を分析する基礎的な考え方を学び、日本及び世界の経済に十分な関心を寄せてもらいたい。
　授業は、プロジェクターを利用し、 図解や数値例を多く用いる。

2.授業内容<Course contents>
　市場集中度
　マーケット・シェアの例
　独占企業の行動
　厚生水準を測る
　寡占企業の理論 クールノー・モデル
　寡占企業の理論 シュタッケルベルク・モデル
　寡占企業の理論 ベルトラン・モデル
　製品差別化と競争

3.使用教材<Teaching materials>
拙著『産業組織論』（エコノミスト社、2000 年）
なお、
http://www.res.otaru-uc.ac.jp/~uzawa/welcomej.html
からたどって関連資料が得られるようにする。

4.成績評価の方法<Grading>
　中間テスト及び期末テスト（各 100 点満点）の両方を受験した者で、合計 120 点以上の場合を合格とする。
　なお、クラスルーム実験経済学を実施した場合は、加算点を考慮する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
経済学科統一基準（このシラバスのｐ.83）を参照のこと。

6.履修上の注意事項<Remarks>
　ミクロ経済学の基礎的な知識を前提とする。
　経済学入門、経済理論、経済と統計、公共政策、経済学と現代などの科目を履修済みまたは同時履修が望ましい。

科目名<Subject>	公共政策 ＜Public Policy＞			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	後期
担当教員名<Name>	角野　浩 <Ko Sumino>		研究室番号<Office>	３３５
Office Hours	毎回の講義前後および質問はメールで予約を受付け随時			

１.授業の目的・方法<Course objective and method>

「公共政策」は、「財政学」および「公共経済学」の両科目を含めた形の講義を行ない、政府の経済活動に関する内容を出来るだけ幅広く解説してゆくことを目的とする。

まず「公共経済学」の内容では、政府の重要な政策としての道路・橋などの公共財の供給という公共政策について考えて見る。つまり、この政策をどのように行なえば最適な公共財の供給が行なえるかについて景気浮揚政策も考慮しながら見てゆく。さらに、近年、公害、騒音などの負の外部性が大きな社会問題となっている。このような外部不経済が存在する市場が失敗する場合に、政府はどのような政策を取るべきかについて、経済における政府の政策について考察する。

次に、「財政学」の内容では、近年深刻となっている財政赤字の問題を中心として見てゆく。まず、租税政策、公債発行の諸政策を取り上げ財政再建の課題を考察する。また、少子高齢化の予想以上の進展を今後の社会保障政策のあり方を見ながら検討してゆく。

2.授業内容<Course contents>

本年度は以下の講義項目を予定している。

第１章　外部性と環境政策

外部性と税制による環境政策について（市場の失敗、ピグー的租税・補助金政策等）

第２章　財政政策の諸政策

財政政策に関する租税政策、社会保障政策について（租税改革論、租税優遇措置、脱税の経済学および公的扶助の負の所得税等）

第３章　租税の経済分析

租税の経済効果について（日本の租税原則、直接税と間接税、租税帰着分析、最適課税論等）

第４章　公債の経済分析

公債発行の経済効果について（リカードの等価定理、バローの中立性命題、世代重複モデルによる将来世代の負担の公平性等）

第５章　社会保障の経済分析

社会保障の経済効果について（公的年金ｖｓ私的年金、積立方式ｖｓ賦課方式、年金制度改革、医療制度、逆選抜、モラル・ハザード等）

3.使用教材<Teaching materials>

テキスト

・角野浩『財政学』、同友館、2007 年。

参考書

・井堀利宏『財政学』第２版、現代経済学入門、岩波書店、2001 年。
・入谷純・岸本哲也編著『財政学』基本経済学シリーズ第 6 巻、八千代出版、1996 年。
・木下康司偏『図説日本の財政』平成 18 年度版、東洋経済新報社、2006 年

4.成績評価の方法<Grading>

学期末試験の成績および講義中に行う簡単なクイズ形式の出席を兼ねた試験の総合評価にて成績を評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

成績評価の基準は、ｐ.83 を参照のこと。

6.履修上の注意事項<Remarks>

出来れば「ミクロ経済学」も併せて履修することが望ましい。

詳しい講義内容、講義資料および過去の試験問題等は以下のホームページを参照のこと。http://www.otaru-uc.ac.jp/~sumino/

科目名<Subject>	経済学と現代 <Current Economic Issues>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	若井　克俊 <Kathutoshi Wakai>		研究室番号<Office>	
Office Hours	未定			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

金融機関、金融政策、および金融投資一般の現状について講義します。

2.授業内容<Course contents>

１．　銀行の機能
２．　中央銀行の役割と金融政策
３．　国債管理および外国為替
４．　金融危機と国際機関
５．　情報の非対象性
６．　金融資産市場
７．　金融システム

3.使用教材<Teaching materials>

（予定）金融論、村瀬英彰、日本評論社
　　コアテキスト金融論、竹田陽介、新生社

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験の成績による。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

経済学科共通基準に基く

6.履修上の注意事項<Remarks>

最終的なシラバスを後期授業前に掲示する予定なので、それを必ず見て確認すること。

特に、使用教材は掲示内容を確認後に購入すること。

科目名<Subject>	経済書講読II <Reading in Economics II>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	III・IV	前期
担当教員名<Name>	今西　一 <Hajime Imanishi>		研究室番号<Office>	５３３
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
　１９世紀のヨーロッパの政治経済学を、どのように明治の思想家が、自分のものにしていったかを学び、社会科学の基礎とテキストの読み方を学びます。

2.授業内容<Course contents>
テキストを読んでもらって、用語や時代背景を説明します。

3.使用教材<Teaching materials>
福沢諭吉「学問のすすめ」(佐藤きむ訳、角川ソフィア文庫、６６０円)。輪読しますので、この版を持って来てください。

4.成績評価の方法<Grading>
授業の終了後に、試験をします。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
学科の基準を参照。

6.履修上の注意事項<Remarks>
テキストを必ず持参。

科目名<Subject>	経済学演習III <Seminar in Economics III>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	III・IV	前期
担当教員名<Name>	和田　良介 <Ryosuke Wada>		研究室番号<Office>	５３７
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
目的　金融制度の理解
方法　ゼミ形式

2.授業内容<Course contents>
　使用する教科書は新聞記事を題材として、金融政策から金融商品まで金融制度の様々な面を説明しています。教科書の内容に沿った(1) 演習問題及び(2)参加者が持ち寄る新聞や雑誌の関連記事を議論する形でゼミを進める予定です。

経済学の知識は必ずしも必要としません。ただし、毎回、教科書を予習してくる必要があります。進度は１週あたり教科書 20 ページ程度を考えています。最終的には参加者と相談の上決定します。

3.使用教材<Teaching materials>
『やさしい金融システム論』、滝川好夫、日本評論社、2004 年、3,２００円。著者の言葉によると、「金融の消費者教育」を目指す本です。

4.成績評価の方法<Grading>

1.　期末テスト
2.　出席も含めて問題演習への参加度

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

学科統一基準に基づきます。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	経済学演習IV　<Seminar in Economics IV>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	III・IV	後期
担当教員名<Name>	加藤　睦洋　< Mutsuhiro　KATO >		研究室番号<Office>	４６０
Office Hours	在室時は（原則として）随時可。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
（目的）マクロ経済学の初歩の理解
（方法）ゼミナール形式

2.授業内容<Course contents>
マクロ経済学の創始者J.M.ケインズの人と学説の学習

3.使用教材<Teaching materials>
吉川洋著『ケインズ』ちくま新書０３５、￥６８０＋税

4.成績評価の方法<Grading>
その１．出席とレポート義務履行を重視する。
・欠席は１回につき、１０点減点する。
・レポーターとしての準備をきちんとしてこない者は、１回につき１０点減点する。（これは欠席による減点とは別である。）
その２．成績に不安を覚える学生が希望すれば、救済のための試験を実施してもよい。（実施するかどうかは学生の希望による。）

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
学科統一基準参照。

6.履修上の注意事項<Remarks>
「経済学入門」、「経済理論」、その他の経済学関連科目を履修済みか、または履修中であれば、学習には好都合であろう。（但しこれは履修条件ではない。）

科目名<Subject>	インターンシップ　<Internship>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	III・IV	通年
担当教員名<Name>	遠藤薫・大矢繁夫・多木誠一郎・木村泰知・花輪啓一・副島美由紀		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
企業、官公庁等での就業体験を通じて職業意識を養うとともに、実務に触れることにより学習意欲を向上させる。

2.授業内容<Course contents>
企業、官公庁等での実習（５日から２週間程度）が中心。実習の前の、講義・講習、実習後のレポート提出が義務づけられる。詳細は、５月に公表される「平成１８年度インターンシップ教育プログラム」で明らかにされるが、だいたい、以下のスケデュールで行われる。

５月：オリエンテーション。「平成１８年度　インターンシップ教育プログラム」の公表
６月：事前講義
７月：ビジネスマナー講習。
８～９月：企業等で実習（原則として夏休み　期間）
１０月：成果レポート提出
１２月：大学、学生、研修先による意見交換　会

3.使用教材<Teaching materials>

4.成績評価の方法<Grading>
上記の教育プログラムへの参加、レポートの評価等を総合的に考慮する。

5.履修上の注意事項<Remarks>
①科目の性格上、研修先は、４月以降にならなければわからない。その数も限られているので希望者がすべて履修できるわけではない。また、研修先は、必ずしも希望どおりとはならない。
②募集は４月から５月にかけて行われるので、掲示に注意すること。
③通常の履修とは別の手続・方法で行われる。
④キャップ制の対象とはならない。
⑤実習は原則として夏休み期間に、講義・講習・レポート報告会等は通常の時間割とは別の日程や時間を使って行われるので、それに参加できることが条件である。
⑥「総合科目III（ｴﾊﾞｰｸﾞﾘｰﾝ講座）」を履修していることが望ましい。

経済学科　成績評価の統一基準

秀（１００～９０）：講義内容について秀でた理解力を有し、経済理論を応用して、さまざまな経済問題について秀でた分析をすることができる。

優　（８９～８０）：講義内容について優れた理解力を有し、経済理論を応用して、さまざまな経済問題について優れた分析をすることができる。

良　（７９～７０）：講義内容について良い理解力を有し、経済理論を応用して、さまざまな経済問題について良い分析をすることができる。

可　（６９～６０）：講義内容について理解力を有し、経済理論を応用して、さまざまな経済分析について分析をすることができる。

不可　（５９～０）　：講義内容について十分な理解力を持たず、経済理論を応用して、さまざまな経済問題について分析をすることができない。

商　学　科
学 科 科 目

科目名<Subject>	市場システム論Ⅰ　<Market System Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	高宮城　朝則　<Tomonori Takamiyagi>		研究室番号<Office>	４１３
Office Hours	事前に連絡をしてください。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この授業は流通・商業の基本的な役割や機能についての理解を深めることを目的とします。今年度は商業の中でも中小零細小売商をトピックとして取り上げ、前半の「理論セクション」ではその機能・役割・社会性などについて検討していきます。後半の「研究セクション」では、現実の中小零細小売商を対象としたフィールドワークに受講者に取り組んでもらい、その研究成果を授業において検討していきます。

授業の方法について、理論セクションでは配付資料を素材としての講義、受講者による報告ならびにディスカションを通じて行います。研究セクションでは、まず調査方法（インタビュー・観察など）について学んでもらい、その後調査を実施してその経過と結果を報告してもらい、クラスにおいて検討していきます。これらを通じて調査報告書を完成させていきます。調査については受講者数に応じて個人またはグループ単位で行ってもらう予定です。

2.授業内容<Course contents>

＜理論セクション＞
・流通・商業の基本的役割と機能の理解
・中小零細小売商の役割と社会的位置づけ、社会的意義の検討
＜研究セクション＞
・調査方法（フィールドワーク）の理解・習得
・調査の実施：経過報告
・調査結果の報告とクラスでの検討

3.使用教材<Teaching materials>

教材については印刷して配付します。次の書籍を基本参考文献として使用します。

原田英生・他『ベーシック流通と商業』有斐閣アルマ（2002）

4.成績評価の方法<Grading>

授業の課題・調査への取り組みの程度、クラスでの報告と発言、ならびに最終の調査報告書を総合的に評価します。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

成績評価の基準については、第１回目の授業オリエンテーションで配付する文書において詳細に説明します。評価の際に重視する事項として次のものを考えています。
・流通・商業ならびに中小零細小売商の基本的役割と機能について十分に理解する。
・調査研究に積極的に取り組み、質の高い研究成果を達成する。
・クラスでの課題報告とディスカッションに積極的に参加する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

第１回目のオリエンテーションで授業の進め方を詳しく説明しますので、履修希望者は必ず出席してください。

科目名<Subject>	市場システム論Ⅱ　<Market System Ⅱ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	近藤　公彦　<Kimihiko KONDO>		研究室番号<Office>	３２８
Office Hours	随時　（事前にメールで連絡してください）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この授業では、実際の企業のケース（事例）を題材として、その企業を取り巻く環境とその企業の強み・弱みを分析し、どのような戦略を取るべきかを考えます。

ケースメソッドと呼ばれるこの方法は、ビジネススクールで一般的に行われているもので、ケース分析能力と戦略立案能力を養うことを目的としています。ケースから「正解を探す」のではなく、分析とディスカッションを通じて「正解を創る」のがケースメソッドの醍醐味です。

2.授業内容<Course contents>

授業は学生間、学生と教員間のディスカッション形式で行います。まず学生をグループに分けて、グループ内でのケースの課題をディスカッションし、グループとしての意見をまとめていただきます。つづく全体ディスカッションでは、グループの意見を示してもらうとともに、他のグループの意見に対してコメントしていただきます。

取り上げるケースとしては、自動車メーカー、日用品メーカー、化粧品メーカー、食品メーカー、流通・小売など、皆さんになじみのある企業を予定しています。

3.使用教材<Teaching materials>

授業で取り上げるケースは、コピーの上、配布します。また適宜、次の文献を参考書として使用します。

小樽商科大学ビジネススクール編『MBA のためのケース分析』同文舘、2004 年。

4.成績評価の方法<Grading>

皆さんには、授業の事前課題として、ケースを熟読し、分析し、各自の「答え」を用意してくること、事後課題として、授業でのグループ・ディスカッションと全体ディスカッションを踏まえて、グループとしてのケースレポートを作成・提出することが求められます。

ディスカッションへの貢献度　50%
ケースレポートの内容　50%
（出席は必須です）

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

授業の第１回目で詳細を説明します。

6.履修上の注意事項<Remarks>

事前課題、ディスカッションへの参加、事後課題と、授業には相応の負担が必要です。決して楽な授業ではありませんが、ディスカッションと戦略立案の擬似的体験は、きっとエキサイティングなものとなるでしょう。論理的な思考と創造性を駆使して、ケースに立ち向かってください。

科目名<Subject>	金融システム論II　<Financial System II>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	III・IV	前期
担当教員名<Name>	中浜　隆　<Takashi Nakahama>		研究室番号<Office>	５４４
Office Hours	随時（事前にメールで連絡してください）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
授業の目的は、現代の保険制度と保険業の概要と特徴について学習し、理解することにあります。
方法は、口述と板書で行い（教科書は使用しません）、必要に応じて授業中に資料を配布します。

2.授業内容<Course contents>
（1）保険一般
リスクとリスク処理手段、保険の仕組み、保険商品の特徴、保険の分類、保険の機能などについて解説します。
（2）損害保険
損害保険の要素、主要な保険種目、損害保険業について解説します。
（3）生命保険
主要な保険種目や契約者配当などについて解説します。
（4）保険経営
保険会社の業務・財務、会社形態、募集制度などについて解説します。
（5）保険制度改革と保険業の動向
保険制度改革（規制緩和・自由化）と保険業の近年の動向について解説します。

3.使用教材<Teaching materials>
教科書は使用しません。

4.成績評価の方法<Grading>
出席状況または小テスト 20 点、レポート１回 30 点、定期試験 50 点の合計点で評価します。ただし、レポートは中間試験に替えて実施するので、レポートを提出しなかった場合には、合計点にかかわらず合格点を与えません。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
秀（90 点以上）：授業内容（現代の保険制度と保険業の概要と特徴）とレポート課題の理解がとくに優れている。
優（80 点～89 点）：授業内容とレポート課題の理解が優れている。
良（70 点～79 点）：授業内容とレポート課題の理解がよくできている。
可（60 点～69 点）：授業内容とレポート課題の理解ができている。
不可（59 点以下）：授業内容とレポート課題の理解ができていない。

6.履修上の注意事項<Remarks>
履修希望者は必ずオリエンテーションに出席してください。上記の記載事項に変更などがある場合、オリエンテーションのときに伝えます。

科目名<Subject>	国際市場論　＜International　Market ＞			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	III・IV	後期
担当教員名<Name>	穴沢　眞　<Makoto Anazawa>		研究室番号<Office>	３０９
Office Hours	随時（事前にメールで連絡してください）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
本講義の目的は国境を越えた財、サービスの取引である貿易、そして、近年、日本企業の間でも増大している直接投資と企業提携を含めた企業の国際市場参入のプロセスを考察することです。そのため、貿易及び他の国際市場参入プロセスについての基本的な事項を説明します。また、必要に応じて時事的な問題についても解説します。
授業はパワーポイントを使った講義形式で行う予定ですが、履修者数により一部対話形式を用いる場合もあります。

2.授業内容<Course contents>
（1）貿易の実態
・日中貿易など
・物流

（2）貿易理論
・比較優位理論
・PLC モデル
・競争優位など

（3）貿易政策
・FTA
・関税など

（4）国際市場参入プロセス
・貿易と直接投資
・直接投資理論
・価値連鎖と活動配置
・我が国企業の海外進出

3.使用教材<Teaching materials>
テキストは使用しません。参考資料等は適宜配布します。

4.成績評価の方法<Grading>
定期試験、レポート、出席等により評価します。詳細についてはオリエンテーションの時に伝えます。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
基準についてはオリエンテーションの時に伝えます。

6.履修上の注意事項<Remarks>
履修希望者は必ずオリエンテーションに出席して下さい。

科目名<Subject>	経営学原理 <Principles of Business Administration >			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	前期
担当教員名<Name>	小田　福男 <Fukuo Oda>		研究室番号<Office>	３０５
Office Hours	随時可（事前にメールで連絡をしてください）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この科目は経営学関連科目の中で基礎的な科目として位置付けられている。そこで,この科目では経営学に関する基礎的な知識を体系的に講義する。本年度は,わが国で最も普及している経営学教科書の一つである『ゼミナール経営学入門』を利用して、「環境のマネジメント」を中心に講義する。

プロジェクターを利用して授業を実施する。なお、受講人数等によっては双方向型の授業方法を取り入れることがある。

2.授業内容<Course contents>

「環境のマネジメント」
第１章　戦略とは何か
第２章　競争のための差別化
第３章　競争優位とビジネスシステム
第４章　多角化と事業ポートフォリオ
第５章　企業構造の再編成
第６章　国際化の戦略
第７章　資本構造のマネジメント
第８章　雇用構造のマネジメント

3.使用教材<Teaching materials>

教科書：『ゼミナール経営学入門[第３版]』(伊丹敬之・加護野忠男著,日本経済新聞社,2003 年)
参考文献：『経営学への扉（第 2 版)』(明治大学経営学研究会編,白桃書房,2002 年)、『経営戦略の論理(第 3 版)』(伊丹敬之著、日本経済新聞社、2003 年)その他。

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験の成績(80%)と出席・コメント(20%)によって評価する。なお、双方向型授業を実施した場合は、プレゼンテーション・レポート(80%)と出席・コメント(20%)によって評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

秀（90 点以上）：授業内容の理解がとくに優れている。
優（80 点～89 点）：授業内容の理解が優れている。
良（70 点～79 点）：授業内容の理解がよくできている。
可（60 点～69 点）：授業内容の理解ができている。
不可（59 点以下）：授業内容の理解ができていない。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	経営管理論 <Business Management>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	後期
担当教員名<Name>	田中　幹大 <Mikihiro Tanaka>		研究室番号<Office>	３１１
Office Hours	木曜日 19：30～21：00（事前にメール連絡すること）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

日本企業の経営管理の歴史と構造、現在直面している課題等について検討していく。経営管理の基礎的事項を確認したうえで、日本企業の経営管理が戦前から現在に至るまでどのように展開されてきたのか、また、「失われた十年」と言われる 1990 年代以降において、日本企業が抱える問題を経営管理の側面から検討する。

教科書と適宜配布する資料をもとに講義を行う。

2.授業内容<Course contents>

①戦前期日本企業の所有と経営
②戦後日本企業の統治構造
③日本企業の組織デザイン
④組織間関係：サプライヤシステム
⑤「失われた十年」と日本企業
⑥グローバル化の中での日本企業の経営管理

3.使用教材<Teaching materials>

塩次喜代明・高橋伸夫・小林敏男『経営管理』有斐閣アルマ、1999

4 成績評価の方法<Grading>

出席 10%、中間レポート 30%、定期試験 60%によって評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

出席、中間レポート、定期試験をあわせた総合得点によって判断する。
秀（90～100）
経営管理の基礎的事項を理解しているうえで、日本企業の経営管理の歴史的展開過程と現在抱えている問題に関し、自己の主張を含めた秀でた洞察力がある。
優（80～89）
経営管理の基礎的事項を理解しているうえで、日本企業の経営管理の歴史的展開過程と現在抱えている問題に関し、優れた洞察力がある。
良（70～79）
経営管理の基礎的事項、日本企業の経営管理の歴史的展開過程と現在抱えている問題に関し、一応の理解がある。
可（60～69）
経営管理の基礎的事項は一応理解しているが、日本企業の経営管理の歴史的展開過程と現在抱えている問題に関する理解が必ずしも十分ではない。
不可（0～59）
経営管理の基礎的事項も、日本企業の経営管理の歴史、現在抱えている問題ついても理解が不十分である。

6.履修上の注意事項<Remarks>

特になし。

科目名<Subject>	現代企業管理論Ⅰ <Modern Business Administration Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	夏学期
担当教員名<Name>	岩田　智 <Iwata Satoshi>		研究室番号<Office>	
Office Hours	授業開始時までに決定する。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

近年の多国籍企業の管理のあり方を探ることが本授業の目的である。具体的には、主として日本の多国籍企業の輸出、生産、研究開発、組織、人的資源管理などのあり方を探っていく予定である。授業の方法は、板書、教科書、参考書、映像資料等を用いて行う。

2.授業内容<Course contents>

1、多国籍企業の経営
2、多国籍企業とは
3、国際経営戦略
4、輸出
5、海外生産
6、海外研究開発
7、国際経営組織
8、国際人的資源管理

3.使用教材<Teaching materials>

教科書
吉原英樹『国際経営』有斐閣
参考書
岩田智『研究開発のグローバル化』文眞堂
岩田智『グローバル・イノベーション』中央経済社(近刊)
その他の使用教材については、授業の中で紹介する。

4.成績評価の方法<Grading>

本授業では、毎回の出席のほか、予習・復習が不可欠である。成績評価は、①数回のレポートと②最終試験により行う。なお、最終試験を受験した受講生のみ、成績評価の対象となる。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

授業開始後、なるべく早い時期に文書にて通達する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

授業は、経営学に関する基本的な知識が習得されていることを前提に進められる。

科目名<Subject>	現代企業管理論Ⅱ <Modern Business Administration Ⅱ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	夏学期
担当教員名<Name>	牧田　正裕 <Masahiro Makita>		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

【ねらい・目的】ファイナンシャル・マネジメント（財務管理）は、企業における経営活動に不可欠な財務的資源ないし資金の調達と運用に関する諸課題を取扱う領域である。それは企業マネジメントの単なる一機能ではなく、経営戦略や経営計画などと連動しながら企業経営を方向付ける重要な役割を担っている。財務管理では財務データから企業の現状を理解することが出発点となる。そこで本講義では、まず財務諸表分析を通じて財務管理が企業経営上のどのような問題に関わっているかを論じ、その上で、財務管理の今日的な諸課題を検討していく。
【授業の方法】基本的には、テキスト、配布資料、スライドを用いてレクチャー形式で進める。また、計算問題やクイズで理解度の向上を図るとともに、さらにはディスカッション取り入れながら、双方向型・協調型の授業運営に努める。

2.授業内容<Course contents>

第１講　株式会社とコーポレート・ファイナンス
第２講　財務諸表を読む（1）：貸借対照表と財政状態
第３講　財務諸表を読む（2）：損益計算書と管理会計
第４講　財務諸表を読む（3）：在庫マネジメントの諸課題
第５講　財務諸表を読む（4）：固定資産と設備投資
第６講　財務諸表を読む（5）：収益性分析と利益管理
第７-８講　キャッシュ・フローを読む（1）（2）：基礎概念
第９講　キャッシュ・フローを読む（3）：キャッシュ・フローから財務行動を読み取る
第１０講　日本的経営財務とコーポレート・ガバナンス
第１１講　バリュエーション（企業評価）と財務戦略
第１２講　成長戦略とM&A
第１３講　事業再生の諸問題：旅館再生を中心に
第１４－１５講　戦略的ファイナンシャル・マネジメント＆コントロール：まとめにかえて

3.使用教材<Teaching materials>

奥村・瀧・金森・牧田『入門アカウンティング（改訂版）』文理閣、2007年4月（発行予定）を用いる。その他の教材については講義中に配布するとともに、参考文献についても適宜紹介する。

4.成績評価の方法<Grading>

授業ごとの小レポートまたはクイズ　５０％
最終レポート　５０％

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

なお、質問や発言等により、講義に積極的に参加した受講生に対してはサービスポイントを与える。

6.履修上の注意事項<Remarks>

簿記原理、会計学原理を履修済みであるなど、会計学の基礎を一定程度修得していることが望ましい。

科目名<Subject>	簿記原理 <Introductory Accounting>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	I	前期
担当教員名<Name>	坂柳　明 <Akira Sakayanagi>		研究室番号<Office>	４２３
Office Hours	金曜 19：00―19：30			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

営利活動を営む会社は、様々な事業活動を行って、利益獲得を目指しているが、そのような事業活動の結果を計数的に把握する手段としての簿記を学習する。簿記を学習する上では、既に与えられている会計基準を前提にした会計処理（仕訳処理）を、素早く正確にできるかどうかが問題になる。そこで授業では、練習問題を多く取り入れ、会計処理に慣れてもらいたい。

2.授業内容<Course contents>

扱うトピックとして、以下のものを考えている。どのトピックをどの程度掘り下げるかは、授業の進度による。なお、練習問題やそれに関連する議論を、ある程度網羅的に盛り込まざるを得ないため、配布プリントが多くなる（1 回あたり、A4 で 6～12 枚）。
①：簿記の必要性について、②：仕訳、勘定の説明、③：個別論点（現金、当座預金、手形取引、掛取引、商品売買取引、帳簿の締切、経過勘定、引当金等）の解説、　④：様々な帳簿、試算表と精算表、貸借対照表と損益計算書の解説

3.使用教材<Teaching materials>

久野光朗編, 『簿記論テキスト[改訂版]』, 同文館, 2006 年..他の文献は、授業で適宜紹介する。

4.成績評価の方法<Grading>

何回か課す提出課題（30～40 点）、及び定期試験（1 回）（60～70 点）の成績によって評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

4.に記載した、提出課題と定期試験の合計点が、90 点以上を「秀」、80～89 点を「優」、70～79 点を「良」、60～69 点を「可」、59 点以下を「不可」とする。
「秀」：授業内容をほぼ完璧に理解していること。
「優」：授業内容を十分に理解していること。
「良」：理解が不十分な点はあるが、簿記は修得したと認められること。
「可」：理解が不十分な点は目立つが、基本的な簿記の理解はあること。

6.履修上の注意事項<Remarks>

授業が難しい、あるいはやさしいと感じた人は、適宜市販の簿記の問題集、参考書で知識の補充、確認、先取り学習を行ってください。
2.でも述べたように、授業中の配布プリントが多くなることが予想されるため、プリントを読むのが面倒な人には、この授業は苦痛でしかないでしょう。なので、そうした人にはこの授業は勧めません。

科目名<Subject>	会計学原理 <Principle of Accounting>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	前期
担当教員名<Name>	福島　吉春 <Yoshiharu Fukushima>		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
会計は「会計」というフィルターを通して、経済単位の活動を（主として）財務数値を使って記録し計算し表現する手段である。一般に会計学では営利企業を対象として説明するが、学校法人や家庭といった非営利経済主体でも、資本主義経済社会で活動するかぎり会計学的な観点は必要である。
会計学は一般に、会計情報の利用者として企業外部の株主や債権者を想定するか、あるいは企業内部の組織人を想定するかによって財務会計と管理会計とに分けられる。本年度は担当者の専門分野との関係から、管理会計の基本的な考え方を講義する。

2.授業内容<Course contents>
第１回　イントロダクション（財務会計と管理会計）
第２回　資本主義社会と非営利経済単位
第３回　簿記の歴史①（ヨーロッパ帝国主義と数量化革命）
第４回　簿記の歴史②（複式簿記の基本構造）
第５回　家内制工業と簿記（外部取引と内部取引）
第６回　実際原価計算（工場制と原価計算の成立）
第７回　実際原価計算の計算構造
第８回　標準原価計算（能率と原価計算）
第９回　標準原価計算の計算構造
第 10 回　直接原価計算（利益管理と原価計算）
第 11 回　直接原価計算の計算構造
第 12 回　活動基準原価計算（コスト・マネジメントと原価計算）
第 13 回　活動基準原価計算の計算構造
第 14 回　バランスト・スコアカード（プラス・ゼロの思想）

3.使用教材<Teaching materials>
教科書は使用しない。
毎回、授業の最初に、内容を簡単に説明したプリントを配布する予定でいる。同時に参考文献も指示する。

4.成績評価の方法<Grading>
基本的には期末の定期試験の成績で評価するが、出席率や、講義中に数回おこなう小テストも考慮する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
定期試験２回の平均点９０点以上が「秀」、８０-８９点が「優」、７０-７９点が「良」、６０-６９点が「可」、５９点以下が「不可」であるが、それぞれ要求される水準の目安は以下のとおりである。
「秀」：会計学の考え方を理解し、理論と技術を他の面にも応用できるだけの能力がある。
「優」：会計学の考え方を理解し、理論と技術を活用する能力がある。
「良」：会計学の考え方を理解し、理論と技術を利用する能力がある。
「可」：会計学の理論と技術を利用する能力がある。
＊定期試験平均点が６０点に達しない者には、小テストの受験状況を加味して評価する。

6.履修上の注意事項<Remarks>
管理会計では計算をおこなう。それも乗除算が中心なので授業および定期試験のときは電卓を用意してくること。

科目名<Subject>	管理会計概論 <Introduction to Management Accounting>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	前期
担当教員名<Name>	乙政　佐吉 <Sakichi Otomasa>		研究室番号<Office>	４２２
Office Hours	在室中はいつでも可（できれば事前にメールで連絡して下さい）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

管理会計は経営者のための会計である。経営者は会計情報に基づいて重大な決定を行いつつ、組織を巧みに操らなければならない。本科目は、経営者が目的に応じてどのような会計情報を利用するのかについて学ぶことを目的とする。講義では、演習を交えながら、企業経営における会計情報の役割を考える。

2.授業内容<Course contents>

1．管理会計の基礎概念
2．管理会計の発展
3．原価計算とコスト情報
4．意思決定とコスト情報
5．ABC/ABM
6．TOC

3.使用教材<Teaching materials>

テキストは使用せず、必要に応じて資料を配付する。なお、予習及び復習用の参考教材として以下の書籍をあげておく。

加登豊著　『管理会計入門』　日本経済新聞社。

浅田孝幸・頼誠・鈴木研一・中川優著　『管理会計・入門〔新版〕―戦略経営のためのマネジリアル・アカウンティング』（有斐閣アルマ）　有斐閣。

4.成績評価の方法<Grading>

期末試験の結果に基づいて成績評価を行う。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

「秀（１００～９０）」：①管理会計手法に関する基礎的理解がほぼ完全である、②授業中に明示する重要なポイント、演習問題をほぼ完全に理解している、③管理会計に関連する重要問題について新聞等を通じて十分理解し、自分の意見をもっている。

「優（８９～８０）」：①上に同じ、②授業中に明示する重要なポイント、演習問題をほぼ理解していること。③新聞等を通じて管理会計に関連する重要問題についてほぼ理解している。

「良（７９～７０）」：①上に同じ、②授業中に明示する重要なポイント、演習問題を過半は理解している、③新聞等を通じて管理会計に関連する重要問題について理解できる。

「可（６９～６０）」：①管理会計手法に関する基礎的理解が過半はある、②授業中に明示する重要なポイント、演習問題を過半は理解している、③管理会計に関連する重要問題について間違った理解をしていない。

6.履修上の注意事項<Remarks>

講義に出席する際には電卓を携帯すること。

科目名<Subject>	インターンシップ <Internship>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	通年
担当教員名<Name>	遠藤薫・大矢繁夫・多木誠一郎・木村泰知・花輪啓一・副島美由紀		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

企業、官公庁等での就業体験を通じて職業意識を養うとともに、実務に触れることにより学習意欲を向上させる。

2.授業内容<Course contents>

企業、官公庁等での実習（５日から２週間程度）が中心。実習の前の、講義・講習、実習後のレポート提出が義務づけられる。詳細は、５月に公表される「平成１８年度インターンシップ教育プログラム」で明らかにされるが、だいたい、以下のスケデュールで行われる。

５月：オリエンテーション。「平成１８年度　インターンシップ教育プログラム」の公表
６月：事前講義
７月：ビジネスマナー講習。
８～９月：企業等で実習（原則として夏休み　期間）
１０月：成果レポート提出
１２月：大学、学生、研修先による意見交換　会

3.使用教材<Teaching materials>

4.成績評価の方法<Grading>

上記の教育プログラムへの参加、レポートの評価等を総合的に考慮する。

5.履修上の注意事項<Remarks>

①科目の性格上、研修先は、４月以降にならなければわからない。その数も限られているので希望者がすべて履修できるわけではない。また、研修先は、必ずしも希望どおりとはならない。
②募集は４月から５月にかけて行われるので、掲示に注意すること。
③通常の履修とは別の手続・方法で行われる。
④キャップ制の対象とはならない。
⑤実習は原則として夏休み期間に、講義・講習・レポート報告会等は通常の時間割とは別の日程や時間を使って行われるので、それに参加できることが条件である。
⑥「総合科目Ⅲ（ｴﾊﾞｰｸﾞﾘｰﾝ講座）」を履修していることが望ましい。

企業法学科
学科科目

科目名<Subject>	法学 <Introduction to Law>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅰ	前期
担当教員名<Name>	道野　真弘 <Masahiro MICHINO>		研究室番号<Office>	５２２
Office Hours	原則として在室中はいつでも可（ただし事前アポイントを取ることが望ましい）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

法律は人間社会におけるルールの中でもとくに重要なものであり、日常生活を
送る以上、すべての人が理解しておくべきものである。

本講では、全くの初学者を念頭において、法律の基礎を講義する。

2.授業内容<Course contents>

おおよそ以下のとおりを予定している。具体的には、オリエンテーションの際に説明する。

第０回　　オリエンテーション
第１回　　大学における法学の学び方概論（ガイダンス）
第２回～第７回　法学総論
第８回～最終回　企業法総論

3.使用教材<Teaching materials>

レジュメを作成・使用する予定である。下記教材は予定であり、オリエンテーションの際に提示する。

池田真朗ほか『法の世界へ』（有斐閣）
道垣内正人『自分で考えるちょっと違った法学入門』（有斐閣）
商大高大連携チーム編『守る！企業法学』（日本経済評論社）

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験（１００点満点）による。場合によっては講義中に行う不定期の小テスト等を加味して評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

前項の得点によって９０点以上を秀、８０～８９点を優、７０～７９点を良、６０～６９点を可とするが、合格者が極端に少ない場合は、この得点を成績順に並べ、定期試験受験者のうち上位６～７割程度を合格とする。受験者の成績レベルによって多少の変動はある。

なお、定期試験の採点基準については、採点後しかるべき時期に公表する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

六法を持参すること。小六法などの分厚いものが望ましいが、コンパクト六法、ポケット六法などの小型のものでもよい。重要な法律の改正が頻繁であるので、新しいものが望ましい。

なお、若干の修正の可能性があるが、その場合は修正版シラバスをオリエンテーション時に配布する。

科目名<Subject>	憲法Ⅰ <Constitutional Law Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	結城　洋一郎 <YUKI Yoichiro>		研究室番号<Office>	４５３
Office Hours	下記６参照			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

近代立憲主義の根底にある「人権を保障するための統治制度」という思想との連関において「憲法」の存在意義を学ぶとともに、我が国における憲法の全体構造を概観する。

2.授業内容<Course contents>

Ⅰ　総論
（1）憲法と人権と国民主権
（2）憲法の制定・改正・変遷
Ⅱ　日本国憲法の構造
（3）明治憲法から日本国憲法へ
（4）人権保障規定
（5）権力分立の思想と類型
（6）立法府
（7）行政府
（8）裁判所
（9）住民の自治
(10) 平和主義と国際協調

3.使用教材<Teaching materials>

特に指定しないが、以下の書籍を推奨する。
高橋・中村・野中・高見著『憲法Ⅰ』〈第４版〉（有斐閣）

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験の成績による。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

試験の点数により５段階評価（秀・優・良・可・不可）を行う。

6.履修上の注意事項<Remarks>

講義の中で随時述べる。
質問などがある者には、講義の際又は研究室で対応する。
来訪を希望する者は、電話（２７－５３５８）又は電子メール（yuki@res.otaru-uc.ac.jp）で来訪を予約されたい。

・本講義履修者は、昼間コースの「憲法・基礎Ⅰ」を履修することができない。

科目名<Subject>	民法Ⅰ　<Civil Law Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	林　誠司　<Seiji Hayashi>		研究室番号<Office>	５０９
Office Hours	随時（但し、事前に連絡を要する）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

本講義は、民法の基本理念、並びに、民法第１編総則及び第３編第５章不法行為に関する法制度、各種の法的概念の概説を行い、これらについての知識、及び、法的思考力を涵養することを目的とする。

2.授業内容<Course contents>

第１回　ガイダンス
第２回　民法の基本原理、権利能力
第３回　意思能力・行為能力
第４回　法人、物
第５回　法律行為総説、法律行為の客観的有効要件
第６回　心裡留保、虚偽表示
第７回　錯誤
第８回　詐欺・強迫
第９回　代理権、代理行為、無権代理
第10回　無権代理（承前）、表見代理
第11回　無効・取消、条件・期限、期間
第11回　取得時効、消滅時効
第12回　時効の中断・停止、時効の援用
第13回　一般的不法行為の成立要件
第14回　不法行為の効果
第15回　特殊不法行為

3.使用教材<Teaching materials>

教科書：山田卓夫他著『民法Ⅰ－総則』（有斐閣Ｓシリーズ・第三版）及び藤岡康宏他著『民法Ⅳ－債権各論』（有斐閣Ｓシリーズ・第三版）
参考文献：『別冊ジュリスト No.175 民法判例百選Ⅰ総則・物権〔第五版　新法対応補正版〕』（有斐閣）及び『別冊ジュリスト No.176 民法判例百選Ⅱ債権〔第五版 新法対応補正版〕』（有斐閣）

4.成績評価の方法<Grading>

期末試験による。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

初回の講義において提示する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

・教科書・六法は各自必ず購入し、毎回持参すること。教科書は『民法Ⅰ』と『民法Ⅳ』の２冊を使用するので、双方を購入すること。どちらか一方を購入すればよいのではない。
・法学を履修していることが望ましい。民法総則は今後民法ⅡⅢを履修していく上での前提となる基礎知識を含むものであり、今後民法の履修を予定する者は全員履修することが望ましい。
・本講義は学生各自の予習を前提とする。

科目名<Subject>	刑法　<Criminal Law>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	一原　亜貴子　<Akiko Ichihara>		研究室番号<Office>	５０８
Office Hours	随時（但し、メール等にて事前に連絡すること）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

刑法総論、特に刑法の基本原理および犯罪論について講義する。内容は抽象的な理論が中心となるが、できるだけ具体的な事例を挙げ、時には受講生に質問をしながら、正確な知識と考える力を身につけてもらえるよう進めていく。PowerPoint を使用することがある。

2.授業内容<Course contents>

１　序論
・刑法の意義と機能
・刑法理論の基礎
・罪刑法定主義
・刑法の適用範囲
２　犯罪論
・犯罪論の体系
・行為論
・構成要件論
・違法論
・責任論
・未遂犯論
・共犯論
・罪数論

3.使用教材<Teaching materials>

教科書
・中山研一『〔新版〕口述刑法総論〔補訂版〕』（成文堂）
参考書
・芝原邦爾ほか編『刑法判例百選Ⅰ総論〔第５版〕』（別冊ジュリスト№166）（有斐閣）
（これ以外の参考書については、オリエンテーションにて指示する。）

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験による。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

定期試験の成績を評点とするが、要求される水準の目安は以下のとおり。
秀（100～90）：授業内容を十分に理解して具体的事例に適切に応用することができ、且つ論点につき自説から説得的に論証できる。
優（89～80）：授業内容を十分に理解して具体的事例に適切に応用することができ、且つ論点につき自説から論証できる。
良（79～70）：授業内容を十分に理解し、これを具体的事例に適切に応用することができる。
可（69～60）：授業内容を概ね理解し、これを具体的事例に応用することができる。

6.履修上の注意事項<Remarks>

・本講義は受講生の予習を前提として進める。
・六法を必ず持参すること。

科目名<Subject>	行政法Ⅰ <Administrative Law Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	今本　啓介 <Keisuke IMAMOTO>		研究室番号<Office>	５１２
Office Hours	水曜18:00～19:00			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

本授業では，行政法のうち，行政法総論の分野を中心に扱います。また，できれば，行政救済法の分野にも多少触れられればと思っております。ただ，2単位という時間的な制約があるため，詳しく触れられない部分が多々ある点は了承していただければと思います。

2.授業内容<Course contents>

Ⅰ　行政法総論
　1　行政法の基礎理論
　2　行政立法
　3　行政計画
　4　行政処分
　5　行政手続
　6　行政上の事実行為
　7　行政強制
　8　行政契約
　9　情報公開
Ⅱ　行政救済法
　1　国家賠償法
　2　行政不服審査法
　3　行政事件訴訟法

3.使用教材<Teaching materials>

詳しくは授業で指示します。

・　大浜啓吉『行政法総論（新版）』（岩波書店，2006年）
・　大浜啓吉『行政裁判法』（岩波書店，近刊）
・　『別冊ジュリスト　行政判例百選Ⅰ・Ⅱ（第5版）』

4.成績評価の方法<Grading>

試験（期末に1回実施）と平常点（出席，出席カードへの質問・感想の記入等）によります。なお，平常点はあくまでも成績評価の際の補助的な手段にすぎないことに留意してください。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

試験と平常点の合計が80点以上の場合に「優」，70～79点の場合に「良」，60から69点の場合に「可」，59点以下の場合に「不可」をつけます。試験を受験していても，試験が0点の場合は「不可（0点）」をつけるので，注意してください。

6.履修上の注意事項<Remarks>

・　授業の際には小六法を持参すること。
・　行政法をさらに勉強したい学生諸君は，昼間コースの私担当の「行政法Ⅱ」を是非受講してください。

科目名<Subject>	国際法 <International Law>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	前期
担当教員名<Name>	佐古田　彰 <Akira Sakota>		研究室番号<Office>	３５７
Office Hours	随時（事前に電子メールで連絡すること）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

国際法は、主権国家が並存する国際社会に妥当する法である。つまり、国際法は、それぞれの国家が自国の国益をぎりぎりまで追求し自国の持つあらゆる力をぶつけ合った結果として国家が納得づくの上で作り上げた法であって、決して空理空論でもなく、また必ずしも人類の理想を示しているわけでもなく、まさに国際社会の現実を反映した法である。

本講では、そのような国際法の特徴や考え方について、判例や具体的な事例を取り上げながら、海洋法、国際経済法、国際刑事法、国際人権法、宇宙法といった国際法の各論を素材にして、説明する。受講者は、現実の国際社会における国際法の機能・有用性とその限界を理解してもらいたい。

2.授業内容<Course contents>

［1］総論
　一　国際法と国際社会
　二　国際法の法源
　三　国際法の主体
　四　国際法と国内法
［2］国際法秩序の維持と確保
　一　国際責任
　二　国際紛争の平和的解決
　三　国際の平和と安全の維待
［3］領域・空間の区分による国家管轄権の法構造
　一　国家管轄権の意義
　二　国家領域
　三　海洋の区分
　四　国際河川・国際運河・南極
　五　空域・宇宙空間

3.使用教材<Teaching materials>

小田滋＝石本泰雄編『解説条約集』三省堂
中谷和弘他『国際法（有斐閣アルマ）』有斐閣
条約集と六法（小さいものでよい）は必ず持ってくること。

4.成績評価の方法<Grading>

出席点、試験及びレポートの総合評価による。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

出席点、試験及びレポートのそれぞれについて点数を付け、その合計点により成績をつける。一応の目安は以下である。
秀：国際法学に関して極めて優れた理解力と知識を有する。
優：国際法学に関して優れた理解力と知識を有する。
良：国際法学に関してある程度の理解力と知識を有する。
可：国際法学に関して一応の理解力と知識を有する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

「2．授業内容」で記した［3］は時間の余裕があれば行う。
最初の時間（オリエンテーション）で授業を行うので、条約集と教科書を持ってくること。
この授業は出席重視である。

科目名<Subject>	商法Ⅰ <Commercial Law Ⅰ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	玉井　利幸 <Toshiyuki Tamai>		研究室番号<Office>	５３０
Office Hours	随時。ただし、事前にメールで連絡すること。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
会社法、特に株式会社に関する基本的な法的知識の習得。

2.授業内容<Course contents>
一. 会社法総論
1. 会社の種類・属性
2. 有限責任

二. 会社の管理運営機構
1. 株主・株主総会
2. 取締役・取締役会・代表取締役
3. 監査役・監査役会・会計参与
4. 委員会設置会社
5. 役員等の責任
6. 株主代表訴訟

三. 会社の資金調達
1. 株式
2. 新株予約権
3. 社債

四. 会社の設立

3.使用教材<Teaching materials>
未定。

4.成績評価の方法<Grading>
定期試験による。授業中に小テストを行った場合は、その結果も加味する。その他の要素は考慮しない。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
秀（１００～９０）：
会社法についての理解が秀でており、会社法上の法的問題を解決する能力が秀でている。
優　（８９～８０）：
会社法についての理解が優れており、会社法上の法的問題を解決する能力が優れている。
良　（７９～７０）：
会社法についての理解が良好で、会社法上の法的問題を解決する能力が良好である。
可　（６９～６０）：
会社法についての理解があり、会社法上の法的問題を解決する能力がある。
不可　（５９～０）：
会社法についての理解が十分でなく、会社法上の法的問題を解決する能力が十分でない。

6.履修上の注意事項<Remarks>
レポート等の救済措置は一切行わないので注意すること。
受講を希望する者は必ずガイダンスに出席すること。ガイダンスに出席しなかったことから生じるあらゆる不利益は受講者が引受けること。

科目名<Subject>	商法Ⅱ <Commercial Law Ⅱ>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	後期
担当教員名<Name>	多木　誠一郎 <Seiichiro Taki>		研究室番号<Office>	４３５
Office Hours	月曜日 14 時半～15 時半、19 時半～20 時半（その他在室中は、基本的にはいつでも可）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
商法総則・商行為に関する基礎を身につけることを目的にして、実際に問題になった事例を引用しながら、受講生の皆さんと一緒に考えていきます。

2.授業内容<Course contents>
商法総則
・商行為と商人
・商業登記
・商号
・営業譲渡
・商業使用人
商行為法
・一般規定
・商事売買
・種々の営業

3.使用教材<Teaching materials>
(1)教科書
春休み中に掲示板でお知らせします。
(2)判例
江頭憲治郎＝山下友信編『商法（総則・商行為）判例百選』（有斐閣、第４版、平成 14 年）
(3)六法

4.成績評価の方法<Grading>
中間試験・定期試験によります。
なお①授業中に課題を課した場合にはその評価、②受講生が少数のため出席をとる場合にはその評価、以上２点を試験の評価に対する加点要素にします（試験の評価を受講生にとって不利益的に変更することはしません。すなわち加点はしますが、減点はしません）。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
上記４による評価をして 60 点を超える者（合格者）が６～７割程度に達する場合にはそのまま最終評価とします。そうでない場合には、試験受験者のうち６～７割程度が合格するように点数補正します。受験者の成績レベルによって多少の変動はあります。
なお、採点後しかるべき時期に講評を行います。

6.履修上の注意事項<Remarks>
コツコツと地道に学習していきましょう。

科目名<Subject>	民事手続法　〈Civil　Procedure〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	後期
担当教員名<Name>	河野憲一郎　〈Kenichiro KAWANO〉		研究室番号<Office>	５１５
Office Hours	随時（但し，メールにて事前に連絡すること）。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

民法についての基礎的な理解があることを前提に，裁判所が，実体法上の権利・義務関係の存否を確認することによって私人間の法的紛争の決着を図る手続である，**（狭義の）民事訴訟手続ないし判決手続について学んでゆきます。**

（1）本学夜間主コースでは，残念ながら，講義単位数が２単位しかないため（多くの大学の講義では，４単位から６単位の単位数が割り当てられる），**講義の目的は，いわゆる民事訴訟法理論の概略を習得することとしたいと思います。**より本格的に民事訴訟法の勉強がしたいという方には，昼間コースの民事手続法の授業を受講されるか，あるいは，本講義と並行してそちらも聴講されることをお奨めいたします。

（2）授業方法は，伝統的なやり方　„ex cathedra“ です。手続の全体について話をする予定ですが，時間数との関係で，細かい話は大幅に切り捨てざるをえません。ですので，試験の準備としては，**すべてを平坦に勉強するのではなく，手続の大きな流れと問題となるポイントを要領よく押さえることが賢いということになります。**はじめのうちは大変かもしれませんが，普段から，**受講ノートをきちんと使って，受講後そのつどポイントを確認する習慣を身に付けることが，一番の試験対策となります**（受講ノートを録る意味とその具体的なノウ・ハウについては，斉藤喜門『受講ノートの録り方』（蒼丘書林，１９８３年）参照）。

2.授業内容<Course contents>

第1章　民事訴訟法への導入（民事訴訟制度の目的，手続の基本的な流れ）
第2章　訴訟の主体（裁判所，当事者・訴訟上の代理人）
第3章　訴訟手続の開始（訴えの提起，訴訟物，訴訟の開始の効果）
第4章　訴訟手続の進行（訴訟要件，裁判所・当事者の役割分担，訴えに対する被告の対応：概観／否認／裁判上の自白／抗弁，争点整理と口頭弁論，証拠調べ）
第5章　訴訟手続の終了（訴えの取下げ，請求の放棄・認諾，訴訟上の和解，終局判決）

※　講義担当者は，ボン大学（ドイツ連邦共和国）での１年間の在外研究の機会に恵まれました。その成果もトピック的に講義に織り込みたいと思います（平成１８年１０月５日から本年３月２５日までの期間は，文科省「平成１８年度大学教育の国際化推進プログラム 」のご支援を受けた）。

3.使用教材<Teaching materials>

最新版の六法を毎回持参してください。いわゆる**教科書は，特に指定いたしません**が，一薄手で有益なテキストとして，井上治典＝安西明子＝仁木恒夫＝西川佳代『ブリッジブック民事訴訟法』（信山社，２００６年）を推奨しておきます。

4.成績評価の方法<Grading>

（1）**期末試験の結果で評価します**（受講ノートの提出による若干の加点も検討していますが，出席それ自体のみを加点要素として考慮することはいたしません）。試験に際しては，**判例・書き込みのない六法のみ持ち込み可**，解答に際しては**必ずペン書きによること**（鉛筆・シャープペンシル不可）といたします。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

当然のことですが，**試験ないし成績評価に際しては，「努力した者が報われる」ものになるように配慮したいと思います。**目安としては，次のとおりです。

秀（１００～９０）：(S1)講義で話した制度や概念についてきちんと理解できており，(S2)手続の中でのそれらの位置づけや相互の関係が十分に理解できていること，(F)答案が明晰な日本語で書かれていること，
優　（８９～８０）：(S1)講義で話した制度や概念についてきちんと理解できており，(S2)手続の中でのそれらの位置づけや相互の関係が十分に理解できていること，(F)答案がわかりやすい日本語で書かれていること，
良　（７９～７０）：(S1)講義で話した制度や概念についてきちんと理解できており，(S2)手続の中でのそれらの位置づけや相互の関係がひととおりは理解できていること，(F)読んでみて一応は理解できる日本語で答案が書かれていること，
可　（６９～６０）：(S1)講義で話した制度や概念についてはきちんと理解できており，学習の成果が見られること，(F)読んでみて一応は理解できる日本語で答案が書かれていること，
不可　（５９～０）：講義で話した制度や概念について理解ができておらず，学習の成果が見られないこと，あるいは，書かれている内容が，本人以外には（あるいは，本人にも？）理解不能であること（箇条書き式のレジュメのような答案を含む。これは答案ではなく下書きである），となります。

※「可」以上の成績をとるためには，講義で「重要」と述べたポイントをしっかり勉強すること，分からない点はきちんと質問をして疑問点を解消することを心掛けてください！

（2）私語，講義中の入室など他人の迷惑になる行為を行なった者に対しては即刻退室を命じます。また，講義中の指示に従わない者に対しては，期末試験の受験を認めない等の処分を行なうので注意してください。

6.履修上の注意事項<Remarks>

（1）**基礎科目「民法Ⅰ」を履修済み，できれば民法Ⅱを履修済みないし履修中であること**（民法の知識が皆無だと，講義内容に全くついていけませんので注意！）。

（2）**受講を予定している者は，必ず第１回目のガイダンスに出席すること。**

科目名<Subject>	経済法　<Antitrust Law>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	前期
担当教員名<Name>	岡本　直貴　<Naoki Okamoto>		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この講義では、経済活動を規律する法（経済法）領域の中心とされる「独占禁止法」を取り上げる。独占禁止法の全体像を把握し、基本的な知識を習得することが、目標となる。

近年、市場における「競争」の重要性が強く意識され、カルテル・入札談合など企業が競争を阻害する事件が、社会的耳目を集めている。さらに独占禁止法改正（2006年１月施行）により執行体制が強化され、その内容及び運用に対する関心も高まりつつある。そこでこの講義では、まず独占禁止法の目的及び基本概念を解説し、次いで規制類型ごとに具体的な法運用を検討する。関連する法規（下請法、景品表示法、官製談合防止法など）も必要に応じて取り上げる。判・審決例のみならず最新の動向にも触れながら、アクティヴな講義を展開していきたい。

2.授業内容<Course contents>

講義内容は、概ね以下のとおりである。講義初日に、より詳細な講義計画を配布する。

(1)　独占禁止法の基本概念
(2)　不当な取引制限
(3)　私的独占
(4)　企業結合
(5)　不公正な取引方法
(6)　独占禁止法の執行・実現

3.使用教材<Teaching materials>

岸井ほか『経済法―独占禁止法と競争政策（第５版）』（有斐閣、2006年）
厚谷襄児＝稗貫俊文編『独禁法審決・判例百選〔第６版〕』（有斐閣、2002年）
その他の参考書・教材は、講義において適宜紹介する。

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験の成績による。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

講義初日に配布する講義計画において明記する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

最新の六法を用意すること。

科目名<Subject>	社会保障法 <Social Security Law>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	前期
担当教員名<Name>	片桐　由喜 <Yuki Katagiri>		研究室番号<Office>	４０７
Office Hours	在室中は随時。ただしメール、電話等による事前連絡があるとより確実。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
　本講義は、第一に社会保障制度について基本的な事柄を正確に理解することを目的とする。そのうえで、昨今いわれる少子高齢社会が、制度にどのような影響を及ぼしているか、また社会保障制度に内在する法的問題は何かを検討していく。

2.授業内容<Course contents>
１社会保障総論
２社会保険
（１）　医療保険
（２）　年金保険
３公的扶助
４社会福祉
（１）　社会福祉総論
（２）　老人福祉
（３）　障害者福祉
（４）　児童福祉

3.使用教材<Teaching materials>
　岩村正彦・菊池馨実『目で見る社会保障法　第三版』(有斐閣、2004 年)

4.成績評価の方法<Grading>
　試験による。ただし授業中に不定期に実施するミニテストやレポートなどは積極的に評価することがある。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
秀（100～90）　社会保障法制について正確に理解し、制度に内在する法的問題を抽出し、その背景を分析できる。
優（89～80）　社会保障制度の基本的枠組みを理解し、現状との齟齬を認識し、指摘できる。
良（79～70）　社会保障制度の概要を理解し、現実に問題があることを認識し、ある程度、説明できる。
可（69～60）　社会保障制度を一定程度を理解し、それを表現できる。

6.履修上の注意事項<Remarks>
　受講に際し、小六法クラスの六法は必携。

科目名<Subject>	国際取引法 <International Business Law>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	後期
担当教員名<Name>	中村　秀雄 <NAKAMURA, Hideo>		研究室番号<Office>	４４２
Office Hours	未定			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
　実際の国際取引がどのように行われるのかを、資料を使いながら勉強しつつ、国際取引契約の理論も学ぶ。

2.授業内容<Course contents>
①「小樽商会が London Millennium Company に機械を売却する」という取引モデルに従って、国際取引はどのように行われるか、契約書がどのように作られていくのかを学ぶ。
②オリエンテーション時に授業計画を配付する。

3.使用教材<Teaching materials>
　中村秀雄　『国際取引法講義』　第２版

4.成績評価の方法<Grading>
　定期試験の成績に、出席、授業中の発表態度、時々に提出してもらうレポートの成績を加味して評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
秀（１００～９０）：
①国際取引の特徴、ツールなどについて十分な知識を有し、活用することが出来る。
②国際契約に関する法原則を、日本法との対比で理解する。
優　（８９～８０）：
①国際取引の特徴、ツールなどについて十分な知識を有している。
②国際契約に関する法原則もある程度、理解している。
良　（７９～７０）：
①国際取引の特徴、ツールなどについて一応の知識を有している。
②契約法の原則を理解している。
可　（６９～６０）：
①国際取引の特徴、ツールなどについて不完全ながら、概略を把握している。
②契約について、概略を理解している。
不可　（５９～０）　：
　国際取引の特徴が十分に把握できておらず、ツールの理解も不足している。

6.履修上の注意事項<Remarks>
　国際取引に関心を持って、「自分が商人ならどう行動するか」を常に考えて授業にのぞんでほしい。「正しい答」より、「自分で考えた答」をもつことを期待する。
　履修名簿に従って指名して意見を述べてもらうので、出席することが重要である。

科目名<Subject>	インターンシップ　　<Internship>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	通年
担当教員名<Name>	遠藤薫・大矢繁夫・多木誠一郎・木村泰知・花輪啓一・副島美由紀		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

企業、官公庁等での就業体験を通じて職業意識を養うとともに、実務に触れることにより学習意欲を向上させる。

2.授業内容<Course contents>

企業、官公庁等での実習（５日から２週間程度）が中心。実習の前の、講義・講習、実習後のレポート提出が義務づけられる。詳細は、５月に公表される「平成１８年度インターンシップ教育プログラム」で明らかにされるが、だいたい、以下のスケデュールで行われる。

５月：オリエンテーション。「平成１８年度　インターンシップ教育プログラム」の公表
６月：事前講義
７月：ビジネスマナー講習。
８～９月：企業等で実習（原則として夏休み　期間）
１０月：成果レポート提出
１２月：大学、学生、研修先による意見交換　会

3.使用教材<Teaching materials>

4.成績評価の方法<Grading>

上記の教育プログラムへの参加、レポートの評価等を総合的に考慮する。

5.履修上の注意事項<Remarks>

①科目の性格上、研修先は、４月以降にならなければわからない。その数も限られているので希望者がすべて履修できるわけではない。また、研修先は、必ずしも希望どおりとはならない。
②募集は４月から５月にかけて行われるので、掲示に注意すること。
③通常の履修とは別の手続・方法で行われる。
④キャップ制の対象とはならない。
⑤実習は原則として夏休み期間に、講義・講習・レポート報告会等は通常の時間割とは別の日程や時間を使って行われるので、それに参加できることが条件である。
⑥「総合科目Ⅲ（ｴﾊﾞｰｸﾞﾘｰﾝ講座）」を履修していることが望ましい。

社会情報学科
学科科目

科目名<Subject>	統計科学 <Statistical Science>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	後期
担当教員名<Name>	小笠原　春彦 <Haruhiko Ogasawara>		研究室番号<Office>	５０３
Office Hours	随時			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

トピックスは統計学の中心である統計的推定・検定である。統計的推定とは限られた情報（標本）から真の値（母集団）を確率の指標とともに求める方法であり、検定とはデータから得られる結論の正しさを確率により判断する方法である。

2.授業内容<Course contents>

（1）授業のねらい、計量的方法の意義と導入
（2）仮説検定の考え方、帰無仮説と対立仮説、p 値と危険率、両側検定と片側検定、２種の誤り
（3）平均の検定（分散既知）と正規分布
（4）スチューデント化統計量と t 分布
（5）分散の検定とカイ自乗分布、等分散の検定と F 分布
（6）ノンパラメトリック検定、順位和とその分布
（7）分散分析一元配置モデル・分散分析表、平方和の期待値
（8）自由度と検定統計量
（9）分散分析二元配置モデル・分散分析表
(10) 要因の交互作用
(11) アンバランス型データの処理

3.使用教材<Teaching materials>

スライドを使用する。

4.成績評価の方法<Grading>

主に試験の結果による。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

社会情報学科標準成績評価基準による。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	計画数学 <Programming Mathematics >			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	後期
担当教員名<Name>	中村　隆志 <Takashi Nakamura>		研究室番号<Office>	３１６
Office Hours	在室中ならいつでも可			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

計画科学関連分野を学ぶうえで必要となる行列、行列式、微分、積分等の基礎知識を習得することを目的として、その意味や解法等について講義する。

2.授業内容<Course contents>

1）行列
2）行列式
3）微分法
4）不定積分と定積分
5）偏微分法
6）微分方程式

3.使用教材<Teaching materials>

[教科書]
水本久夫：「微分積分と線形代数の基礎」、培風館

4.成績評価の方法<Grading>

試験の成績、ならびに演習問題の提出状況により、総合的に評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

社会情報学科標準成績評価基準に従う。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	オペレーションズ・リサーチ　<Operations Research>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	前期
担当教員名<Name>	行方　常幸　<Tsuneyuki Namekata>		研究室番号<Office>	５２４
Office Hours	随時（ただし、メールで事前に連絡のこと； namekata@res.otaru-uc.ac.jp ）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
われわれは日々、物事を決定している。ある時は適当に、また、ある時は十分に考慮して、これらの事に当たっている。オペレーションズ・リサーチとは社会状況を定量的に捉え、望ましい状態をもたらすためにはいかに決定すべきか？与えられた状況設定ではどのような結果が生じ得るか？等、を数理的に分析する学問分野である。この授業では良く知られている話題を、例題を解くことを通じて、紹介する。授業内容の提示に情報機器（プロジェクタ）を主に利用する。手計算で解けない問題を情報処理センターのパソコンを利用して解く演習を数回行う予定である。

2.授業内容<Course contents>
線形計画法（複数の１次不等式からなる制約のもとでの１次式の最大値は？）
　定式化、シンプレックス法、双対定理、応用
ゲーム理論（自分の利益を追求する複数の意思決定者がいる状況で起こり得ることは？）
　ゼロ和ゲーム、ゲームの値、按点、非ゼロ和ゲーム、ナッシュ均衡
AHP（Analytic Hierarchy Process）；（複数の選択肢から、１対比較を通じて、望ましい１つを選ぶには？）
　AHP とは、AHP の基礎

3.使用教材<Teaching materials>
授業の開始（オリエンテーション）時に連絡する。

4.成績評価の方法<Grading>
定期試験の成績と演習時に課すレポートによる。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
社会情報学科標準成績評価基準による。

6.履修上の注意事項<Remarks>
情報処理センターの利用申請をしておくこと。

科目名<Subject>	計画科学　<Management Science>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	前期
担当教員名<Name>	石井　利昌　<Toshimasa Ishii>		研究室番号<Office>	３６０
Office Hours	事前にメールで連絡をして下さい.			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
本科目では，オペレーションズ・リサーチの一分野である組合せ最適化問題からいくつかのテーマを取り上げ，問題の特徴やその解法（アルゴリズム）について講義を行う.
組合せ最適化問題とは，与えられた条件を満たす組合せの中から最良の組合せを求める問題であり，スケジューリング，配送計画，ネットワーク設計，経路探索，生産計画などその応用範囲は広い.
授業方法は講義形式で，授業内容の提示に情報機器(プロジェクタ)を主に利用する．また，適宜レポート課題を与える.

2.授業内容<Course contents>
● 組合せ最適化問題とアルゴリズム（イントロ）
● 線形計画問題
● グラフ・ネットワーク問題
　-- 最小木問題
　-- ネットワークフロー問題
　-- 最短路問題
● 割当問題
● ナップサック問題
など

3.使用教材<Teaching materials>
<テキスト>なし
<参考資料>
「組合せ最適化[短編集]」久保幹雄，松井知己 著，朝倉書店
「組合せ最適化とアルゴリズム」久保幹雄 著，共立出版
「情報学のための離散数学」茨木俊秀 著，昭晃堂

4.成績評価の方法<Grading>
レポートと試験点により評価する.

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
社会情報学科標準成績評価基準に従う

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	経営システム基礎 <Introduction to Business Systems>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	前期
担当教員名<Name>	持田泰昭・阿部孝太郎 <Yasuaki Mochida/Kotaro Abe>		研究室番号<Office>	４０８／５１４
Office Hours	特に本講義前後の各１時間（前半：持田），オリエンテーション時に伝える（後半：阿部）			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

企業における経営システムの仕組みや活用などに関する基礎を学ぶことを目的とする．前半では，主にコンピュータを利用した情報システムに着目する．後半では，組織論を中心にした経営学の基礎を学ぶ．その際，参考資料として何回か映画等を用いる．

2.授業内容<Course contents>

第１回目：オリエンテーション

前半)

(1)情報システムとは

企業環境や情報システムの役割，利用形態の変遷と進化

(2)情報システムの構築

・エンドユーザと情報システム部門の役割と関係

・基幹業務システムと個別システム

(3)コンピュータ（特にパソコン）の構成と利用方法

全体構成，ハードウェア，ソフトウェアの階層

(4)ネットワークシステム

ＬＡＮ，C/S システム，インターネット

(5)情報システムやインターネットの安全性

・社会的問題，脆弱性

・セキュリティ向上策

後半)

・組織の形態(官僚制、事業部制など)

・リーダーシップ

・意思決定

・情報化と組織

3.使用教材<Teaching materials>

前半）資料やプリント等をほぼ毎回配付する．

後半）使用図書は適宜提示．

4.成績評価の方法<Grading>

前半と後半の成績を総合して評価する．

前半）前半の最後に試験を実施．試験の成績を重視するが，出席状況も加味する．

後半）筆記試験もしくはレポート(いずれも授業時間内に行う予定)．

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

社会情報学科標準成績評価基準に従う．

6.履修上の注意事項<Remarks>

前半）資料やプリントの配付は原則として講義時間帯のみとする．

後半）資料として映画を用いるが，授業時間内に全部見ることは不可能なので，各自レンタル・ビデオ等を利用して事前に(事後的に)見てもらうことがある．

科目名<Subject>	プロジェクト実践論 <Practice of Project>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	III・IV	前期
担当教員名<Name>	酒井弘一・平沢尚毅 <Koichi Sakai/Naotake HIRASAWA>		研究室番号<Office>	337/358
Office Hours	在室中であればいつでも可			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

現実社会は、人々が「何かことを成す」ことによって動いています。人を動かし、目的を達成するための知識は、本を読んだり授業を聞くだけでは身につかず、自分で積極的に活動し、プロジェクトに参加しなければ、得ることができません。

本授業では、参加者のグループワーク（擬似プロジェクトへの参加）が必須となります。したがって授業時間以外（土日等の休日も含む）の活動が必要となります。受講生同士の授業時間以外のスケジュール調整やリーダーシップの発揮に「真剣に」取組みことが求められます。

この授業では、そうした実践を通じた知識の体得を目標に置いています。大学の授業形態の仕組みを自ら変えていくくらいの気持ちで参加して下さい。

2.授業内容<Course contents>

受講者は数人程度のグループに分かれ、指定されたテーマに関する調査の企画、実施、まとめ、発表などの各段階でグループでの議論と作業を行い、その経過を授業時間で報告してもらいます。また、各グループの発表や報告を通じて「プロジェクト管理」について考察し、個人レポートを提出することも義務づけられます。

（授業の進め方）

［前週の宿題］→［グループワーク］→　［教室での授業：グループプレゼンテーション、テーマに関する討議］→［次週の宿題］

第１回	ガイダンス
第２回	グループ分け
第３回	プロジェクト管理の基礎技能に関する説明
第4・5回	プロジェクト実施計画作成に関する説明
第６回	実施計画に関するプレゼンテーション
第７回	プロジェクト進行のための基礎技能に関する説明
第８回	プロジェクト進行のための基礎技能に関する説明
第９回	中間報告プレゼンテーション
第10回 第11回	プロジェクト進行のための基礎技能に関する説明
第12回	最終プレゼンテーション
第13回	個人レポートの提出 プロジェクト管理に関する総括

※上記授業計画の内容などは、授業の進捗（進み具合）などによって変更される可能性もあります。

3.使用教材<Teaching materials>

・必要に応じ、資料、シートを配布。参加者が準備しなければならないものもあるが、その都度指示します。

4.成績評価の方法<Grading>

・擬似プロジェクトの成果と個人レポートが中心となります。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

・過去の受講生の熱意、行動力と比較の上、社会情報学科の基準により評価する

6.履修上の注意事項<Remarks>

・掲示を出すので、受講希望者は、掲示版に注意すること。

・他の参加者の迷惑になるので、安易な気持ちで履修届けを出さないこと。

科目名<Subject>	情報処理基礎　(Introduction to Information Processing)			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	後期
担当教員名<Name>	沼澤　政信　<NUMAZAWA Masanobu>		研究室番号<Office>	４５１
Office Hours	訪問希望者はその旨（日時，用件）をメールにて連絡ください．numazawa@res.otaru-uc.ac.jp			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

本科目では，コンピュータシステムおよびコンピュータ・ネットワークシステムについての基礎知識を学びます．

2.授業内容<Course contents>

【講義】
●情報理論
●オペレーティングシステム(OS)
●プログラミング言語
●インターネット
●ネットワークセキュリティ
などについて，使用教材に沿って学びます．

3.使用教材<Teaching materials>

坂村健　『痛快！コンピュータ学』(集英社)
各週の講義資料は Web 上に一定期間に限り提示するようにします（アクセスは学内限定）．

4.成績評価の方法<Grading>

総合点は出席および試験で評価します．

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

社会情報学科標準成績評価基準に従う。

6.履修上の注意事項<Remarks>

●授業はプロジェクタを使用して行います．
●授業では，説明の他に，プリントにて講義内容に関する問題を解かせます．
●評価方法の詳細などは，第一回講義のガイダンスにてお知らせします．

科目名<Subject>	知識科学基礎　<Introduction to Knowledge Science>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	前期
担当教員名<Name>	木村　泰知　<Yasutomo Kimura>		研究室番号<Office>	５０６
Office Hours	在室中であればいつでも可			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

人間と同等の処理能力を有するコンピュータを実現させるために、数多くの研究が行われてきた.
例えば、英語から日本語へ翻訳する機械翻訳、音声からテキストへ変換する音声認識、他にも自然言語理解などがあげられる。これらの実装には、コンピュータ内部における知識の表現方法を考える必要がある。講義の目的は、知識表現及び、その応用方法を理解することである。

2.授業内容<Course contents>

・人工知能の歴史
・コンピュータにおける知識表現
・意味解析
・音声認識
・翻訳処理
・対話処理
・情報検索
・エキスパートシステムの基礎
・ニューラルネットの基礎
・遺伝的アルゴリズムの基礎

3.使用教材<Teaching materials>

プリント教材を配布する。

4.成績評価の方法<Grading>

レポート、定期試験により評価

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

社会情報学科標準成績評価基準に従う

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	コンピュータネットワーク論　<Computer Networks and Internets>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	後期
担当教員名<Name>	三谷　和史　<Kazufumi Mitani>		研究室番号<Office>	４５５
Office Hours	mit@mit-s.otaru-uc.ac.jp まで連絡のこと.			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
目的：インターネットで一躍有名となったコンピュータネットワークを，その基礎の部分から応用まで，なぜそうなっているのかという視点から考えながら理解することを目的とする.

内容：通信の基礎からイーサネットに代表される LAN,そして IP,TCP といったネットワークプロトコル，経路制御や DNS 等の基本的アプリケーション，WWW 等の応用アプリケーション，セキュリティ等について解説を行なう.

方法：講義によって行なう.

2.授業内容<Course contents>
講義の進み具合により多少の増減があるが,

イントロダクション.
デジタルとアナログ.
通信の基礎.
イーサネットと CSMA/DA.
TCP/IP の仕組み.
経路制御と DNS.
応用アプリケーション.
ネットワークセキュリティ.

3.使用教材<Teaching materials>
教科書は特に定めないが，参考書を適宜示す.
講義には PPT を使用する.

4.成績評価の方法<Grading>
出席回数と試験の結果を総合的に評価する.

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
評価基準は社会情報学科標準成績評価基準に従う.

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	情報と職業　<Information and Profession>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	前期
担当教員名<Name>	小山　正芳　<Masayoshi Koyama>		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
この科目は、基本は教職科目である。高等学校情報科担当教員として、「職業指導」より幅広く、情報に関する職業人としてのあり方や勤労観、職業観、倫理観等を理解し、高校生にいかに教えるかを学ぶことを目的とする。

2.授業内容<Course contents>
１．情報社会の進展と職業
２．情報化と雇用の変化
３．情報化とオフィス環境の変化
４．高等学校教科「情報」の基本
５．情報処理産業と情報処理技術者
６．情報処理とシステム開発
７．情報社会における勤労観・職業観
８．情報社会の進展と倫理観
９．情報社会における勤務形態の変化
１０．情報社会における「光と影」
１１．ニート、フリーターをどう捉えるか

3.使用教材<Teaching materials>
プリントを用意する。参考文献はその都度紹介する。

4.成績評価の方法<Grading>
定期試験、レポート、出席で評価。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
授業開始時に配布する授業計画書で明示する。

6.履修上の注意事項<Remarks>
教職科目なので出席を重視。

科目名<Subject>	社会情報入門　<Introduction to Information and Management science >			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	I	後期
担当教員名<Name>	大津　晶・木村泰知 <Shou Ohtsu/Yasutomo Kimura>		研究室番号<Office>	４２８／５０６
Office Hours	在室中であればいつでも可			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

私たちは仕事をしていく上で，あるいは家庭生活を営む上で，何かをマネジメントする（最善の策を練る）必要に迫られます．また，私たちが暮らす現代の社会は，それを支えるシステムの多くにコンピュータが導入されており，その仕組みの理解と活用方法を身に付けておくことがますます重要になっていくと予想されます．

この授業の（希望的）目的は，今後さまざまな問題に直面した際にコンピュータを駆使して最良の解決策を提示しうる能力を備えることであり，そのための導入的位置づけとして，科学的思考のセンスとコンピュータの利活用の作法を獲得することを具体的な目標とします．

2.授業内容<Course contents>

以下のような内容について，トピックを交えて解説する．

前半（大津）：科学的思考について
- 直感の大切さと危うさ
- さまざまなデータの読み方
- 最適化とは
- 個人の選択と公共の選択
- 不確実な未来

後半（木村）：コンピュータの活用
- コンピュータの基礎
- コンピュータの役割
- インターネットの利用方法
- コンピュータで言葉を処理する方法

3.使用教材<Teaching materials>

（大津）なし

（木村）「情報学入門?大学で学ぶ情報社会・情報活用・情報科学?」，大内・岡部・栗原，2006 年

4.成績評価の方法<Grading>

出席とレポートにより評価する．

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

社会情報学科標準成績評価基準に従う．

6.履修上の注意事項<Remarks>

授業内容については構成上の都合により多少の変更があり得る．

科目名<Subject>	インターンシップ　<Internship>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	III・IV	通年
担当教員名<Name>	遠藤薫・大矢繁夫・多木誠一郎・木村泰知・花輪啓一・副島美由紀		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

企業、官公庁等での就業体験を通じて職業意識を養うとともに、実務に触れることにより学習意欲を向上させる。

2.授業内容<Course contents>

企業、官公庁等での実習（５日から２週間程度）が中心。実習の前の、講義・講習、実習後のレポート提出が義務づけられる。詳細は、５月に公表される「平成１８年度インターンシップ教育プログラム」で明らかにされるが、だいたい、以下のスケデュールで行われる。

５月：オリエンテーション。「平成１８年度　インターンシップ教育プログラム」の公表
６月：事前講義
７月：ビジネスマナー講習。
８～９月：企業等で実習（原則として夏休み　期間）
１０月：成果レポート提出
１２月：大学、学生、研修先による意見交換　会

3.使用教材<Teaching materials>

4.成績評価の方法<Grading>

上記の教育プログラムへの参加、レポートの評価等を総合的に考慮する。

5.履修上の注意事項<Remarks>

①科目の性格上、研修先は、４月以降にならなければわからない。その数も限られているので希望者がすべて履修できるわけではない。また、研修先は、必ずしも希望どおりとはならない。
②募集は４月から５月にかけて行われるので、掲示に注意すること。
③通常の履修とは別の手続・方法で行われる。
④キャップ制の対象とはならない。
⑤実習は原則として夏休み期間に、講義・講習・レポート報告会等は通常の時間割とは別の日程や時間を使って行われるので、それに参加できることが条件である。
⑥「総合科目III（ｴﾊﾞｰｸﾞﾘｰﾝ講座）」を履修していることが望ましい。

社会情報学科　標準成績評価基準

秀（１００～９０）：当該科目について秀でた理解力、及び応用力を有している。

優　（８９～８０）：当該科目について優れた理解力、及び応用力を有している。

良　（７９～７０）：当該科目について良い理解力、及び応用力を有している。

可　（６９～６０）：当該科目について理解力、及び応用力を有している。

不可　（５９～0）：当該科目について十分な理解力、又は応用力を有していない。

専門共通科目

科目名<Subject>	人間科学論 <Human Science>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	石崎　香理　<Kaori Ishizaki>		研究室番号<Office>	３１０
Office Hours	事前にe-mailにて連絡の上、可能な限り随時対応します。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

人間科学論とは人間を様々な側面から総合的に考えていくことである。その中心は、人間の基本である人体とそれを維持するために関わってくる生命現象や健康維持問題があげられよう。たとえば、人間が人間らしく生きる為には私たちを取り巻く社会や自然などを科学的側面から包括的に健康を考えていく必要があるだろう。生命の機能、生活、運動や休養、また近年、人類最大の敵になるだろう感染症に対する人間の防御機能である免疫機能など。特に、講義では衛生学や公衆衛生学の分野からみた人間の健康問題について関心を高めていくことを講義の目的とする。

2.授業内容<Course contents>

(1)　生命の維持・機能・身体機能について
(2)　生活習慣や運動習慣
(3)　ライフスタイルやQOL
(4)　高齢者や加齢問題など
(5)　自然環境や社会環境との繋がり
(6)　感染症について
(7)　免疫機能とは
(8)　その他

※番号は講義順ではない。

3.使用教材<Teaching materials>

指定図書及び参考文献等は特にありません。主にPower Pointを使用して講義する（ビデオ教材も併用する）。また、必要に応じて資料などを配付する。

4.成績評価の方法<Grading>

出席状況、受講態度及びレポートや定期試験の結果を総合的に評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

原則、授業に全て出席し授業へも積極的に取り組むこと。更に定期試験結果において

９０点以上「秀」：人間科学論に関する内容がほぼ完全に理解されていること。
８０-８９点「優」：人間科学論に関する基本的な内容がほぼ完全に理解されていること。
７０-７９点「良」：人間科学論に関する基本的な内容が半分以上理解されていること。
６０-６９点が可」：人間科学論に関する基本的な内容について考察することができること。
５９点-０点「不可」：人間科学論に関する内容を理解できず、考察も不適切であるとき。

前述のように、出席状況、受講態度、レポート評価などで総合的に評価されることとする。

6.履修上の注意事項<Remarks>

(1) 遅刻や早退、中途退室者は事前または授業終了後に申し出ること。
(2) 授業中は携帯電話の電源を切ること。
(3) 授業中は飲食禁止です。

科目名<Subject>	言語文化論 <Language and Culture>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	裴　崢外　<Pei zheng and others>		研究室番号<Office>	裴３０８
Office Hours	事前にe-mailにて連絡の上、可能な限り随時対応します。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

コミュニケーションの道具である言語とその背景にある文化について勉強します。現代の国際化と情報化の急速な発展は、全く異質な文化を持った個人や集団が交流・接触する機会を飛躍的に増大させ、その結果、相互の理解や合意の形成が、これまで以上に複雑かつ困難なものとなってきています。このような状況の中で、世界のさまざまな言語と文化について理解を深めていくことは、大変重要な課題となっています。本授業では、各国語と各国文化を専門とする複数の教員が講義を担当し、多種多様な言語文化を学んでいきます。

2.授業内容<Course contents>

オリエンテーション(裴崢)
Unit1　「英語で考える」とは―英語の世界と日本語の世界 (大島稔)
Unit2　日本語の名詞句の構造と意味 ―「は」と「が」の違いについて　(高野寿子)
Unit3　「現代ドイツにおける過去の克服の問題」を「アウシュヴィッツ」を通して考える　(大塚譲)
Unit4　近くて遠い英語とフランス語の関係― 英国最高位のガーター勲章の銘はフランス語で書かれている ―(高橋純)

3.使用教材<Teaching materials>

テキストは特に指定しません。適宜プリント等を用意します。

4.成績評価の方法<Grading>

各担当者が、レポートまたは筆記試験を行って評価し、それらを合算して最終評価を算出します。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

○秀：　各unitの評点および出席点を総合的に評価した評点が90点以上の者。全unitの講義内容を完全に理解したと評価できる者。
○優：　各unitの評点および出席点を総合的に評価した評点が80点以上、89点未満の者 。全unitの講義内容をほぼ完全に理解したと評価できる者。
○良：　各unitの評点および出席点を総合的に評価した評点が70点以上、79点未満の者。全unitの講義内容を相当程度に理解したと評価できる者。
○可：　各unitの評点および出席点を総合的に評価した評点が60点以上、69点未満の者。全unitの講義内容を過半は理解したと評価できる者。

6.履修上の注意事項<Remarks>

全Unitでの課題提出または受験と、2/3以上の出席が、単位認定の前提条件となります。

教職共通科目

科目名<Subject>	教育基礎論Ⅰ　〈Principles of Education Ⅰ〉			
単位数<Credits>	4	配当年次<Years>	Ⅱ	通年
担当教員名<Name>	上野耕三郎外〈Kozaburo Ueno and others〉		研究室番号<Office>	３４１
Office Hours	メールで事前に連絡をしてください。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

前期は「教育制度」、後期は「教職論」に準じる。

2.授業内容<Course contents>

前期は「教育制度」、後期は「教職論」に準じる。

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料はその都度配布する。

4.成績評価の方法<Grading>

テストによる。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

オリエンテーション時に配付する資料に記載する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	教職論　〈Introduction to Professional Teaching〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	上野耕三郎外〈Kozaburo Ueno and others〉		研究室番号<Office>	３４１
Office Hours	メールで事前に連絡をしてください。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

「いじめ」「不登校」「校内暴力」などというような問題をすこしでも考えてみれば、いままで自明視されてきた倫理がその基盤から揺らいでいることに誰もが気づくであろう。「熱血教師」が求められているのだろうか。それは現実への単純なリアクションでしかないのではなかろうか。

この授業では現職の先生方にお話をうかがうことを予定している。

その内容については現在のところ未定であるが、できれば次のようなことをうかがうことができれば、と考えている。

①現場での日々の教師の営為がどのようなものであるか。
　どのような問題に直面しているのか。

②教師あるいは学校はそれに対してどのような対応をしているのか。
　そしてそれにはどのような問題点があるのか。

教育という世界はしばしば古典的ともいえるもの言いに呪縛されている。授業を通して、古典的なもの言いから抜け出し、すこしでも現実からものを考える契機を提供できれば、そしてそれが教職の途への一歩ともなれば、この授業の目的は果たされるであろう。

2.授業内容<Course contents>

上野が数回分講義する。他の講師の方は現在折衝中である。したがって、話される内容の詳細については未定である。

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料はその都度配布する。

4.成績評価の方法<Grading>

テストによる。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

オリエンテーション時に配付する資料に記載する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	教育制度 〈Educational System〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	上野　耕三郎 〈Kozaburo Ueno 〉		研究室番号<Office>	３４１
Office Hours	メールで事前に連絡をしてください。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この授業では日本の学校、とくに高等学校の問題を中心に考えることにします。

かつて「15 の春を泣かすな」というスローガンのもとで、高校全入運動が進められましたが、その目的を果たしたいま、高校はかつては考えもしなかった問題を抱え込んでしまっています。一例を挙げれば、現在高校中退者は毎年 10 万人前後を数えています。1 クラス 40 人として毎年 2、500 クラスが消滅している計算になります。もちろん、この授業を履修している皆さんが卒業した高校では、まったく「中退」というようなことは身の廻りに生じなかったかもしれません。というのも「輪切り」された高校では問題となる現象は一様ではないからです。高校の問題といっても進学校での問題と、いわゆる教育困難校での問題とはまったく質を異にしていることもあるのです。大学受験に邁進することが暫定的課題である高校もあるし、一年の終わりには一クラスの生徒数が半分にもなった高校もある、という具合に。しかし、「中退」は高校生の先鋭的な意識を映しているように思えます。この授業では、このような現象の基層にあるものをさぐり、その打開策として制度改革を検討してみます。

2.授業内容<Course contents>

1　はじめに
2　現在の高校教育の問題点の洗い出し。何が問題となっているのだろうか？
3　いまのわれわれが立っている地点はどのようなものか？
4　戦後高校の変容
5　平等主義と高校教育。教育における「平等」とは何であろうか？
6　根本の問題はどこにあるのか
7　ヨーロッパ先進諸国の後期中等教育との比較
8　高校教育の問題が教育困難校に先鋭的にあらわれている。
9　高校進学率 90%以上の日本独特の教育現象
10　「多様化」「自由化」路線の高校改革をどう考えたらよいのだろうか？

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料はその都度配布する。

4.成績評価の方法<Grading>

テストによる。

5.成績評価の方法<Grading>

オリエンテーション時に配付する資料に記載する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	教育基礎論ⅡA 〈Principles of Education ⅡA〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	渡辺　誠 〈Makoto Watanabe〉		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

教育心理学の基本的な知識と考え方を学び、その教育実践への応用を考えることを目的とする。講義形式を中心として授業を行う。

2.授業内容<Course contents>

初回オリエーンテーション(1 回)

Ⅰ. 発達　1.遺伝と環境 2.発達の方向性 3.年齢による発達の様相(計 7 回)

Ⅱ. 学習　1.学習の基本的パターン 2.学習に関連する幾つかの現象(計 4 回)

Ⅲ. 知能(計 3 回)

3.使用教材<Teaching materials>

特定のテキストは使用せず、必要な資料をプリントにして配布する。

4.成績評価の方法<Grading>

総授業回数の三分の二以上出席した履修者を評価の対象とする(なお、遅刻は三回で欠席一回として取り扱う)。評価は定期試験の成績を基本とし(80%)、それに出席状況を加味(20%)して行う。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

秀(９０～１００)：教育心理学に関する正確な知識を持ち、教育心理学的なものの見方を身につけ、様々な現実的問題を分析できる。
優(８０～８９)：教育心理学に関する正確な知識を持ち、教育心理学的なものの見方が出来る。
良(７０～７９)：教育心理学に関するある程度の知識を持ち、教育心理学的なものの見方をよく理解している。
可(６０～６９)：教育心理学に関する必要最小限の知識を持ち、教育心理学的なものの見方を理解することが出来る。。
不可(０～５９)：教育心理学に関する必要最小限の知識を持たず、教育心理学的なものの見方が理解できない。

6.履修上の注意事項<Remarks>

単なる知識の伝授ではなく、文献を読むだけでは伝わりにくいであろう実践に使える知識、技能を、直接話をすることで伝えようとするという面が、この授業にはあります。可能な限り休まずに出席してください。

科目名<Subject>	教育心理 〈Educational Psychology〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	渡辺　誠 〈Makoto Watanabe〉		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
教育心理学の基本的な知識と考え方を学び、その教育実践への応用を考えることを目的とする。講義形式を中心として授業を行う。

2.授業内容<Course contents>
初回オリエーンテーション(1回)

Ⅰ. 発達　1.遺伝と環境 2.発達の方向性 3.年齢による発達の様相(計7回)

Ⅱ. 学習　1.学習の基本的パターン 2.学習に関連する幾つかの現象(計4回)

Ⅲ. 知能(計3回)

3.使用教材<Teaching materials>
特定のテキストは使用せず、必要な資料をプリントにして配布する。

4.成績評価の方法<Grading>
総授業回数の三分の二以上出席した履修者を評価の対象とする(なお、遅刻は三回で欠席一回として取り扱う)。評価は定期試験の成績を基本とし(80%)、それに出席状況を加味(20%)して行う。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>
秀(９０～１００)：教育心理学に関する正確な知識を持ち、教育心理学的なものの見方を身につけ、様々な現実的問題を分析できる。
優(８０～８９)：教育心理学に関する正確な知識を持ち、教育心理学的なものの見方が出来る。
良(７０～７９)：教育心理学に関するある程度の知識を持ち、教育心理学的なものの見方をよく理解している。
可(６０～６９)：教育心理学に関する必要最小限の知識を持ち、教育心理学的なものの見方を理解することが出来る。。
不可(０～５９)：教育心理学に関する必要最小限の知識を持たず、教育心理学的なものの見方が理解できない。

6.履修上の注意事項<Remarks>
単なる知識の伝授ではなく、文献を読むだけでは伝わりにくいであろう実践に使える知識、技能を、直接話をすることで伝えようとするという面が、この授業にはあります。可能な限り休まずに出席してください。

科目名<Subject>	教育基礎論ⅡB 〈Principles of Education ⅡB〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	前期
担当教員名<Name>	上野　耕三郎 〈Kozaburo Ueno〉		研究室番号<Office>	３４１
Office Hours	メールで事前に連絡をしてください。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
「教育の歴史」に準じる。

2.授業内容<Course contents>
「教育の歴史」に準じる。

3.使用教材<Teaching materials>
必要な資料はその都度配布する。

4.成績評価の方法<Grading>
テストによる。

5.成績評価の方法<Grading>
オリエンテーション時に配付する資料に記載する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	教育の歴史 〈History of Education〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	前期
担当教員名<Name>	上野　耕三郎 〈Kozaburo Ueno〉		研究室番号<Office>	３４１
Office Hours	メールで事前に連絡をしてください。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この講義では、日本の明治以降の教育をまずはざっと見ることから始め、その起源となる西洋の近代教育の考え方、とくに思想に焦点を当て、その検討をすることをめざす。

日本の学校の歴史をきわめておおざっぱに区切るとすると、３つに区切ることも可能であろう。私たちはその第３期にいる。そのことを理解すると、現在の学校問題も自ずと理解できよう。このことを理解することが、授業のひとつの柱である。

日本の教育の場合は（ヨーロッパでも多かれ少なかれそうですが）上からの国家による教育が近代化の推進力となった。絶対主義的国家体制下での教育に対する、抵抗原理として「子ども中心」の教育が謳われることがある。私たちが自明視している「子ども」という考え方を検討する。これが第２の柱である。

2.授業内容<Course contents>

１．はじめに
２．日本の近代公教育の歴史－どうして日本はこんなに教育熱心だったのか
　学制序文「被仰出書」
３．戦後の教育－『山びこ学校』と無着成恭
４．1970 年代中葉以降の学校問題－校内暴力、いじめ、不登校
５．日本の学校 130 年の歴史をどう見るか
６．絶対主義国家と教育－「教育勅語」「御真影」
７．戦争と国民学校
８．大正新教育－池袋児童の村
９．ルソー－子どもの発見と消極教育
10．ペスタロッチー貧民教育の実践者
11．フレーベル－幼稚園の創始者
12．デューイ－アメリカ進歩主義教育
13．子ども中心主義とは何か
14．子どもの発見と現代の教育問題
15．まとめ

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料はその都度配布する。

4.成績評価の方法<Grading>

テストによる。

5.成績評価の方法<Grading>

オリエンテーション時に配付する資料に記載する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	教育方法学 〈Educational Methods〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	前期
担当教員名<Name>	岡部　善平 〈Yoshihei Okabe〉		研究室番号<Office>	４５４
Office Hours	メール等で事前に連絡してください			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この講義では、教育方法についての基礎的な知識を習得することを目的とする。そのために、学習指導および授業に関する原理的、実際的な諸問題を中心に講義する。

学校教育における授業は、知識伝達の場であると同時に、教師－生徒間の主要なコミュニケーションの場でもある。本講義では、学習者の知識習得の過程とその過程における人間関係の視点から、これまで展開されてきた教育方法に関する諸理論を解説し、今日の授業実践において学ぶべきことを明らかにする。また、いくつかの授業実践やわれわれ自身の授業経験を取り上げ、様々な授業形態および授業の構造について検討する。その上で、学習指導案の書き方を学びながら、実際に指導案を作成し、教材研究および授業設計の方法について考えていくつもりである。

2.授業内容<Course contents>

１．教育経験からみた教育方法
２．学び方と教育方法
３．教室におけるコミュニケーション
４．教育課程と教育方法
５．教育評価の目的と方法
６．授業の構造
７．学習指導案の作成

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料をコピーして配布する予定。参考書はその都度指定する。

4.成績評価の方法<Grading>

学習指導案の提出とその内容（４０%）、指定されたテーマによる期末レポートの提出とその内容（４０%）、および授業中の小レポートの提出（２０%）によって行う。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	教育方法 〈Educational Methods〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	前期
担当教員名<Name>	岡部　善平 〈Yoshihei Okabe〉		研究室番号<Office>	４５４
Office Hours	メール等で事前に連絡してください			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この講義では、教育方法についての基礎的な知識を習得することを目的とする。そのために、学習指導および授業に関する原理的、実際的な諸問題を中心に講義する。

学校教育における授業は、知識伝達の場であると同時に、教師ー生徒間の主要なコミュニケーションの場でもある。本講義では、学習者の知識習得の過程とその過程における人間関係の視点から、これまで展開されてきた教育方法に関する諸理論を解説し、今日の授業実践において学ぶべきことを明らかにする。また、いくつかの授業実践やわれわれ自身の授業経験を取り上げ、様々な授業形態および授業の構造について検討する。その上で、学習指導案の書き方を学びながら、実際に指導案を作成し、教材研究および授業設計の方法について考えていくつもりである。

2.授業内容<Course contents>

1．教育経験からみた教育方法
2．学び方と教育方法
3．教室におけるコミュニケーション
4．教育課程と教育方法
5．教育評価の目的と方法
6．授業の構造
7．学習指導案の作成

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料をコピーして配布する予定。参考書はその都度指定する。

4.成績評価の方法<Grading>

学習指導案の提出とその内容（４０％）、指定されたテーマによる期末レポートの提出とその内容（４０％）、および授業中の小レポートの提出（２０％）によって行う。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	商業科教育法 〈Methodology of Teaching Commerce 〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	前期
担当教員名<Name>	小山　正芳 〈Masayoshi Koyama〉		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

高等学校の商業科担当教員として、教科指導上の基礎的知識及び科目の内容について、理解・修得することを目的とする。

2.授業内容<Course contents>

1．学校教育改革の動きと方向
2．戦後の高等学校商業教育の移り変わり
3．現行学習指導要領による商業教育
4．教科「商業」の各科目について
5．商業科目の学習指導法と資格取得
6．高等学校教育の現状と課題
7．特色ある学校教育と商業教育
8．「キャリア教育」と勤労観・職業観
9．学校教育における教師の役割りと研修
10．最近の学校教育及び教員採用（商業）の動き他

3.使用教材<Teaching materials>

プリントを用意する。参考文献・図書はその都度紹介する。

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験、レポート、出席で評価。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

授業開始時に配布する授業計画書で明示する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

教職科目なので出席を重視。

科目名<Subject>	商業科教育法Ⅰ　〈Methodology of Teaching Commerce Ⅰ〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	前期
担当教員名<Name>	小山　正芳　〈Masayoshi Koyama〉		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

高等学校の商業科担当教員として、教科指導上の基礎的知識及び科目の内容について、理解・修得することを目的とする。

2.授業内容<Course contents>

1．学校教育改革の動きと方向
2．戦後の高等学校商業教育の移り変わり
3．現行学習指導要領による商業教育
4．教科「商業」の各科目について
5．商業科目の学習指導法と資格取得
6．高等学校教育の現状と課題
7．特色ある学校教育と商業教育
8．「キャリア教育」と勤労観・職業観
9．学校教育における教師の役割りと研修
10．最近の学校教育及び教員採用（商業）の動き他

3.使用教材<Teaching materials>

プリントを用意する。参考文献・図書はその都度紹介する。

4.成績評価の方法<Grading>

定期試験、レポート、出席で評価。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

授業開始時に配布する授業計画書で明示する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

教職科目なので出席を重視。

科目名<Subject>	商業科教育法Ⅱ　〈Methodology of Teaching Commerce Ⅱ〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	後期
担当教員名<Name>	越前元博・田中修一<Motohiro Echizen/Shuichi Tanaka>		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この授業は「商業科教育法Ⅰ」を受け、実際の教育現場を想定しながら、年間指導計画、単元別指導計画及び学習指導案（1時間分）を各自が立案し、それに基づいて実際に模擬授業を行うことを目的とする。

具体的には簿記会計や情報処理（プログラミング）に関する教材研究、指導計画や学習指導案の作成から始まり、実際の模擬授業を通して、授業の導入、展開、工夫した教材の利用など効果的な学習指導方法を考察する。また、相互評価により、学習目標を達成するための意見交換を行い、商業教育における教科指導技術の向上を図る。

2.授業内容<Course contents>

半期のうち、前半を「簿記会計」、後半を「情報処理（プログラミング）」にあてる。履修者は年間指導計画、単元別指導計画及び学習指導案に基づいて授業構成を考え、実際に模擬授業を行う。《対話型・双方向の授業》

第1回（第8回）　オリエンテーション、簿記会計・情報処理（プログラミング）の学習目標と指導法、商業科の教育課程
第2回（第9回）　年間指導計画、単元別指導計画、学習指導案、指導ノートの作成及び評価
第3回（第10回）　模擬授業～学習指導案の作成と実践①
第4回（第11回）　模擬授業～学習指導案の作成と実践②
第5回（第12回）　模擬授業～学習指導案の作成と実践③
第6回（第13回）　模擬授業～学習指導案の作成と実践④
第7回（第14回）　模擬授業～学習指導案の作成と実践⑤

3.使用教材<Teaching materials>

・事前にインターネットで学習指導案の事例を検索し、研究しておくとよい。
・高等学校教科書を購入してもらう。使用教科書は最初の講義で指示する。
・参考文献：「高等学校学習指導要領　解説・商業編」　平成12年3月文部省

4.成績評価の方法<Grading>

平常点（模擬授業、学習指導案）、出席状況、提出物等により総合的に評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

・秀（１００～９０）：模擬授業に向けた教材準備が十分にされており、指導技術や指導方法を柔軟かつ的確に実践することができる。
・優（８９～８０）：模擬授業に向けた教材準備が十分にされており、指導技術や指導方法を的確に実践することができる。
・良（７９～７０）：模擬授業に向けた教材準備がされており、指導技術や指導方法を的確に実践することができる。
・可（６９～６０）：模擬授業に向けた教材準備がされており、指導技術や指導方法を実践することができる。
・不可（５９～０）：模擬授業に向けた教材準備がされていない。

6.履修上の注意事項<Remarks>

・実践的な授業内容であるため、出席を重視する。
・「商業科教育法Ⅰ」を履修済み、または履修中であること。
・「簿記論」を履修済み、または履修中であることが望ましい。
・Excel、Word、Powerpointなどパソコンの操作に慣れていることが望ましい。《情報機器の使用》
・模擬授業の際は、毎時の学習指導案を人数分作成し、教材準備を十分に行った上で授業に臨むこと。

科目名<Subject>	英語科教育法 〈Methodology of Teaching English〉			
単位数<Credits>	4	配当年次<Years>	Ⅲ	通年
担当教員名<Name>	高井　收 〈Osamu Takai〉		研究室番号<Office>	５０１
Office Hours	金 14：30～15：30			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

英語科教育の全般について、理論と具体的な指導方法を修得する事を目標とします。授業は与えられたトピックについて皆さんが作成したパワーポイントでの発表を中心に討論するという学習者主導型の授業形態をとり、皆さんの体験を通して英語教育方法論を修得してもらいます。

2.授業内容<Course contents>

前期は理論的な面に焦点を当て、前半、英語教育学を概観し、国際英語としての日本における英語教育の現状を考えてゆきます。現在注目されている早期教育にも触れ、後半では、英語教授法、第二言語習得理論を考察します。進み具合により、4 技能の指導方法にも触れることも出来ます。

後期では英語の具体的な指導方法および授業運営の方法などを概観し、学習指導案に基づき模擬授業をしてもらいます。情報機器・視聴覚機器の教室内利用方法も指導します。

3.使用教材<Teaching materials>

望月昭彦編著、久保田章・磐崎弘定・卯城祐司著（2005）『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店

4.成績評価の方法<Grading>

授業実施総回数の 2／3 以上の出席者を「成績評価対象者」とし、出席、定期試験、その他、授業への参加態度などを総合して評価します。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

授業実施総回数の 2／3 以上の出席者を「成績評価対象者」とし、出席、定期試験、その他、授業への参加態度などを総合して評価します。

秀（１００～９０）：総合評価 100～90%、
優　（８９～８０）：総合評価 89～80%
良　（７９～７０）：総合評価 79～70%
可　（６９～６０）：総合評価 69～60%
不可　（５９～０）　：授業実施総回数の 2/３以上出席していないか、または、総合評価 59%以下

6.履修上の注意事項<Remarks>

フロッピーディスクまたはメモリーディスクを用意してください。

英語の教師を目指す学生を対象としていますので、しっかりした目標意識を持って受講して下さい。

科目名<Subject>	英語科教育法Ⅰ 〈Methodology of Teaching English Ⅰ〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	前期
担当教員名<Name>	高井　收 〈Osamu Takai〉		研究室番号<Office>	５０１
Office Hours	金 14：30～15：30			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

英語科教育の全般について、理論と具体的な指導方法を修得する事を目標とします。授業は与えられたトピックについて皆さんが作成したパワーポイントでの発表を中心に討論するという学習者主導型の授業形態をとり、皆さんの体験を通して英語教育方法論を修得してもらいます。

2.授業内容<Course contents>

前期は理論的な面に焦点を当て、前半、英語教育学を概観し、国際英語としての日本における英語教育の現状を考えてゆきます。現在注目されている早期教育にも触れ、後半では、英語教授法、第二言語習得理論を考察します。進み具合により、4 技能の指導方法にも触れることも出来ます。

3.使用教材<Teaching materials>

望月昭彦編著、久保田章・磐崎弘定・卯城祐司著（2005）『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店

4.成績評価の方法<Grading>

授業実施総回数の 2／3 以上の出席者を「成績評価対象者」とし、出席、定期試験、その他、授業への参加態度などを総合して評価します。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

授業実施総回数の 2／3 以上の出席者を「成績評価対象者」とし、出席、定期試験、その他、授業への参加態度などを総合して評価します。

秀（１００～９０）：総合評価 100～90%、
優　（８９～８０）：総合評価 89～80%
良　（７９～７０）：総合評価 79～70%
可　（６９～６０）：総合評価 69～60%
不可　（５９～０）　：授業実施総回数の 2/３以上出席していないか、または、総合評価 59%以下

6.履修上の注意事項<Remarks>

フロッピーディスクまたはメモリーディスクを用意してください。

英語の教師を目指す学生を対象としていますので、しっかりした目標意識を持って受講して下さい。

科目名<Subject>	英語科教育法Ⅱ　〈Methodology of Teaching English Ⅱ〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	後期
担当教員名<Name>	高井　收　〈Osamu Takai〉		研究室番号<Office>	５０１
Office Hours	金 14：30～15：30			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

英語科教育の全般について、理論と具体的な指導方法を修得する事を目標とします。授業は後期の実践編においては模擬授業などを入れ、学習者主導型の授業形態となります。皆さんの体験を通して英語教育方法論を修得してもらいます。

2.授業内容<Course contents>

この後期では英語の具体的な指導方法および授業運営の方法などを概観し、学習指導案に基づき模擬授業をしてもらいます。情報機器・視聴覚機器の教室内利用方法も指導します。

3.使用教材<Teaching materials>

望月昭彦編著、久保田章・磐崎弘定・卯城祐司著（2005）『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店

4.成績評価の方法<Grading>

授業実施総回数の２／３以上の出席者を「成績評価対象者」とし、出席、定期試験、その他、授業への参加態度などを総合して評価します。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

授業実施総回数の２／３以上の出席者を「成績評価対象者」とし、出席、定期試験、模擬授業、その他、授業への参加態度などを総合して評価します。

秀（１００～９０）：総合評価 100～90%、
優　（８９～８０）：総合評価 89～80%
良　（７９～７０）：総合評価 79～70%
可　（６９～６０）：総合評価 69～60%
不可　（５９～０）　：授業実施総回数の 2/３以上出席していないか、または、総合評価 59%以下

6.履修上の注意事項<Remarks>

前期の英語科教育法Ⅰが基礎となります。フロッピーディスクまたはメモリーディスクを用意してください。英語の教師を目指す学生を対象としていますので、しっかりした目標意識を持って受講して下さい。

科目名<Subject>	英語科教育法Ⅲ　〈Methodology of Teaching English Ⅲ〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	前期
担当教員名<Name>	小林　敏彦　〈Toshihiko Kobayashi〉		研究室番号<Office>	３１９
Office Hours	水曜日１２：１５～１２：４５／金曜日１２：１５～１２：４５			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

CAL 教室におけるパソコンと大型スクリーンを活用し、オンライン・インターラクション（ブログ、ウェブサイト、掲示板、チャット、メール）を併用した、わかりやすく、楽しく、ため　になる教材開発論（material development）の授業を行う。授業は日本語で行う。将来中学、高校　の英語授業で活用できるコミュニケーションを中心としたリスニングとスピーキング活動を体　験しながら、実際にオーセンティックなデータを自ら収集し加工し作成し配布するための技法を学ぶ。

2.授業内容<Course contents>

１：教材作成法　２：ピア・エバリュエーション　３：優秀者プレゼンテーションの流れて行い。以下の分野での教材作成を予定している。毎回授業の冒頭に、前回の授業の内容に関する試験を行う。

第１回　洋楽を活用したリスニング：教材作成法
第２回　洋楽を活用したリスニング：ピア・エバリュエーション
第３回　洋楽を活用したリスニング：優秀者プレゼンテーション
第４回　生データを活用したリスニング（アナウンス）：教材作成法
第５回　生データを活用したリスニング（アナウンス）：ピア・エバリュエーション
第６回　生データを活用したリスニング（アナウンス）：優秀者プレゼンテーション
第７回　生データを活用したリスニング（インタビュー）：教材作成法
第８回　生データを活用したリスニング（インタビュー）：ピア・エバリュエーション
第９回　生データを活用したリスニング（インタビュー）：優秀者プレゼンテーション
第１０回　情報ギャップを利用したスピーキング：教材作成法
第１１回　情報ギャップを利用したスピーキング：ピア・エバリュエーション
第１２回　情報ギャップを利用したスピーキング：優秀者プレゼンテーション
第１３回　洋画を活用した４技能統合活動：教材作成法
第１４回　洋画を活用した４技能統合活動：ピア・エバリュエーション
第１５回　洋画を活用した４技能統合活動：優秀者プレゼンテーション

3.使用教材<Teaching materials>

配布資料のみ

4.成績評価の方法<Grading>
5.成績評価の基準<Grading Criteria>

「優」は授業態度が優秀で、半期で無遅刻無欠席、課題をすべて提出し、かつ小テスト及び定期試験の平均点が８０点を超えた者に与えられる。
「良」は授業態度が優秀で通年で欠席および遅刻が１回、課題をすべて提出し、かつ小テスト及び定期試験が７０～７９点の者に与えられる。
「可」は授業態度が優秀で、半期で遅刻および欠席が２回、かつ課題をすべて提出し、小テスト及び定期試験が６０～６９点の者に与えられる。
「不可」は通年で遅刻および欠席が３回に達した者、課題を一度でも提出しなかった者、または小テスト及び定期試験が６０点に達しなかった者に与えられる。体育会系部活動の大会遠征（合宿は認めない）については英文での報告を翌週間の出席日深夜までに行うことで１回までのみ認め、欠席にカウントしない。ただし、この権利を有するのは大会出場選手及び補欠選手に限定される。その他、事情を考慮しケースバイケースで対応する。また、授業準備不足や成績（授業態度）不良の受講生には特別課題と補講が課される。また、２週連続休むと自動的に不可になる。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	情報科教育法Ⅰ　〈Methodology of Teaching Information System Ⅰ〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	前期
担当教員名<Name>	古谷　次郎　〈Jiro Furuya〉		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

本授業は，情報教育の特質と高等学校における情報教育の内容を学習，理解することにより，情報科教員に必要な資質と能力の習得を目的とする。

本授業は，主に普通教科「情報」と専門教科「情報」の目標，科目編成，内容について，情報機器を用いながら講義・実習形式で解説，展開する。

2.授業内容<Course contents>

第１回　普通教科「情報」の目標と科目編成
第２～３回「情報A」の内容と授業展開
第４～５回「情報B」の内容と授業展開
第６～７回「情報C」の内容と授業展開
第８回　専門教科「情報」の目標と科目編成
第９～14回　専門教科「情報」の各科目の内容と授業展開

3.使用教材<Teaching materials>

高等学校学習指導要領解説　情報編　開隆堂出版 ¥90+税

4.成績評価の方法<Grading>

出席回数と提出課題及び定期試験によって評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

秀(100-90)普通教科「情報」と専門教科「情報」の目標と内容等について秀でた理解力を有している。
優(89-90)普通教科「情報」と専門教科「情報」の目標と内容等について優れた理解力を有している。
良(79-70)普通教科「情報」と専門教科「情報」の目標と内容等について良く理解している。
可(69-60)普通教科「情報」と専門教科「情報」の目標と内容等について理解している。
不可(59-0)普通教科「情報」と専門教科「情報」の目標と内容等について理解していない。

6.履修上の注意事項<Remarks>

出席も重視します。

科目名<Subject>	情報科教育法Ⅱ　〈Methodology of Teaching Information System Ⅱ〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ・Ⅳ	夏季集中
担当教員名<Name>	鰐淵　泰彰　〈Yasuaki Wanibuchi〉		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

本授業は，情報教育の特質と高等学校における情報教育の内容を学習理解することにより
情報科教員に必要な資質と能力を習得することを目的とする。
本授業は，主に普通教科「情報」と専門教科「情報」の年間指導計画，単元別指導計画及び学習指導案の作成とそれに基づく模擬授業を演習形式で解説，展開する。

2.授業内容<Course contents>

・情報モラル
・年間指導計画，単元別指導計画，学習指導案の作成
・普通教科「情報」の模擬授業
・専門教科「情報」の模擬授業（基本的なアルゴリズムを理解しておくこと）

3.使用教材<Teaching materials>

高等学校学習指導要領解説情報編
開隆堂出版

4.成績評価の方法<Grading>

出席回数と提出課題及び演習（模擬授業）の成果によって評価する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

秀　(100-90)　普通教科「情報」と専門教科「情報」の目標と内容等について秀でた理解力を有している。
優　(89-90)　普通教科「情報」と専門教科「情報」の目標と内容等について優れた理解力を有している。
良　(79-70)　普通教科「情報」と専門教科「情報」の目標と内容等について良く理解している。
可　(69-60)　普通教科「情報」と専門教科「情報」の目標と内容等について理解している。
不可(59-0)　普通教科「情報」と専門教科「情報」の目標と内容等について理解していない。

6.履修上の注意事項<Remarks>

「情報科教育法Ⅰ」を履修済みであること。
出席も重視する。

科目名<Subject>	道徳教育の研究　〈Moral Education〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	後期
担当教員名<Name>	上野　耕三郎　〈Kozaburo Ueno〉		研究室番号<Office>	３４１
Office Hours	メールで事前に連絡をしてください。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

「道徳教育」に準じる。

2.授業内容<Course contents>

「道徳教育」に準じる。

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料はその都度配布する。

4.成績評価の方法<Grading>

テストによる。

5.成績評価の方法<Grading>

オリエンテーション時に配付する資料に記載する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	道徳教育　〈Moral Education〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	後期
担当教員名<Name>	上野　耕三郎　〈Kozaburo Ueno〉		研究室番号<Office>	３４１
Office Hours	メールで事前に連絡をしてください。			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

学校問題現象といわれるものをすこしでも考えてみれば、今まで自明視されてきた倫理がその基盤から揺らいでいることに誰しも気づくであろう。新たな時代には新たな倫理が求められているのかもしれない。だが、教育という世界はしばしば古典的（「学校的」といってもよいかもしれない）ともいえるもの言いに呪縛されている。それも事実である。とすると、揺るぎなき倫理を前提として「道徳」教育を考えても、その有効性は限定されたものとなろう。

「じゃあ具体的にどうしたらよいか」と訊ねる声が聞こえそうだが、正直言うとつらいものがある。中学教師も必ずしも確固たる「道徳」教育の手だてをもっているわけではない。というのも、

①「道徳教育」は特設「道徳」のなかでのみおこなえるものではない。

②子どもと学校は高度な資本主義のなかで翻弄されている。だから、「教師」や「生徒」を責めてもほとんど意味がない。

③学校教育問題以前に、家庭そして社会が地殻変動を起こしている。学校は高度資本主義社会に取り残された古典的制度であるがゆえに、「建前」を繰り返し主張する。

だから、特設「道徳」では、教師の意図することを適当に理解したポーズをとっておけばよいことになる。

④中学生は思春期の段階にある。

②③については、これまでの授業で少しは理解してもらえたのではないか、と考えている。しかし、④については深く触れてこなかった。この授業ではできるかぎり②③と関連させて、④に焦点を合わせて、10 代の心のありようを考えてみたい。もう少し言うと、「一人前」あるいは大人になることの難しさを現代の 10 代は抱えている。

このテーマを中心にして授業を展開する予定である。

2.授業内容<Course contents>

思春期の問題行動とみなされることがらをとりあげながら、中学生や高校生の心的ありようを探ってみる。

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料はその都度配布する。

4.成績評価の方法<Grading>

テストによる。

5.成績評価の方法<Grading>

オリエンテーション時に配付する資料に記載する。

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	教育実践論Ⅰ　〈Practical Pedagogy Ⅰ〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	岡部　善平　〈Yoshihei Okabe〉		研究室番号<Office>	４５４
Office Hours	メール等で事前に連絡してください			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この授業は、学校教育において学習指導とともに重要な役割を果たす生徒指導について、その基礎的な知識を習得することを目的としている。

生徒指導は、これまで問題行動を起こした生徒への対応や服装検査などの生活指導に限定されて行われる傾向にあった。もちろんこれらも生徒指導における活動内容の一部ではあるが、近年生徒指導は、進路および学習ガイダンス機能の充実など、学習指導では十分に対応できない人間形成に関わる重要な役割を担うことが期待されている。そこで本講義では、現代の中学生、高校生、および学校が置かれた社会環境をふまえながら、生徒指導の目的や意義、役割について考える。また、いくつかの事例を取り上げ、生徒指導の方法や教職についての理解を深めていく。

2.授業内容<Course contents>

１．生徒指導の基本理解
２．現代の学校教育における諸問題
３．学校における組織的な生徒指導
４．生徒指導の方法
５．生徒指導の展開例

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料をコピーして配布する予定。参考書はその都度指定する。

4.成績評価の方法<Grading>

指定されたテーマによる期末レポートの提出とその内容（７０%）、授業中の発表や報告（３０%）によって行う。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	生徒指導　〈Guidance and Counseling〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	岡部　善平　〈Yoshihei Okabe〉		研究室番号<Office>	４５４
Office Hours	メール等で事前に連絡してください			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この授業は、学校教育において学習指導とともに重要な役割を果たす生徒指導について、その基礎的な知識を習得することを目的としている。

生徒指導は、これまで問題行動を起こした生徒への対応や服装検査などの生活指導に限定されて行われる傾向にあった。もちろんこれらも生徒指導における活動内容の一部ではあるが、近年生徒指導は、進路および学習ガイダンス機能の充実など、学習指導では十分に対応できない人間形成に関わる重要な役割を担うことが期待されている。そこで本講義では、現代の中学生、高校生、および学校の置かれた社会環境をふまえながら、生徒指導の目的や意義、役割について考える。また、いくつかの事例を取り上げ、生徒指導の方法や教職についての理解を深めていく。

2.授業内容<Course contents>

１．生徒指導の基本理解
２．現代の学校教育における諸問題
３．学校における組織的な生徒指導
４．生徒指導の方法
５．生徒指導の展開例

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料をコピーして配布する予定。参考書はその都度指定する。

4.成績評価の方法<Grading>

指定されたテーマによる期末レポートの提出とその内容（７０%）、授業中の発表や報告（３０%）によって行う。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	教育相談 〈Educational Counseling〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	前期
担当教員名<Name>	渡辺　誠 〈Makoto Watanabe〉		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

単に生徒から相談を受けた場合の接し方だけではなく、いわゆるむずかしい生徒や家族との関わりといったことまでを含め、実際例を取り上げながら幅広く考えてゆく。また、具体的なテーマとして、非行、不登校、いじめ等の問題を扱う。授業の進め方は講義形式のみではなく、質疑応答、文献を読んでのレポートに基づくディスカッションなどの方法も取り入れる予定である。

2.授業内容<Course contents>

初回オリエンテーション(1回)
1. 教育相談の基本的な考え方と態度(9回)
2. 不登校(2回)
3. 非行(2回)
4. いじめ(1回)

3.使用教材<Teaching materials>

特定のテキストは使用せず、必要な資料をプリントにして配布する。

4.成績評価の方法<Grading>

総授業回数の三分の二以上出席した履修者を評価の対象とする(なお、遅刻は三回で欠席一回として取り扱う)。評価は出席を含む授業への参加状況(50%)と期末のレポート(50%)により行う。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

秀(９０～１００)：教育相談に関する正確な知識を持ち、教育相談的なものの見方を身につけ、様々な現実的問題を分析できる。
優(８０～８９)：教育相談に関する正確な知識を持ち、教育相談的なものの見方が出来る。
良(７０～７９)：教育相談に関するある程度の知識を持ち、教育相談的なものの見方をよく理解している。
可(６０～６９)：教育相談に関する必要最小限の知識を持ち、教育相談的なものの見方を理解することが出来る。。
不可(０～５９)：教育相談に関する必要最小限の知識を持たず、教育相談的なものの見方が理解できない。

6.履修上の注意事項<Remarks>

文献を読むだけでは伝わりにくいであろう実践的知識、技能を、直接話をすることで伝えようとするという面が、この授業にはあります。可能な限り休まずに出席し、授業に参加してください。

科目名<Subject>	教育実践論Ⅱ 〈Practical Pedagogy Ⅱ〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	岡部　善平 〈Yoshihei Okabe〉		研究室番号<Office>	４５４
Office Hours	メール等で事前に連絡してください			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この講義では、学校教育の不可欠な枠組みをなす教育課程について、その編成・実施・評価の諸原理および諸課題を、とくに中等教育に焦点を当てて解説する。それによって、学校での教育課程編成に関する基本的な視点の習得をめざす。

生徒にいつ、何を学ばせるかという議論は、これまで様々な観点から展開されてきた。とくに近年、各学校が自主的に教育課程を編成し、教育の多様化・個性化が進行する傾向にあって、教育課程は、それを実際に学ぶ生徒の実態にまで踏み込んで検討される必要に迫られている。そこで本講義では、学習指導要領の変遷および教育課程に関する諸理論を、われわれ自身の教育経験を捉え直しながら検討し、今日の教育課程をめぐる状況と問題点について考えていく。また、ユニークな教育課程をもつ事例校の教育実践を取り上げながら、学校における教育課程編成の方法と課題について考える。

2.授業内容<Course contents>

１．教育課程とカリキュラムの概念
２．学習指導要領の変遷
３．中等教育における教育課程の特質と問題点
４．教育課程の理論的背景
５．教育意図と学習経験のズレ
６．教育課程の評価と経営
７．学校における教育課程編成の実際

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料をコピーして配布する予定。参考書はその都度指定する。

4.成績評価の方法<Grading>

指定されたテーマによる期末レポートの提出とその内容（７０%)、授業中の発表や報告（３０%）によって行う。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	教育課程論 〈Curriculum Development〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	岡部　善平 〈Yoshihei Okabe〉		研究室番号<Office>	４５４
Office Hours	メール等で事前に連絡してください			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この講義では、学校教育の不可欠な枠組みをなす教育課程について、その編成・実施・評価の諸原理および諸課題を、とくに中等教育に焦点を当てて解説する。それによって、学校での教育課程編成に関する基本的な視点の習得をめざす。

生徒にいつ、何を学ばせるかという議論は、これまで様々な観点から展開されてきた。とくに近年、各学校が自主的に教育課程を編成し、教育の多様化・個性化が進行する傾向にあって、教育課程は、それを実際に学ぶ生徒の実態にまで踏み込んで検討される必要に迫られている。そこで本講義では、学習指導要領の変遷および教育課程に関する諸理論を、われわれ自身の教育経験を捉え直しながら検討し、今日の教育課程をめぐる状況と問題点について考えていく。また、ユニークな教育課程をもつ事例校の教育実践を取り上げながら、学校における教育課程編成の方法と課題について考える。

2.授業内容<Course contents>

１．教育課程とカリキュラムの概念
２．学習指導要領の変遷
３．中等教育における教育課程の特質と問題点
４．教育課程の理論的背景
５．教育意図と学習経験のズレ
６．教育課程の評価と経営
７．学校における教育課程編成の実際

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料をコピーして配布する予定。参考書はその都度指定する。

4.成績評価の方法<Grading>

指定されたテーマによる期末レポートの提出とその内容（７０％）、授業中の発表や報告（３０％）によって行う。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

科目名<Subject>	総合演習 〈Seminar on Integrated Education〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	後期
担当教員名<Name>	岡部　善平 〈Yoshihei Okabe〉		研究室番号<Office>	４５４
Office Hours	メール等で事前に連絡してください			

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

この授業が対象とする「総合的な学習の時間」は、従来の教科・科目の枠にとらわれず、環境、異文化理解、情報、福祉などのテーマを各学校や教師が独自に設定し、授業を進めていく教育実践である。本授業では、中学校および高校の「総合的な学習の時間」の目的、課題と展望、実際の授業の進め方について、授業事例の収集および検討や模擬授業の実施を通して理解することを目的とする。

本授業では、受講者がそれぞれ自主的にテーマを設定し、指導案を作り、実際に模擬授業を行っていく予定である。したがって、本授業の受講者には、積極的にこの実技演習に参加することが求められる。

2.授業内容<Course contents>

１．総合的な学習の目的と意義
２．総合的な学習と教科学習との関係
３．総合的な学習の事例紹介
４．模擬授業のテーマ設定
５．テーマに関わる情報および事例収集
　　指導案の作成および教材研究
６．模擬授業

3.使用教材<Teaching materials>

必要な資料をコピーして配布する予定。参考書はその都度指定する。

4.成績評価の方法<Grading>

模擬授業の実施とその内容（６０％）、授業への参加状況（４０％）によって行う。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

履修条件ではないが、「教育方法」を履修済みであることが望ましい。

科目名<Subject>	職業指導 〈Vocational Guidance〉			
単位数<Credits>	4	配当年次<Years>	Ⅲ	通年
担当教員名<Name>	松田光一・上野耕三郎 〈Koichi Matsuda/Kozaburo Ueno〉		研究室番号<Office>	上野　３４１
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

教育職員免許法では、職業科目の免許状を取得するためには職業指導２単位を履修しなければならないが、中学校や高校では職業指導という名称は使わず進路指導といっている。進路指導は単に生徒の当面の進学指導や就職指導だけを意味するものではなく、広く将来の生き方に関わる部分も含めた教師による指導・援助の過程である。人間の生き方は職業と結びつけて考えられる部分が大きいので、職業をめぐる諸問題を多面的に学習し、進路指導に活かされることを目標に授業を進める予定である。

2.授業内容<Course contents>

(1)職業とは何か
(2)職業観・職業意識の変化
(3)産業社会の変動と職業
(4)職業指導の歴史
(5)日本の職業教育
(6)企業内教育訓練の系譜・職業資格制度と教育
(7)内部労働市場とキャリア発達
(8)進路選択の諸理論
(9)学校における進路指導の実際
(10)キャリア開発と生涯学習
(11)日本版デュアルシステムの展開
(12)フリーター・ニートをとりまく言説
(13)情報社会における職業指導
(14)職業指導の課題

3.使用教材<Teaching materials>

教科書は使用しない。受業にあわせてプリントを配付する。
参考文献、参考資料については受業中に指示する。

4.成績評価の方法<Grading>

出席、授業態度、レポート提出状況及び定期試験で総合的に判断する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

次の点を合格ラインの基準とする。
1）授業中に明示する重要なポイントを概ね理解していること。
2）学校における職業指導の実態とその課題を理解していること。
3）教員としてどのような指導ができるのか現実の問題としてとらえていること。

6.履修上の注意事項<Remarks>

出席を重視する。

科目名<Subject>	職業指導 〈Vocational Guidance〉			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	Ⅲ	前期
担当教員名<Name>	松田　光一 〈Koichi Matsuda〉		研究室番号<Office>	
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

教育職員免許法では、職業科目の免許状を取得するためには職業指導２単位を履修しなければならないが、中学校や高校では職業指導という名称は使わず進路指導といっている。進路指導は単に生徒の当面の進学指導や就職指導だけを意味するものではなく、広く将来の生き方に関わる部分も含めた教師による指導・援助の過程である。人間の生き方は職業と結びつけて考えられる部分が大きいので、職業をめぐる諸問題を多面的に学習し、進路指導に活かされることを目標に授業を進める予定である。

2.授業内容<Course contents>

(1)職業とは何か
(2)職業観・職業意識の変化
(3)産業社会の変動と職業
(4)職業指導の歴史
(5)日本の職業教育
(6)企業内教育訓練の系譜・職業資格制度と教育
(7)内部労働市場とキャリア発達
(8)進路選択の諸理論
(9)学校における進路指導の実際
(10)キャリア開発と生涯学習
(11)日本版デュアルシステムの展開
(12)フリーター・ニートをとりまく言説
(13)情報社会における職業指導
(14)職業指導の課題

3.使用教材<Teaching materials>

教科書は使用しない。受業にあわせてプリントを配付する。
参考文献、参考資料については受業中に指示する。

4.成績評価の方法<Grading>

出席、授業態度、レポート提出状況及び定期試験で総合的に判断する。

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

次の点を合格ラインの基準とする。
1）授業中に明示する重要なポイントを概ね理解していること。
2）学校における職業指導の実態とその課題を理解していること。
3）教員としてどのような指導ができるのか現実の問題としてとらえていること。

6.履修上の注意事項<Remarks>

出席を重視する。

国際交流科目

科目名<Subject>	中級ミクロ経済学 <Intermediate Microeconomics>			
単位数<Credits>	4	配当年次<Years>	Ⅱ	前期
担当教員名<Name>	藤生　源子 <Minako Fujio>		研究室番号<Office>	４１０
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

This course is an introduction to the basic tools of Microeconomic theory. The primary objective of this course is to develop and understand these tools and learn how to apply them to real world problems. A wide variety of applications of the theory will be presented throughout the course. By the end of the course you will have a deeper understanding of how economists analyze problems as well as skills to apply on your own.

2.授業内容<Course contents>

The topics covered in this course include: consumer theory, producer theory, competitive markets, market structure, general equilibrium, asymmetric information, market failure and the role of government.

3.使用教材<Teaching materials>

Robert S. Pindyck and Daniel L. Rubinfeld,
“Microeconomics” 6th edition.

4.成績評価の方法<Grading>

The course grade will be based upon class participation, quizzes, a mid-term exam and a final exam.

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

The details and changes will be announced at the beginning of the semester by the instructor.

科目名<Subject>	中級ミクロ経済学 <Intermediate Microeconomics>			
単位数<Credits>	4	配当年次<Years>	Ⅱ	後期
担当教員名<Name>	藤生　源子 <Minako Fujio>		研究室番号<Office>	４１０
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

This course is an introduction to the basic tools of Microeconomic theory. The primary objective of this course is to develop and understand these tools and learn how to apply them to real world problems. A wide variety of applications of the theory will be presented throughout the course. By the end of the course you will have a deeper understanding of how economists analyze problems as well as skills to apply on your own.

2.授業内容<Course contents>

The topics covered in this course include: consumer theory, producer theory, competitive markets, market structure, competitive strategy, information, market failure and the role of government.

3.使用教材<Teaching materials>

Robert S. Pindyck and Daniel L. Rubinfeld, Microeconomics

4.成績評価の方法<Grading>

The course grade will be based upon class participation, quizzes, a mid-term exam and a final exam.

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

The details and changes will be announced at the beginning of the semester by the instructor.

科目名<Subject>	日本経済 <Japanese Economy>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	前期
担当教員名<Name>	横田　宏治 <Koji Yokota>		研究室番号<Office>	５２０
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
This is an application course of economics which analyzes Japanese economy using theoretical tools. It mixes lectures and presentation and discussion sessions by students. The topics are chosen from the current status and modern economic history of Japan.

2.授業内容<Course contents>
"Rapid growth" in 1950-70's, bubble economy, depression and credits, scope of firms, international trade and other topics.

3.使用教材<Teaching materials>
Bibliography will be provided in the class.
References
Flath, The Japanese Economy, Oxford University Press, 2000.
Ito, The Japanese Economy, MIT Press, 1992.
Nakamura, The Postwar Japanese Economy, 2nd ed., University of Tokyo Press, 1995.

4.成績評価の方法<Grading>
Grading is based on attendance, quality of presentation and an examination.

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>
Prerequisites: Intermediate Macroeconomics or equivalent.

科目名<Subject>	アジア太平洋におけるマーケティング戦略<Marketing Strategy in Asia and Pacific>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	III	前期
担当教員名<Name>	ニール・クライマー <Neil Clymer>		研究室番号<Office>	４４０
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>
The primary objective of this course is to introduce students to both strategic management and marketing related issues that face Asian companies. The classes will be conducted the same way as many MBA courses, lectures followed by case studies that serve to reinforce the lecture material. The instructor will present the lectures and will act as facilitator for student driven case study discussions. This course will challenge students to apply their knowledge and critical thinking skills in the context of real-life business dilemmas.

2.授業内容<Course contents>
A tentative outline of the lectures is as follows:
1.Outline for the course
2.National markets in Asia-Pacific
3.Strategic planning / Case 1: INSEAD Asia
4.Brand management / Case 2: Acer & BenQ
5.Pricing / Case 3: Shanghai Underwater World
6.Promotion / Cases 4: French wine in Asia
7.Distribution / Case 5: Super Premium Cold Chain
8.New market entry / Case 6: QB House
9.Internet marketing in Asia / Case 7: Alibaba.com
10.Group presentations
11.Group presentations
12.Market infrastructure / Case 8: Broadband in Korea
13.Marketing strategy / Case 9: NTT DoCoMo i-mode
14.Impact of social issues / Case 10: The GM Dilemma
15.Final exam

3.使用教材<Teaching materials>
Each student who participates in this course is required to purchase the casebook listed below:
Schutte, Hellmut, Ang, Swee Hoon, Leong, Siew Meng, & Tan, Chin Tiong, Marketing Management – An Asian Casebook, Singapore, Pearson. (ISBN: 981-244-561-7).

4.成績評価の方法<Grading>
Grading will be based on class participation, homework, a group presentation, and a final exam. Further details will be provided at the beginning of the course.

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>
All lectures will be conducted in English. Students attending this class must have a working knowledge of computers and will have to use the Internet in their studies. The instructor will post class assignments.

科目名<Subject>	世界の中の日本企業 <Japanese Companies in Global Business>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	III	前期
担当教員名<Name>	ニール・クライマー <Neil Clymer>		研究室番号<Office>	４４０
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

Institutional factors implicit in cross-border transactions, differences in national economies, and a panorama of cultural propensities distinguish competition in the global marketplace. Students will learn how firms confront these issues. We will place special emphasis on how Japanese firms (and to a lesser degree, how foreign firms in Japan) address the challenges of global business. Class material will be primarily based on the textbook. Class time will consist of instructor presentation and student discussion of the reading material.

2.授業内容<Course contents>

An outline of course is as follows:
1.Outline for the course
2.International legal, technical, and political forces
3.International trade theories
4.National and international trade policies
5.International monetary system and financial markets
6.International strategic management
7.Strategies for analyzing and entering foreign markets
8.International strategic alliances
9.International organizational design and control
10.International operations management
11.International financial management
12.Cultural factors that differentiate national markets
13.International human resource management
14.Ethics and social responsibility in international business
15.Final exam

3.使用教材<Teaching materials>

Each student who participates in this course is required to purchase the textbook listed below:
Griffin, Ricky W., & Pustay, Michael W. (2005). International Business: A Managerial Perspective, 4/e (International Edition). Upper Saddle River, New Jersey: Prentice Hall. (ISBN: 0-13-123017-4)

4.成績評価の方法<Grading>

Grading will be based on class participation, homework assignments, a two person partnership class report, and a final exam. Further details regarding the grading will be provided at the beginning of the course.

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

All lectures will be conducted in English. Students attending this class must have a working knowledge of computers and will have to use the Internet in their studies. The instructor will post class assignments.

科目名<Subject>	日本的経営入門 <Introduction to Japanese Management>			
単位数<Credits>	2	配当年次<Years>	II	後期
担当教員名<Name>	ニール・クライマー <Neil Clymer>		研究室番号<Office>	４４０
Office Hours				

1.授業の目的・方法<Course objective and method>

The aim of this course is to introduce students to Japanese management. This class will familiarize students with management related topics such as the working environment, as well as institutional factors and principles of management that prevail in Japanese companies. Special emphasis will be placed on management in Japanese manufacturing companies and historical and institutional factors that shape Japanese management. Class time will consist of instructor presentation and student discussion of the reading material.

2.授業内容<Course contents>

1.Outline, basic facts, early commercial history
2.Japan's post Meiji Restoration industrial history
3.The Japanese Multinational Corporation & Important Japanese industries
4.Important Japanese industries - 2
5.Corporate structures & HRM theory
6.Corporate governance & HRM policy
7.U.S. versus Japanese company comparisons
8.Mid-semester review
9.Manufacturing at Toshiba Ome Works & Toyota
10.Toyota Manufacturing System - 1
11.Toyota Manufacturing System - 2
12.Technology & intellectual property management
13.Foreign operations & social responsibility
14.Review
15.Final exam

3.使用教材<Teaching materials>

Each student who participates in this course is required to purchase the books listed below:
Jacoby, Sanford M. (2005), The Embedded Corporation, Princeton University Press
(ISBN: 0-691-11999-6) and
Liker, Jeffrey. (2004) The Toyota Way. McGraw-Hill (ISBN: 0-07-139231-9).

4.成績評価の方法<Grading>

Grading will be based on class participation, an individual report concerning a topic related to Japanese management, and a final exam. Further details regarding the grading will be provided at the beginning of the course.

5.成績評価の基準<Grading Criteria>

6.履修上の注意事項<Remarks>

All lectures will be conducted in English. Students attending this class must have a working knowledge of computers and will have to use the Internet in their studies.

研 究 指 導

研究指導は２年連続で８単位

担当教員名 Seminar Name	テ　ー　マ	概　　要
経済学科 遠　藤　　薫 Kaoru Endo	3年次 　データを統計ソフトウエアで扱えるようにする。基本的な統計と利子率に関する計算が行えるようにする。グラフを描いてレポート等で利用できるようにする。 4年次 　基本的なモデルについて計量経済分析を行う。	2007年度は3、4年合同ゼミとする。情報処理センターの統計ソフトウエアR, SAS,Stataを利用する。 1つの文を削除 　2008年度も統計ソフトウエアを利用する。
経済学科 加　藤　睦　洋 KATO Mutsuhiro	政治、経済、社会、文化、文明、歴史等について、広く・浅く勉強する。 　この地球上の人間社会、そこにおけるさまざまな人間達の生きざまと死にざま、の百態を知ることを通じて人間なるものを、多角的・複眼的に理解せんとする。 　世間的通説とは異なった観点・視点にも、注意を向ける。	通常のゼミナール形式で行う。テキストを読んで要旨を報告し、議論する。 　欠席に対しては、厳しい態度で臨む。
商学科 中浜　　隆 Takashi Nakahama	保険制度と保険業（保険に関することを学習します）	３年生:研究主題に関する専門書を読んで討論します。 ４年生:研究主題に関する専門書を読んで討論します。また、卒業論文の作成を指導します。
企業法学科 片桐　由喜 Yuki Katagiri	少子高齢社会の到来、低成長、財政難等のために、近年、年金や医療などの社会保障関連の法律や制度が大きく改正されている。そこで本ゼミでは、今、現にある社会保障制度上の諸問題は何か、どうしてそれが発生したのか、どうすれば良いのかなどを、具体的な事例や判例等を通して検討していく。	あらかじめ指定したテーマや判例について履修者全員に何らかの形で報告を求める。作業としては判例の要約、制度の紹介、当該テーマ等に対する各自の意見などである。

担当教員名 Seminar Name	テ　ー　マ	概　　要
社会情報学科 石井　利昌 Toshimasa Ishii	近年のコンピュータの発達に伴い，社会現象を数理的に解析することの重要性がますます高まってきています．当ゼミでは，社会に現れる諸問題に対する意思決定を効果的に行うための数理的な手法であるオペレーションズ・リサーチ(Operations Research，OR）と呼ばれている分野が研究対象になります．その中でも特に，組合せ最適化問題とその解法　(アルゴリズム)を中心に扱います．組合せ最適化問題とは，与えられた条件を満たす組合せの中から最良の組合せを求める問題であり，スケジューリング，配送計画，ネットワーク設計，経路探索，生産計画などその応用範囲は大きな広がりを持っています．　これらの研究を通して，論理的な思考力，自ら問題を見つけ解決していく能力を養うことを目指します．	3年次は，基礎文献の輪読，演習を行いながら，基礎的な知識を身につけます． 4年次は，各人が興味のあるテーマを選択し，そのテーマに関する研究を進め，卒業論文を完成させます．また，卒業論文のテーマについては，　ORの分野内であれば上記の研究主題以外でも構いません．
専門共通 片　岡　正　光 Masamitsu Kataoka	①自然環境中の微量の化学物質量を，超高感度・高精度・高選択的に測定する「微量分析法」の開発。 ②環境中の化学物質を常時モニターするための化学センサーの開発。 ③小樽周辺の水に着目し，河川，運河，港湾水や港湾に生息する魚に含まれる汚染物質の測定を行い，環境浄化についての提言を行う。 ④小樽の降雨・降雪の酸性度の測定と、土壌の中和能の評価。	ゼミ生は研究主題に関連したテーマをもらい，教官とディスカッションしながら、それぞれが独自の研究を展開する（毎週２日（火、木曜日それぞれ４時間程度）。 化学系大学院（北大）への進学を希望する学生には，化学研究実験の他に試験合格を目指したゼミ（教科書の輪読等）指導も行う（多数合格実績あり）。
専門共通 君羅　久則 Hisanori Kimira	英文学（シェークスピア・英詩・ドラマ・イギリス小説）	3年次：テキストに基づいて、毎週英詩数編を読み、発表・討論を行い、英詩の分析法を中心に文学批評・研究の方法を深めていきます。 4年次：前期は3年次の続きを行い、後期からは各自の研究テーマについて卒業論文（英文４０枚程度）を最終目的として報告と討論を中心にします（卒業論文を選択した学生が対象）。卒業論文を選択しない学生は後期もテキストに基づいて3年次の続きを行います。

１．　平成１９年度　開　講　科　目

A　共通科目

基礎科目　◇印は平成１６年度以降新設授業科目

平成１５年度以前入学生は、P182～P183　の科目対応表に注意すること

系	授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
人間と文化	哲学	2	I	後期	金7	久保田　顕二	49	
	論理学							非開講
	倫理学							非開講
	宗教学							非開講
	心理学Ｉ							非開講
	心理学II	2	I	後期	木6	杉山　成	49	
	教育学							非開講
	日本文学Ｉ							非開講
	日本文学II	2	I	後期	木6	中村　史	50	
	外国文学Ｉ							非開講
	外国文学II	2	I	夏学期	別途通知	鈴木将史	50	
	文化論							非開講
	言語学	2	I	後期	木6	山田　久就	51	
	言語コミュニケーション論							非開講
	外国事情	2	II					(注)
社会と人間	科学方法論	2	I	前期	木6	佐々木邦子	53	
	社会科学							非開講
	歴史学Ｉ	2	I	夏学期	別途通知	荻野　富士夫	51	
	歴史学II							非開講
	社会思想史Ｉ							非開講
	社会思想史II	2	I	後期	水7	西永　亮	52	
	政治学Ｉ	2	I	前期	火7	相内　俊一	52	
	政治学II							非開講
	社会学Ｉ	2	I	夏学期	別途通知	宝福　則子	53	
	社会学II							非開講
	文化人類学							非開講
自然と環境	◇数学Ｉ							非開講
	◇数学II	2	I	後期	水6	米田　力生	54	
	物理学Ｉ	2	I	前期	月6	杉之原　立史	54	
	物理学II							非開講
	化学Ｉ							非開講
	化学II	2	I	前期	火7	片岡　正光	55	
	生物学Ｉ							非開講
	生物学II	2	I	後期	水7	八木　宏樹	55	
	環境科学							非開講
商学部基礎	経済学概論							非開講
	商学概論							非開講
	法学概論							非開講
	◇法学	2	I	前期	木6	道野　真弘	95	
	社会情報概論							非開講
	◇社会情報入門	2	I	後期	金7	大津　晶 木村　泰知	110	

商	総合科目Ⅰ	2	Ⅰ	前期	金7	倉田　稔　外	56	
学	◇総合科目Ⅱ	2	Ⅰ	前期	火7	江頭　進　外	56	
部	情報処理入門							非開講
基	◇基礎数学	2	Ⅰ	後期	火7	兼岩　龍二	57	
礎	基礎ゼミナール	2	Ⅰ	前期	水6	大津晶　外	57～59	

(注意)「経済学概論」と「商学概論」については、Pの科目対応表を参照すること。

系	授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
健	生活と健康	2	Ⅰ	後期	火7	田野　有一	60	
	予防の医学							非開講
	健康スポーツ a	1	Ⅰ	前期	月6	田野　有一	60～62	
	健康スポーツ b	1	Ⅰ	後期	月6	花輪　啓一		
康	健康スポーツ e (水泳)	1	Ⅰ	夏季集中		中川　喜直		
	健康スポーツ f (スキーⅠ)	1	Ⅰ	冬季集中		石崎　香理		
科	健康スポーツ g (スキーⅡ)	1	Ⅱ	冬季集中		山本　哲二		
						山田　亮		
学						堤　毅		

(注) 外国事情の単位については、学則第38条の規定に基づく学生の留学における単位互換認定に充てる。

B　外国語科目等
外国語科目

授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
英語ⅠA	2	Ⅰ	通年	月7		65	
英語ⅠB	2	Ⅰ	通年	金6		66	
英語ⅡA	2	Ⅱ	通年	金7		67	
英語ⅡB	2	Ⅱ	通年	月6		68	
ドイツ語Ⅰ	4	Ⅰ	通年	火6・木7		71	
フランス語Ⅰ	4	Ⅰ	通年	火6・木7		72	
中国語Ⅰ	4	Ⅰ	通年	火6・木7		72・73	

C　学科科目

経　済　学　科

※平成１５年度以前入学生は、P184～P185　の科目対応表に注意すること。
◇印は平成１６年度以降新設授業科目

講座		授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
基礎経済学	基幹科目	経済理論Ⅰ							非開講
		◇経済学入門	2	Ⅰ	前期	水7	中村　健一	77	
		経済と統計	2	Ⅰ	前期	火7	遠藤　薫	78	
		経済史Ⅰ							非開講
		◇経済史	2	Ⅱ	前期	木6	平井　進	78	
	発展科目	経済理論Ⅱ							非開講
		◇経済理論	2	Ⅱ	前期	木7	加藤　睦洋	77	
		マルクス経済学							非開講
		経済思想史	2	Ⅱ	前期	火6	江頭　進	79	
		経済史Ⅱ							非開講
		経済データ分析の方法							非開講
応用経済学	発展科目	公共政策	2	Ⅱ	後期	火6	角野　浩	80	
		金融経済							非開講
		国際経済と現代							非開講
		応用ミクロ経済学	2	Ⅱ	後期	火7	鵜沢　秀	79	
	基幹科目	経済学と現代	2	Ⅰ	後期	月7	若井　克俊	80	
	発展科目	経済書講読Ⅰ							非開講
		経済書講読Ⅱ	2	Ⅱ	前期	月6	今西　一	81	
		◇経済学演習Ⅰ							非開講
		◇経済学演習Ⅱ							非開講
		◇経済学演習Ⅲ	2	Ⅲ･Ⅳ	前期	金6	和田　良介	81	
		◇経済学演習Ⅳ	2	Ⅲ･Ⅳ	後期	金6	加藤　睦洋	82	
		インターンシップ	2	Ⅲ･Ⅳ	通年	別途通知	遠藤　薫外	82	
		卒業研究	4	Ⅲ				早期卒業者に限る	
	研究指導		8	Ⅲ･Ⅳ	通年			141	
	研究指導Ⅰ		4	Ⅲ	通年			141	9年度カリ
	研究指導Ⅱ		4	Ⅳ	通年			141	9年度カリ
	卒業論文		4	Ⅳ	通年				

(注) 備考欄に「9年度カリ」と記載された科目は、平成１２年度以前入学生用の科目ですので、
平成１３年度以降入学生は履修することはできません。

商　学　科

※平成１５年度以前入学生は、P185～P186　の科目対応表に注意すること。
◇印は平成１６年度以降新設授業科目

講座		授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
商学	基幹科目	市場システム論							非開講
		◇市場システム論Ⅰ	2	Ⅱ	前期	水6	高宮城朝則	87	
		◇市場システム論Ⅱ	2	Ⅱ	後期	水6	近藤　公彦	87	
	発展科目	金融システム論							非開講
		◇金融システム論Ⅱ	2	Ⅲ･Ⅳ	前期	火6	中浜　隆	88	
		国際市場論Ⅰ							非開講
		国際市場論Ⅱ							非開講
		◇国際市場論	2	Ⅲ･Ⅳ	後期	金7	穴沢　眞	88	
		商学特講							非開講
経営学	基幹科目	経営学原理	2	Ⅰ	前期	月7	小田　福男	89	
	発展科目	経営管理論	2	Ⅱ	後期	木6	田中　幹大	89	
		◇経営史							非開講
		現代企業管理論Ⅰ	2	Ⅲ･Ⅳ	夏学期	別途通知	岩田　智	90	
		現代企業管理論Ⅱ	2	Ⅲ･Ⅳ	夏学期	別途通知	牧田　正裕	90	
		国際ビジネス論							非開講
会計学	基幹科目	簿記論							非開講
		◇簿記原理	2	Ⅰ	前期	木6	坂柳　明	91	
	発展科目	財務会計論							非開講
		◇会計学原理	2	Ⅱ	前期	木6	福島　吉春	91	
		原価計算論							非開講
		管理会計論	4	Ⅲ	通年	金7	乙政　佐吉	193	
	発展科目	英語コミュニケーションⅠ							非開講
		英語コミュニケーションⅡ							非開講
		比較文化Ⅰ							非開講
		比較文化Ⅱ							非開講
		インターンシップ	2	Ⅲ･Ⅳ	通年	別途通知	大矢繁夫外		
		卒業研究	4	Ⅲ				早期卒業に限る	
	研究指導		8	Ⅲ･Ⅳ	通年			141	
	研究指導Ⅰ		4	Ⅲ	通年			141	9年度カリ
	研究指導Ⅱ		4	Ⅳ	通年			141	9年度カリ
	卒業論文		4	Ⅳ	通年				

(注) 備考欄に「9年度カリ」と記載された科目は、平成１２年度以前入学生用の科目ですので、
平成１３年度以降入学生は履修することはできません。

企 業 法 学 科

※平成１５年度以前入学生は、P187 の科目対応表に注意すること。
◇印は平成１６年度以降新設授業科目

講座		授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
基礎法	基幹科目	憲法Ⅰ	2	Ⅰ	前期	木7	結城洋一郎	95	
		民法Ⅰ	2	Ⅰ	前期	火6	林　誠司	96	
	発展科目	◇憲法Ⅱ							非開講
		行政法Ⅰ	2	Ⅲ･Ⅳ	後期	木6	今本　啓介	97	
		民法Ⅱ							非開講
		刑法	2	Ⅱ	後期	水6	一原亜貴子	96	
		国際法	2	Ⅱ	前期	木6	佐古田　彰	97	
企業法	基幹科目	商法Ⅰ	2	Ⅱ	前期	月7	玉井　利幸	98	
	発展科目	商法Ⅱ	2	Ⅲ･Ⅳ	後期	月6	多木誠一郎	98	
		民事手続法	2	Ⅱ	後期	火7	河野憲一郎	99	非開講
		経済法	2	Ⅲ･Ⅳ	前期	金6	岡本　直貴	99	非開講
		労働法							
		社会保障法	2	Ⅲ･Ⅳ	前期	月6	片桐　由喜	100	非開講
		国際経済法							非開講
		国際取引法	2	Ⅲ･Ⅳ	後期	木7	中村　秀雄	100	未定
	発展科目	インターンシップ	2	Ⅲ･Ⅳ	通年	別途通知	多木誠一郎外	101	
		卒業研究	4	Ⅲ				早期卒業者に限る	
	研究指導		8	Ⅲ･Ⅳ	通年			141	
	研究指導Ⅰ		4	Ⅲ	通年			141	9年度カリ
	研究指導Ⅱ		4	Ⅳ	通年			141	9年度カリ
	卒業論文		4	Ⅳ	通年				

(注) 備考欄に「9年度カリ」と記載された科目は、平成１２年度以前入学生用の科目ですので、
平成１３年度以降入学生は履修することはできません。

社 会 情 報 学 科

※平成15年度以前入学生は、P188 の科目対応表に注意すること。
◇印は平成16年度以降新設授業科目

講座		授業科目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備考
計画科学	基幹科目	オペレーションズ･リサーチ	2	II	前期	木6	行方 常幸	106	
	発展科目	統計科学	2	II	後期	月7	小笠原 春彦	105	
		社会計画							非開講
		計画科学	2	III･IV	前期	月6	石井 利昌	106	
組織と情報	基幹科目	情報システム管理論							非開講
	発展科目	プロジェクト実践論	2	II	前期	月7	酒井 弘一 平沢 尚毅	107	
		組織コミュニケーション論							非開講
		組織情報論							非開講
		社会情報論							非開講
		情報システム構築論							非開講
		応用プロジェクト方法論							非開講
		ビジネスシステム論							非開講
		◇情報システム論							非開講
社会と情報	基幹科目	知識科学基礎	2	II	前期	金6	木村 泰知	108	
	発展科目	情報処理							非開講
		コンピュータネットワーク論	2	III･IV	後期	木6	三谷 和史	109	
		情報と職業	2	III･IV	前期	水6	小山 正芳	109	
	基幹科目	計画数学 I							非開講
		◇計画数学	2	II	後期	金6	中村 隆志	105	
		経営システム基礎	2	II	前期	木7	持田 泰昭 阿部孝太郎	107	
		情報処理基礎	2	I	後期	木7	沼澤 政信	108	
	発展科目	社会情報特講 I							非開講
		社会情報特講 II							非開講
		インターンシップ	2	III･IV	通年	別途通知	佐山公一外	110	
		卒業研究	4	III				早期卒業者に限る	
	研究指導		8	III･IV	通年			142	
	研究指導 II		4	IV	通年			142	9年度カリ
	卒業論文		4	IV	通年				

(注) 備考欄に「9年度カリ」と記載された科目は、平成12年度以前入学生用の科目ですので、
平成13年度以降入学生は履修することはできません。

専 門 共 通 科 目

※平成15年度以前入学生は、P189 の科目対応表に注意すること。

授　業　科　目	単位数	配当年次	実施期間	時間割	担当教員	ページ	備　考
人間と文化論							非開講
現代社会と歴史論							非開講
社会心理と政治行動							非開講
国際関係論	2	II	※国際連合大学の単位互換認定				
環境サイエンス論							非開講
サイエンス原論							非開講
人間科学論	2	II	前期	火6	石崎　香理	115	
言語文化論	2	II	前期	水6	裴崢外	115	
研究指導	8	III･IV	通年			142	
研究指導Ⅰ	4	III	通年			142	9年度カリ
研究指導Ⅱ	4	IV	通年			142	9年度カリ
卒業論文	4	IV	通年				

(注) 備考欄に「9年度カリ」と記載された科目は、平成12年度以前入学生用の科目ですので、
平成13年度以降入学生は履修することはできません。